

「X
接点
」

Copyright©2026 D³S

み
ち
た
け

設定資料

タイトル

全体あらすじ

シリーズ構成

記号

「X接点」

新入社員 大谷博紀の周りで起こるサラリーマンの裏事情
そこには、彼を狙う上司、お局様立ち。
そして、大谷の前に現れた 謎の男 古屋。サラリーマンの裏恋事情の行方に
目が離せません

※本作品は、過去のところどころで、フラッシュバックし、過去の回想を多く
取り入れてます。

全三シーズン

・「X接点」

・「X接点Ⅱ」

・(仮タイトル)「X接点Ⅲ」奇跡の贈り物」

□第〇幕 サブタイトル

・小見出し

Copyright©2020 D's

○場所

▽ト書き

(# フラッシュバック #)

画面をフラッシュさせる

←# 回想 #←

→# 現在に戻る #→

回想シーンに移る時

←# インサート #←

→# インサート #→

短時間動画を挟み込む

Copyright@2026 D³S

大谷 博紀（おおたに ひろき）二十三歳

営業一課 所属

今年の新入社員

住まいは、木造二階建ての2Kのアパート

古屋 豪（ふるや たけし）三十二歳

システム部所属

謎の社員である

住まいは、そこそこ広いワンルームマンション

亀山 麻里（かめやま まり）二十八歳

営業一課

会社内で、お局的な存在

古屋に密かに恋をしている

林 （はやし）二十六歳

営業一課 女子社員

亀山の後輩で、2歳下

Copyright © 2020 D's

松本 (まつもと) 二十四歳

営業一課 女子社員

林の後輩にあたる

大谷とは、一年先輩

元気で活発。おしゃべりで、社内の噂話しを色々と収集している

渡辺 (わたなべ)

営業部部长

実は、もう一つの物語で出てくる渡辺部長とは兄弟である

野崎 (のざき)

営業一課 課長

大谷を狙っている同性愛サラリーマン

上司の子息に手を出し、会社を解雇され ゲイバーの雇われマスターとなる

山下 (やました)

営業一課 主任

小村 健一 (こむら けんいち)

高校時代 大谷の一つ上の先輩であるが、古屋の恋人でもあった

ゲイバーでボーイをしている

※別作品で主要人物として出演

大谷 直人（おおたに なおと）

大谷の父 知り合いの借金の保証人になり、借金取りの取り立てに危険を感じ大谷が小学生〇年生の時に大谷をおいて失踪その後、借金を返済するが亡くなる

※別作品でも主要人物として出演

その他 社員

川端 （かわばた）

営業一課 課長 野崎の後任

森崎 （もりさき）

営業二課 社員

影山（かげやま）

総務課

大谷の同期

榎木（えのき）

東京支店に勤務

大谷の同期

片岡（かたおか）

大谷の同期。開発部に所属

鈴木（すずき）

総務課所属

社内ではお局的な存在だが、亀山より後輩の為、亀山には逆らえない
独身で、若い男の子を家に呼び遊んでいる

杉本（すぎもと）

システム課 課長

古屋の上司に当たる

中島（なかじま）

営業一課 大谷の一年先輩になる

Copyright © 2026 D's

地名など

亀山家

家は郊外の住宅地にあり2階建ての一軒屋

母 父

妹・千里（ちさと）二十一歳 大学生

丸尾昭博（まるお 昭博）二十一歳 大学生

香（香）二十一歳 大学生

千里の友だち

会社名

P & H 商事株式会社（ピーアンドエイチ株式会社）
国内大手の商社

目次

内容

「X接点」	1
設定資料	2
タイトル 「X接点」	2
全体あらすじ	2
シリーズ構成	2
登場人物	4
地名など	8
目次	9
「X接点」(第一話)	26
サブタイトル「歓ゲイ会での出来事」	27
あらすじ	27
新入社員歓迎会で、上司の野上にせまられるところを、古屋に助けられる	27
登場人物(本話のみ)	27
□第一幕 歓ゲイ会	28

○(朝) ビジネス街	28
○(夕方) P&H商事 事務所	29
○(夜) 居酒屋の中 大谷と野崎の席	31
○亀山 林 松本が、座っている場所	36
○(夜) スナックの前の道	37
□第○幕 サウナにて	41
○雑居ビルのエレベーター前	41
○サウナ受付のカウンター	42
○ロッカールームの前	43
○洗い場	44
○サウナルーム	45
○(深夜) 雑居ビルの外	52
□第○幕 古屋のマンションでの出来事	55
○(深夜) 古屋の住んでいる ワンルームのマンション	55
○古屋の部屋	62
○(翌朝) 古屋の部屋	63
「X接点」(第二話)	69

サブタイトル「裏切り者には制裁を」	67
あらすじ	67
登場人物（本話のみ）	67
□第一幕 野崎からのパワハラ	68
○（月曜日の朝） P & H商事株式会社 給湯室	68
○古屋の席	69
○（始業時間後） 事務所	71
○給湯室	76
□第二幕 紛失した契約書	80
○（ある日昼食が終わった午後） 事務所内	80
○男子トイレの中	82
○事務所	82
○エレベーターの前	83
○事務所	85
○トイレの前	86
○（夕方） 会社ビルの玄関 大谷が待っている	88
○（数分後） 会社近くの繁華街	89

エラーブックマークが定義されていません。

○ (夜) 古屋の家	90
○ (深夜) 古屋の部屋のベット	91
第三幕 野崎の転落	92
○ (夜) 某ゲイバーの中	92
○ (深夜) ラブホテルの建物から数メートル離れた電柱の影	94
○ ラブホテルの入口	96
○ (翌日の朝) P & H商事株式会社の事務所	97
○ 部長室	97
○ 営業一課	100
「X接点」(第三話)	102
サブタイトル「大谷の誕生日」	103
あらすじ	103
登場人物(本話のみ)	103
□ 第一幕 ある土曜日	104
○ (土曜の朝) 古屋のマンション	104
○ (昼すぎ) 古屋の家のリビング	112
○ (夜) 古屋の部屋のベット	112

□第二幕 (仮称) ユニバーサル・ランド	118
○(土曜日の昼過ぎ) テーマパーク (仮称) ユニバーサル・ランド	118
○コースターの列	118
○テーマパーク内のアケード	120
○遊園地の迷子センター	126
○遊園地の帰り 古屋の運転する車の中	128
○大谷のアパートの前	128
○大谷の部屋	130
第三幕 会社で一番怖いのはOL	133
○(日曜日 夕方) 繁華街	133
○古屋、大谷の反対側の歩道	134
○イタリアンレストラン	137
○イタリアンレストランの古屋 大谷の席	138
○松本の部屋	139
○(次の日の朝) P&H商事株式会社の給湯室	140
○(昼) 事務所 大谷の席	141
○(夕方) 会社近くの喫茶店	143

○ 繁華街の道	147
「X接点」(第四話)	149
サブタイトル「亀山と古屋」	150
あらすじ	150
会社のお局を敵に回してしまった大谷	150
登場人物(本話のみ)	150
□ 第一幕 嫌がらせ	151
○ (翌日の昼過ぎ) P & H商事株式会社の事務所 大谷の席	151
○ (翌日) 会社 大谷の席	154
○ (ある日の朝) 会社 大谷の席	161
○ 事務所 古屋の席	162
○ サーバルーム	163
○ (数分後) 事務所 杉本の席	164
○ (数日経過後の昼休み) 会社近くの道	165
□ 第二幕 マグカップの想い出	170
○ (翌日の朝) 事務所 大谷の席	170
○ 男子トイレの個室の中	174

○ 給湯室	172
□ 第三幕 古屋と亀山の出会い	178
○ (十五時のお茶の時間が終わった) 給湯室	178
← # 回想 # ← 数年前 亀山 入社当時)	179
○ (定時後) 事務所 亀山の席	179
○ (二十二時) 会社 亀山以外誰もいない	182
→ # 現在に戻る # →	184
○ (現在) 会社の給湯室	184
○ (就業時間後) 古屋の席	186
□ 第四幕 デパートにて	188
○ (夕方) 百貨店の食器売り場	188
← # 回想 # ← 亀山 古屋のもう一つのできごと	189
□ 第○幕 亀山が、給湯室で倒れ、古屋のマグカップを割ってしまう。エラーブックマークが定義されていません。	
○ (前回の出来事から さらに数ヶ月後) 事務所	189
○ 給湯室	190
○ ビルの医務室	191
○ (翌日) 会社 古屋の席	195

○ (就業時間後) どこかの百貨店	194
→ # 現在に戻る #→	196
○ (現在) デパート	197
○ (夜) 道	197
○ 公園の前	198
「X接点」 (第五話)	200
サブタイトル「大谷 ピンチ 再び」	201
あらすじ	201
登場人物 (本話のみ)	201
□ 第一幕 仲直り	202
○ (翌日の朝) 会社 大谷の席	202
□ 第二幕 女王様の宴 もう一人のお局 (大谷 ピンチ!)	209
○ 会社の廊下	209
○ (その週末の土曜日の昼) 鈴木のマンスションのドア	212
○ 鈴木のマンスションの部屋	213
○ (月曜日の朝) 会社 古屋の席	225
○ 会社 総務課の前の廊下	226

○エレベーターの中	231
「X接点」(第六話)	232
サブタイトル 「プール」	233
あらすじ	233
大谷、古屋、亀山は、プールに遊びに行きます	233
そこで、迷子を見つけ親探しを	233
古屋、亀山は、どうして迷子に敏感なのかを大谷に尋ね、	233
大谷の幼少期にあった出来事を知ります	233
登場人物(本話のみ)	233
□第一幕 プールにて	234
○(夏の暑い日)屋外プール	234
□第二幕 (回想)大谷の父とプール	234
←# 回想 #← 大谷 父とプールでの思い出	238
○プールサイド	238
○流れるプールの中	240
○(夕方)プール	241
○プールの事務所	247

エラーブックマークが定義されていません。

○大谷の住んでいるアパート	242
→# 現在に戻る #→	243
○大谷の部屋	243
□第三幕 大谷の高校生の時代へ	
←# 回想 #← 大谷 高校二年生	245
○小村の家 小村の部屋	245
○小村の家の駐車場	247
○中年男性の部屋	249
○カメラ屋の前	252
○(その夜) 大谷の入っている施設 大谷の部屋	253
→# 現在に戻る #→	253
○大谷の部屋	253
第四幕 大谷が発熱	254
○(プールへ行った翌日の月曜日) 事務所	254
○大谷の部屋	262
○夜道	265
○駅の改札、	268

エラーブックマークが定義されていません。

○ 亀山家の玄関	266
○ 亀山家 リビング	267
○ (翌日の朝) 会社の給湯室	268
□ 第○幕 (回想) 大谷の入社面接	エラーブックマークが定義されていません。
← # 回想 #← 大谷の入社試験	258
○ 会社の会議室	258
→ # 現在に戻る #→	260
○ 大谷の部屋	261
「X接点」(第七話)	271
サブタイトル ～大谷の恋人候補～	272
あらすじ	272
登場人物 (本話のみ)	272
□ 第一幕 大谷に恋人をつくらう	273
○ (夕方) 会社のビルの前	273
○ レストランの中	275
□ 第二幕 妹 登場	279
○ (その日の夜) 亀山家のビング	279

○ (翌週の日曜日の朝) 駅前 待ち合わせ場所	282
○ 電車の中	284
○ ユニバーサル・ランド	285
○ テーマパーク内の休憩所	286
□ 第三幕 昭博との再開	288
○ (ある日の土曜日) 街のどこかの待ち合わせ場所	288
← # 回想 # ← 鈴木の一部屋での出来事	290
○ 鈴木のマンスションの部屋	290
→ # 現在に戻る # →	291
□ 第四幕 昭博に誘われて	298
○ (翌日の日曜日) 古屋の家	298
○ (土曜日の夜) 繁華街の居酒屋	300
○ (深夜) カラオケ店の前	301
○ (三十分後) 昭博の住んでいるマンション部屋	305
○ (深夜) タクシーの中	317
□ 第五幕 微妙な距離の人	318
○ (ある日の夜) レストラン	318

○ (その日の夜) 亀山家 千里の部屋	320
○ (夜) 大谷の部屋	322
□ 第六幕 千里とのデート	324
○ (翌日の昼) 街中	324
○ ホテルのプールのフロント	325
○ (夜) ホテルを出た道	333
「X接点」 (第八話)	336
サブタイトル「いつかの河原にて」	337
あらすじ	337
千里の関係を維持できなかった大谷	337
大谷は 古屋に自分の気持ちを正直伝えます	337
そして、古屋の答えは	337
登場人物 (本話のみ)	337
□ 第一幕 許しあった夜	338
○ (夜) 飛行場近くの土手	338
○ (その夜) 古屋の部屋	343
□ 第二幕 二つの約束	21

○ (翌朝) 会社の事務所 入口	343
○ (一週間後) 古屋のマンション	345
□ 第三幕 　　寒い季節がやってきた	348
○ (夜) 新幹線の中 古屋 大谷が座っている席	348
○ (翌日) 会社の事務所	352
○ (退社時刻を過ぎた) 会社	354
○ (その日の夜) 大谷の部屋	355
「X接点」 (第九話)	357
サブタイトル「クリスマスの夜」	358
あらすじ	358
登場人物 (本話のみ)	358
□ 第一幕 クリスマスの夜	359
← # 回想 # ← 少年時代の大谷 クリスマスイブ	359
○ 昔の大谷の住んでいるアパートの一室	359
→ # 現在に戻る # →	362
○ (クリスマスイブの夜) 会社	362
□ 亀山編	362

○（クリスマスイブの夜）レストラン	363
○夜のビル街	366
○古屋のマンション	368
○古屋の家のリビング	369
○（翌朝）古屋の部屋	369
□大谷編	371
○大谷の部屋	371
○街中	376
○古屋の家のリビング	376
第二幕 野崎再び 小村との再会	378
○繁華街の夜	378
○野崎の店	381
□第三幕 小村の過去	387
←# 回想 #← 小村 就職したての頃	387
○雨の降る 夜のビジネス街	387
○（数時間前）小村が働いている会社 事務所	387
○雨の降る 夜のビジネス街	387

○ (その夜) 古屋の住んでいるマンションの部屋	392
→ # 現在に戻る # →	396
「X接点」 (第十話)	410
サブタイトル 「最終章」	411
あらすじ	411
野崎の元から無事 脱出できた大谷は、古屋の元に	411
大谷は、古屋に真相を聞き 決断します	411
登場人物 (本話のみ)	411
□ 第一幕	412
○ 古屋の部屋	412
□ 第二幕 思い出の場所	416
○ 深夜0時 古屋の部屋 ベッドで大谷が寝ている	416
○ 飛行場近くの土手	417
← # 回想 # ← 一時間前の出来事	418
○ コーヒーチェーン店の入口	418
→ # 現在に戻る # →	419
○ (数時間前) 野崎のバー	424

○古屋の車の中.....	424
○（クリスマスの朝） 空港近くの土手.....	427
○（月曜日の朝） 事務所.....	427
○夜のビル街.....	430
「X接点」完.....	431

Copyright@2026 D³S

「X 接点」

(第一話)

みちたけ

Copyright©2026 D³S

サブタイトル「歓ゲイ会での出来事」

あらすじ

新入社員歓迎会で、上司の野上にせまられるところを、古屋に助けられるその後、古屋の家に一泊させてもらうことになるのだが

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D'S

(ナレーション)

□ 第一幕 歓げイ会

X 接点…カメラとストロボを接続する接点
ここに電気が流れると、まぶしい閃光が光る。

人は、ふとしたきっかけで、過去を思い出す。
まるで、ストロボのような閃光を発し
過去の出来事がよみがえる。

それを、

(#フラッシュバック#)

フラッシュバック と言う。

○ (朝) ビジネス街

ビジネススマンの出勤風景

季節は春

世間の会社は、紺色の真新しいスーツに包まれた新入社員が
大勢・・・と言いたい

(ナレーション)

Copyright@2026 D's

ところだが、バブル崩壊以降、新入社員の採用数は年々減ってきている。そして、わずかな新入社員
貴重な新入社員は、重宝されるのかというと、そうではない。

優秀な新入社員は、追い越されまいと、先輩社員のイジメにあい、耐えられなくなり、会社を去って行く。
そして、彼らはフリーターとして、生きていく事になるのである。

運良く、先輩のイジメに合わず可愛がられる社員もいる。
しかし、その可愛がり方にもいろいろある。

○（夕方）P & H 商事 事務所

サラリーマン、OLが 退社前時間前で慌ただしく動いている

○壁に掛かった時計の針が まもなく十七時三十分を指そうとしている

（チャイム）
“キーン・コーン・カーン・コーン”

▽野崎 立ち上がる

野崎

「おーい、今日は、新人歓迎会だぞ。仕事は切り上げろよ」

森崎

▽営業課メンバー　一斉に机の上の物を片付けだしす
▽森崎（隣の営業二課）振り向き、亀山に声をかける

「お！今日は、飲み会かい？」

亀山

「そうよ、新人君の歓迎会なの」

▽森崎　新人の方をチラッと見る

森崎

「そっか、一課は今年　新人さん入ったんだよな」

▽森崎　大谷の顔を見る

森崎

「カワイイ顔してるじゃん。
酔わせて、お持ち帰るするんじゃないよ」

亀山

「何言ってるの。おこちゃまには興味ないわ」

森崎

「冗談冗談。強姦罪だもんな」

▽松本　亀山に声をかける

松本

「姉御、早く着替えて行きましようよ。良い席取らないと」

亀山

「そうね、N（エヌ）の横になんかだそ最悪だもんね」

▽亀山、松本 更衣室へ移動

○（夜）居酒屋の中 大谷と野崎の席

歓迎会は、居酒屋の一室を借り切ってあった。

営業一課は、総勢8名の部署

一番奥の上座と呼ばれる場所に、大谷 野崎が並んで座っている

▽大谷 緊張している

▽野崎 大谷に顔を向ける

「大谷君、どうだ？ 少しは会社に慣れてきたか」

「いえ、まだまだです。でも、がんばって、早くみなさんの役にたてるようにがんばります。」

野崎

「そうか、判らないことがあったら、山下君に聞くといいよ。」

彼は、うちの会社の中でも、優秀だと俺が押すよ」

「はい、山下先輩には、いつもいろいろ教えてもらってます」

▽野崎 山下にグラスを向ける

「おい！ 山下、ちゃんと面倒みてやるんだぞ！」

▽山下 野崎に向かってガッツポーズ

「おう！ 任せてください」

(歓談中)

▽野崎 だんだん酔いが廻ってきている

「最近の若い子は、どうなんだ、ねえ 大谷くん」

「なにがでしょう」

「金よりも、休みが欲しいんだって。俺の新人のころは、車買いたくて金、金、金。残業、休日は喜んで会社に来てたぞ」

大谷

「そうですね。僕はどっちかかって言うと、何もすることがないので、お金がもらえるなら、残業しますよ」

野崎

「えらい。世の中、金だよ金」

大谷

「そうです、そうです」

▽大谷 取りあえず野崎の話に合わず

野崎

「金が欲しいか」

大谷

「はい。欲しいです」

野崎

(大谷の耳元で)

「じゃ、俺が1万円で、君を買いたいっていったらどうする」

▽野崎 机の下で周りから見えないように、大谷の膝卵の上に手を乗せる

大谷

「いいですね」

▽野崎 指先で、大谷の股間をつつく

大谷

「それは、ダメです」

▽大谷 野崎の手をどける

野崎

「ほら、これよこれ」

▽野崎 大谷の膝上をさする

大谷

「冗談は止めてくださいよ」

▽大谷 野崎の手をどける

野崎

「ははは、冗談、冗談」

「ほんと、だめですよ」

(歓談中)

野崎

「ところで、大谷君 彼女とはどうなの」

大谷

「彼女いませんよ。ぜんぜんです」

Copyright@2026 D³S

野崎

「えええーこんなにカワイイ顔してるのに、世間の女は目がないな」

大谷

「いえ、目があるから、ダメなんですって」

野崎

「もったいないな。ここ、立派そうだし」

▽野崎 大谷の股間の上に手を置き握る

大谷

「ちょっと止めてください。見られてますから」

野崎

「大丈夫、みんな酔ってるから、わかんないさ

ほんと、立派だよな いつもスーツの前が膨らんでるからさ」

▽大谷 野崎の手をどける

「まあ大きいって言われることはありませんけど」

野崎

「だろ、だろ、確認させてもらわなきゃな」

大谷

「課長、冗談は止めてくださいよ」

野崎

「ははは、冗談 冗談」

大谷

「ですよ。僕、びっくりしちゃいました」

野崎

「ははは、冗談、冗談」

○亀山 林 松本が、座っている場所

▽亀山、林、松本 少し離れた場所で楽しんでいる

▽林 野崎と、大谷の方を見る

松本

「課長の噂って本当かな」

林

「それが本当だったら、今度の新人君なんか、絶好の餌食よね」
亀山さんも、そう思わない？」

亀山

「そんな話には 全然 興味ないわね」

松本

「もう、姉御はは、古屋さん以外には興味ないんですよ」

○（夜）スナックの前の道

▽一同 帰りの身支度をしている
スマホで家に連絡するもの
数人で談笑している者がいる

社員 A

「終電なくなつたな。どうやって帰ろうか」…

社員 B

「タクか、金もつたいないな」

社員 A

「そうだな。お前も付き合えよ」

社員 B

「おれは、嫁さんに迎えに来てもらえるんだな」

社員 A

「裏切り者」

野崎

▽野崎 手でメガホンの形を作り、口元へ

「は〜い、みんなあお疲れさん。解散します。足の無い奴は、
自分の金でタクシー拾って帰ってくださいあい」

（一同）

「おつかれ〜」

大谷

▽社員 散らばっていく

「ありがとうございました」

▽大谷 お辞儀をしながら先輩達を見送る

▽大谷 周りに同僚がいないことを確認

大谷

「さあて、僕も帰るか」

▽大谷 タクシーを拾うため駅の方向に歩こうとする

野崎

「おいおい、大谷くん。こっち、こっち」

▽大谷 声のする方向に向く

▽野崎 大谷に手をふる

▽大谷 野崎に近づく

大谷

「課長は帰らないですか」

Copyright © 2020 D's

野崎

「大谷君は、どうするの」

大谷

「えっと、とりあえず、タクシーで帰るしかなさそうなので、駅のタクシー乗り場に行こうと思ってるのですが」

野崎

「タクシーか 止めとけ、止めとけ。金かかるぞ。それよりも、俺と一緒にサウナに行かないか」

大谷

「サウナですか。行ったことないんですけど」

野崎

「サウナはいいぞ。酔いも冷めて、スッキリする。それで、朝までぐっすりだそれで、3000円ですむ」

大谷

「そうなんですか。ここからタクシーで帰ると1万円はしますもんね」

野崎

「だろだろ。今日は君の歓迎会だから、金が俺が出してやるよ」

大谷

「いえ、自分のお金は自分で出しますけど、着替えもないので・・・」

野崎

「男が、着替えくらいで心配しなさんな。部長からも、ちゃんと面倒見るようにお金のことは気にするな。部長からも、ちゃんと面倒見るように」

大谷

野崎

松本

林

言われているんだから、今度、部長に課長はとってもいい人ですって言ってくれればいいんだからさ」

「わかりました。ついて行きます」

「よし じゃ、行こう」

▽野崎、大谷 駅の反対方向に歩いて行く

▽亀山、林、松本 遠くから野崎、大谷と野崎の後ろ姿をみている

「課長、やっぱり本物なのよ」

「まじ キモ」

Copyright@2026 D'S

□第二幕 サウナって超危険

○雑居ビルのエレベーター前
エレベーターに乗る二人

▽大谷 野崎 エレベーターから降りる
扉がある

▽大谷 扉の横の張り紙を見る

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

会員制

大谷 「ここって、会員制って書いてありますよ」

野崎 「俺は会員だから大丈夫」

大谷 「サウナの会員ってかっこいいですね」

Copyright@2026 D³S

野崎

「サウナの会員がかっこいい？おもしろいこと言うな。
俺のような終電逃したサラリーマンなら、誰でもなれる会員だけどな」

▽野崎 扉を開け 中に入る

○サウナ受付のカウンター

▽受付の男 カウンターの反対側にすわっている

「いらっしやい」。

「大人二名」

▽受付の男 大谷を凝視する

受付の男

「そっちは、若くてイケメンだね」
じゃ、ワカメン割り引きで、2人で3000円」

▽野崎 財布からお金を取り出す

「はい、三千円」

野崎

Copyright@2026 D'S

受付の男

「じゃ、コレね」

▽受付の男 バスタオルとタオル、浴衣の入った手提げカバンを差し出す

▽野崎 手提げかばんを受取り、一つを大谷に渡す

大谷

「ありがとうございます」

野崎

「さあ、とつとと入ろうぜ」

大谷

「はい」

○ロッカールームの前

▽野崎、大谷 下工具箱に靴を入れ、ロッカールームを方へ移動

▽大谷 ロッカーの扉を開け、シャツのボタンを外しだす。

▽大谷 妙な視線を感じ首を傾げる

▽中年男性 椅子に座り 涼んで大谷を見つめている

野崎

「先に行ってるからな」

大谷

「はい、すぐ行きます」

▽野崎 ロッカーの場所から離れる

▽大谷 Tシャツ、パンツを脱ぎ、前をタオルで隠して浴場に向かう

○洗い場

▽大谷 椅子に座り、タオルで体を洗っている

▽野崎 大谷の肩をたたく

▽大谷 振り返り、野崎の顔を見る

「あそこのサウナに入ってるから、後からおいで」

「はい。わかりました」

▽大谷 体についた石鹸を洗い流し、腰にタオルを巻いてサウナに向かう

▽大谷 サウナ室の扉を開ける

○サウナルーム

中は蒸気で白く、よく見えない

▽大谷 野崎の姿を見つけ 横に座る

「お、来たか」

「はい」

▽野崎 横に座っている大谷の体を 上から下まで舐めるように見る

「大谷君で、服着てると分からなかったが、良いからだしてるね」

「そうですか。ありがとうございます」

▽野崎 大谷の腹筋を触る

「綺麗な腹筋だ。羨ましいよ」

野崎

大谷

野崎

大谷

野崎

大谷

「ありがとうございます」

▽野崎 大谷の胸を触る

野崎

「でも、胸の筋肉はあまりないんだな」

大谷

「長距離だったもんで、筋肉は足しつかないんですよ」

野崎

「陸上やってたのか。どうりで 良いからだしてるわけだ」

(間が空く)

野崎

「どうだい、飲んだあとのサウナは気持ちがいいだろう」

大谷

「はい、さっぱりしますね」

野崎

「後は、上の仮眠室で朝までぐっすりだ。食堂もあるから、もう少しだけやるか？」

大谷

「いえ、もう十分です」

野崎

「そうか。俺の若いころは、朝まで飲めたんだけどな」

大谷

「僕は、そんなに飲めないの」

野崎

「そっか。飲めないのか。俺は、飲めるけどな。君のだって」

▽大谷 意味が分からない

野崎

「ところで大谷君、最近、アレはどうなんだね？」

大谷

「あれ？ って」

野崎

「若いんだから、彼女と毎晩のようにやってるんだろ？」

大谷

「いえ、さっきも言ったとおり、彼女はいないので」

野崎

「でも、女との経験ぐらいはあるだろう？」

大谷

「実は ちゃんとしたのは、まだなんです」

野崎

「ちゃんとしたのとは、意味深だな」

大谷

「まあ いろいろありまして」

野崎

「人生 長生きしてれば いろいろあるさ」

大谷

「そうですね」

野崎

「じゃ、最近は、やってないのか」

大谷

「そうですね」

野崎

「困るだろう」

大谷

「一人でできますから」

野崎

「一人だと 虚しいだろ」

大谷

「そうですね」

野崎

「じゃさ、俺がしてやろうか」

大谷

「え、課長が」

Copyright@2026 D³S

野崎

「俺じゃ不満か」

大谷

「そうではなく、男同士ですよ」

野崎

「俺は、気にしないぞ」

大谷

「課長は気にならないかもしれませんが、僕はちよつと」

野崎

「なんだ、なんだ、誰のおかげで、会社に入れたと思ってるんだ？俺が、君を押し付けたからじゃないか」

大谷

「いや、しかし」

野崎

「大丈夫だ 心配するな。ちやっちゃと、手でいかせてやるだけだから」

▽野崎 大谷の陰茎をタオルの上から揉む

▽大谷 周りの視線を感じる

大谷

「ほんとうに 止めてください。こんなところで 人が見えます」

野崎

「ここをどこだと思ってるんだ。ただのサウナだと思ってるのか」

▽大谷 周りをよく見る

サウナの湯気で見えにくいのが、抱き合っていたり、誰かの股間に頭を埋めて、頭を前後に動かしているようなものが見える

「ここは」

「ここは、そういうことをする場所なんだよ」

▽客（古屋） まだ 顔はわからない） 大谷の横に座る

「ほら、おまえが、ちゃっちゃと始めないから、他のやつも来たじゃないか」

▽野崎 タオルの中に手を入れる

大谷の陰毛がないことが分かる

「お前、パイパンじゃないか。」

「そうかそうか、やっぱり、こつちの世界のやつだったんだな」

「違いますって。陸上やってたので、剃ってただけす」

大谷

野崎

野崎

野崎

大谷

大谷

▽野崎 大谷の陰茎を握る

「あつ、やめてください」

野崎

「ギンギンじゃねえか」

野崎

「だんだん、気持ち良くなってきたろ」

大谷

「ち、ちがいますって」

▽大谷 小さな悶え越え

「いてて！ 誰だ」

野崎

▽客（古屋） 野崎の手を掴み上げる

「いいんですか？ 課長、新人にこんなことして」

古屋

▽野崎 古屋の顔を見る

「きさま…」

野崎

Copyright@2026 D's

古屋

「俺で良かったっすよね。奥様やお子さんに見られたら、なんと思われるか」

野崎

「きさまこそ、何してる」

古屋

「俺は、たまたま偶然ですよ」

▽古屋 大谷を見る

古屋

「おい、出ようぜ」

野崎

「覚えてろよ」

▽古屋 大谷の手を引きサウナを出る

○（深夜）雑居ビルの外

▽古屋 大谷 がビルから出てくる

古屋

「危なかったな」

大谷

「えっと、どなたでしたっけ？」

Copyright@2026 D'S

古屋

「俺の名前知らない。俺も まだまだ有名じゃないか。
システム開発部の古屋だよ。お前のつ向こう机に座ってるから」

大谷

「すいません、見覚えあるんですが、名前はまだ知らなくて」

古屋

「ああ。俺だって新人の名前なんていちいち覚えてないよ。
たまたま、あの課長が、若いの連れてたの見つけたから、つけてみたのさ。
まあ、無事助かったんだから、良しとしよう」

大谷

「ありがとうございます」

古屋

「さて、帰るか」

大谷

「はい。本当にありがとうございます」

▽古屋、大谷 タクシー乗り場の方へ歩き出す

▽大谷 スーツの内ポケットを確認する

「あ！ 財布がない。さっき慌ててから、ロッカーに財布を忘れてきたようです。どうしよう」

大谷

古屋

「いくら入ってたんだ？ カードは？」

大谷

「カードは使わない主義なんで入ってないんですけど、3千円は合ったと思います」

古屋

「3千円か。微妙な金額だな。ああいう場所で財布を落としてしまったら、出てこないな。諦めるしかないな」

大谷

「でも、それじゃ、タクシーに乗るお金がないんです」

古屋

「しょうがない 今晩は俺の家に泊めてやるよ」

古屋

▽大谷 ちょっと戸惑う

「何考えてんだ。大丈夫だって、心配するなよ」

大谷

▽大谷 古屋の顔を見て少し考える

「はい、お願いします」

Copyright©2020 D'S

□ 第三幕 古屋との出会い

○（深夜）古屋の住んでいる ワンルームのマンション

玄関を入ると脇にはトイレと風呂場があり、その次にあるキッチン
通り抜けると部屋があった。

部屋にはベットと大きな液晶テレビがあった。

コタツのような、テーブルの上にはノートパソコンが置いてある

▽大谷 テーブルの前に座った。

「カッコイイ部屋ですね。」

「物が無いから そうみえるだけだよ。
何か飲む？」

「いえ 大丈夫です」

「遠慮するなあって。」

「じゃ、水をいただけますか」

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

「水でいいのか」

大谷

「はい」

古屋

「オッケー。水飲んだら、シャワー浴びてこいよ」

大谷

「大丈夫ですよ」

古屋

「遠慮しなくていいぞ。それじゃ、先にシャワー浴びてくるからテレビでも見せて」

大谷

「携帯見えますから気にしないでください。」

古屋

「冷蔵庫 勝手に開けていいからな。」

大谷

「ありがとうございます」

▽古屋 シャワーを浴びに風呂場に向かう

▽大谷 下を向いてスマートフォンを触り出す。

▽古屋 シャワーを浴びて部屋に戻ってくる

全裸で腰にバスタオルを巻いている
別のタオルで髪を拭きながら

古屋

「さっぱりした」

▽大谷 古屋の引き締まった体に見とれている

古屋

「どうした？」

大谷

「え、古屋さん、かっこいいなあって」

古屋

「え？俺が。ダメダメ、年とって肉ついてきたし。

それよりもシャワー浴びて来いよ」

大谷

「あ、はい」

▽大谷 風呂場に向かう

風呂で椅子に座り、シャワーで体を流している

▽古屋 風呂にやってきて、扉の向こうから大谷に話しかける

古屋

「バスタオルと着替え、置いておくから」

大谷

「ありがとうございます」

▽大谷 風呂から出てくる

ぶかぶかの上下のトレーナーを着ている

古屋は、黒のボクサーブリーフだけ身につけた状態

古屋

「やっぱり、大きかったか」

大谷

「寝間着代わりなので、これくらいのが、丁度いいです・すいません。クリーニングしてから返します」

古屋

「いいよ、いいよ、間違って、俺には少し小さいサイズだったやつだから」

大谷

「わかりました。ありがとうございます」

▽古屋 テーブルの飲み物が入ったグラスを指差す

古屋

「ジュース。そこに入れてあるから」

大谷

「あ、はいいただきます」

大谷

▽大谷 古屋の反対側にすわる
「今日は、ありがとうございます」

古屋

「気にするなって、あいつの手癖が悪いのは有名だから」

大谷

「そうなんですか」

▽古屋 大谷に顔を近づける

古屋

「実は、俺も新人のころ狙われてたんだよな」

大谷

「え、古屋さんですか。やっぱりカツコイイですもんね。僕なんて」

古屋

「まあ、ああいった人の考えはわかんないからな」

古屋

「さて、そろそろ寝るか。明日は土曜日で休みだから、好きなだけ寝ていいぞ
それから、俺が寝てたら起こさずに、そのまま帰ってきてくれていいから」

▽古屋 床に寝転がろうとする

大谷

「え、ベッドで寝てくださいよ。僕は、床で寝ますから」

古屋

「いいよ、お客さんなんだから、お前がベッドで寝なよ」

大谷

「そんなわけにはいきませんよ。」

「このベット広いので、古屋さんさえよければ、二人で使いませんか？」

古屋

「よければって、ここは俺の家だし、俺のベットだし」

大谷

「そうでした」

古屋

「じゃ、そうするか。でも、気をつけるよ。課長より俺の方がテクニシャンだからな。どうなっても知らないぜ」

大谷

「隠してましたけど、実は、僕もテクニシャンなんですよ」

古屋

「おまえ、おもしろいな」

▽古屋 上半身裸で、黒のボクサーブリーフだけでベッドに入ろうとする

大谷

「古屋さん。パジャマは着ないんですか」

古屋

「ああ、俺か。夏は、いつも このスタイルで寝てるな。気になるか」

大谷

「いえ、全然」

古屋

「こうして寝ると、エアコン代も節約できるだろ」

大谷

「そうですね。電気代高いですから。じゃ、僕も 協力しましょうか」

古屋

▽大谷 パジャマを脱ぎ 古屋にもらった、黒のボクサーパンツ一枚だけになる

「サンキュー エアコンはタイマーで切れるようにしておくぞ
暑かったら、また点けていいからな」

大谷

「はい」

▽大谷 古屋 ベットにはいる。

二人は、薄いバスタオルを腹の上にだけかけた

古屋

「おやすみ」

大谷

「おやすみなさい」

▽古屋 背中を大谷の方に向け横になる
薄暗い部屋で 大谷の目に、古屋の背筋が見える

▽大谷 なかなか寝付けけない

(数時間経過)

○古屋の部屋

一つのベッドに大谷と古屋が寝ている

▽古屋 急に 大谷の方に向き大谷に抱きつく

▽大谷 驚く

(大谷)

(古屋さん 寝ぼけているのかな)

▽大谷 目の前に古屋の顔

▽古屋 大谷を抱きしめる

(大谷)

(古屋さん 彼女と勘違いしてるんだ)

(数分経過)

▽古屋 腕から大谷を離し 仰向けになる

古屋の立派な胸筋が薄明かりで見えている

▽大谷 体を起こし、古屋の寝顔を見る

▽大谷 ゆっくりりと古屋の顔に自分の顔を近づける

▽大谷 古屋にそっとキスをする

▽大谷 そのまま古屋の胸に顔をうずめ寝てしまう

○(翌朝) 古屋の部屋

「おはよう」

▽大谷 古屋に腕枕された状態で目を覚ます

目を開けると、古屋の顔があり、驚く

「あ、おはようございます」

古屋

大谷

古屋

「よく寝れたようだね」

大谷

「はい」

古屋

「あんまり、気持ちよさそうに寝てるので、起こしたくなっただけど、俺も起きたいので、腕から頭をどけてもらっていいかな」

大谷

「え」

▽大谷 古屋に腕枕されていることに気がつく

大谷

「すみません」

古屋

「それと、そっちの手も」

▽大谷 左手が、古屋のボクサーパンツの上であり、古屋の股間部分を握っていた

▽大谷 すぐに手をどける

大谷

「すみません」

古屋

「気にしなくていいよ」

▽大谷 体を起こす

▽古屋 体を起こし、ベッドから出る

▽古屋 トイレに行き、用を足して戻ってくる

「すみません」

「大丈夫だって、怒ってないから。パン食べたら、帰れよ」

「はい」

大谷

古屋

大谷

Copyright©2026 D's

「X 接点」

(第二話)

みちたけ

Copyright©2026 D³S

サブタイトル「裏切り者には制裁を」

あらずじ

野上は、大谷に断れた腹いせに、さまざまな。パワハラを行います。
とうとう、耐えきれなくなった時、古屋に打ち明け その結果

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D's

□第一幕 野崎からのパワハラ

○（月曜日の朝）P & H商事株式会社 給湯室

▽亀山、林、松本 しゃべっている

▽亀山 給湯室から時折顔を出しエレベーターのドアが開くのを気にしている

▽エレベーターのドアが開き、古屋が出てくる

▽亀山 古屋に近づく

▽大谷 亀山より先に、古屋の前に立つ

「おはようございます。古屋さん」

▽亀山 思わぬ邪魔が入り啞然とする

「おはよう。朝から どうした」

「借りていた電車賃です」

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

古屋

(亀山)

▽大谷 手のひらに乗せた円硬貨を差し出す

「別に 返さなくてもいいんだよ」

「いえ、お金の貸し借りはちゃんとしておかないと」

「そっか。じゃ」

▽古屋 お金を円を受け取る

「確かに」

▽古屋 立ち去る

▽亀山 何もできず、すごすごと給湯室に戻っていく

(何? 今の二人。なんで、大谷君と?)

○古屋の席

▽亀山 古屋の席にお茶を置く

亀山

「おはようございます」

▽亀山 古屋の机に湯呑みを置く

古屋

「おはよう。毎日ありがとう、亀山さん、課が違うからいいのに」

亀山は、営業一課。古屋はシステム課なので、所属課が違う。

本来なら、関係のないはずだが、古屋のお茶は亀山が入れることが、この事務所の中では暗黙の了解であった

亀山

「私が好きでやってるので。それに、新人の頃、古屋さんにいっぱい助けてもらったので」

古屋

「そんな昔のことを」

亀山

「いいんです。私も好きでやってるので
そういえば、さっき、うちの課の大谷君と話してましたけど、
何かあったんですか？」

古屋

「ああ大谷君ね。先週、営業で歓迎会があったんだろ
その時に、たまたま道端で酔いつぶれたの見つけてしまったんだよ。
しかも財布落としたって言うしさ、電車賃を貸してあげたんだよ」

亀山

「そうなんですか。古屋さんは、誰にでも優しいんですね」

古屋

「まあ 会社の同僚を助けられないわけにはいかないしね」

○（始業時間後） 事務所

▽社員が忙しそうに仕事をしている

▽野崎 大谷を睨んで見ている

「大谷、三晃商事の件はどうなってるんだ？」

大谷

「すみません、昨日 見積もりを出したばかりで」

野崎

「何やってんだ！ ノロマ。使えねえやつ」

▽山下 野崎の声を聞いてフォロー

山下

「課長、その件は僕が責任を持ってやらせていますから、今週中には大丈夫です」

野崎

「おまえには聞いておらん。大谷に聞いてるんだ」

山下

「はあ」

▽山下 野崎の機嫌が悪いことを察し、黙る

大谷に顔を見て、小さくうなづく

(数時間後)

野崎

「大谷君は、どこの大学だったけ？」

大谷

「え、はい。日商大です」

野崎

「いくら人手不足とはいえ、うちは、そんな三流からも採用しなくちゃならないのか。ずいぶん落ちブレたな。」

大谷

「すいません」

野崎

「人手不足のおかげでよかったな」

▽大谷 無言

(数時間後)

○昼休みのチャイムが鳴る

▽野崎 席を立ち上がる

野崎

「おーい、たまには俺のおごりで昼に行くか？」

男性社員

「お！ いいですね」

女性社員

「課長のおごりなら、行ったことないイタリアンがいいわ」

▽社員 席を立ち始める

▽大谷 席を立ち上がる

野崎

「あ、大谷君は、電話番号しておいてくれるかな」

大谷

「あ、はい、わかりました」

▽大谷 椅子に座る

山下

「課長、昼休みくらい スマートフォンだって持ってるので、電話番号なんか

必要無いですって」

野崎

「何言うか、そういうときにこそ、大切な商談の電話が鳴るもんだ」

大谷

「僕、電話番しているので、皆さんで行って来てください」

山下

「そっか、悪いな」

野崎

「じゃ、三流は、ほっておいて行くぞ」

▽社員 事務所から出て行く

▽大谷 パソコンで仕事をしている

○昼休み終了のチャイムがなる

▽野崎、山下ら、帰ってくる

野崎

「よく、食ったなあ」

女子社員

「美味しかったわ」

Copyright@2026 D's

山下

「ごめん。ちょっと遅くなった」

大谷

「電話は鳴りませんでしたので」

山下

「ありがとうございます。お前も昼行ってこいや」

大谷

「はい、行ってきます」

▽大谷 席を立つ

野崎

「バカなことを言うな、昼飯は昼休みに取るもんだろう！
仕事忙しい時は、昼飯なんか食いにいつてる場合か！」

山下

「課長、大谷は電話番してくれてたんですよ。」

野崎

「電話 かつかってなんだろ。じゃ、仕事してないな」

山下

「しかし、課長の指示でさせたんですから」

野崎

「俺？俺、そんなこと言った。そいつが、勝手にしたんじゃないのか」

大谷

「山下先輩、僕、昼ぐらい食べなくても平気ですから」

▽大谷 席につき再び、パソコンのキーボードを叩き出す

○給湯室

▽大谷 昼食が取れなかった大谷は、お茶で空腹を満たそうと給湯室へ行く

▽亀山、林 松本 営業課の女性社員がいる

「すみません、お茶入れてもいいですか？」

「あ、どうぞ」

▽亀山、林、松本 大谷の為に 場所を空ける

▽大谷 お茶を入れる

「大谷君、ちよつとちよつと」

「はい。何か」

「今日の課長、君にすごく態度冷たいわね。何かあったの？」

大谷

林

松本

大谷

松本

大谷

「いえ、僕には わかりません」

大谷は、一連の課長の態度の豹変ぶりは、週末の出来事だと
感じていたが、とぼける

松本

「そうなのお？宴会が終わって、あなたと課長が二人でどこかに行くところを
見たんだけどな」

大谷

「駅の方が同じだっただけです」

松本

「正直に言っちゃいなさいよ」

大谷

「本当です。駅から課長はタクシーに乗って先に帰りましたから」

松本

「嘘を言ってもだめよ。駅と違う方向に歩いて行ってるの見てるのよ。
しかも、ホテル街の方に」

林

「えええホテル？それは、ちよつと露骨すぎない」

亀山

「ホテルって？ 彼らは男同士なのよ」

大谷

「ホ、ホテルなんて行ってません。ただ、課長とは」

松本

「ただ？　ただ課長とはどうしたの？」

大谷

「も、もう一軒、飲みに行っただんです。で、課長をタクシーに乗せた後、僕は酔い潰れてどこかでしゃがみこんでいたら、そしたら、古屋さんに声かけられて、古屋さん家に泊めてもらったんです。だから課長とはなにもないです」

亀山

「え、古屋さんの家に行ったの？」

大谷

「はい。どこかに財布を落として、タクシーに乗るお金も無かったので」

亀山

「ねね、古屋さんの家ってどうだった？　一緒に住んでいる人はいた」

大谷

「一人でしたよ」

亀山

「で、女の人とかいそうな感じだった？」

大谷

「すごく片付いた部屋で、パソコンとテレビくらいしか見なかったですけど」

亀山

「他には？」

大谷

「そんなことまでは わかりません」

松本

「アネゴ、まだガキンチョに女の気配を感じとるのは難しいですよ」

亀山

「そう、また何かわかったら、教えてね。どんな事でもいいわよ。それから、課長があなたに何を言っても気にしないでいいのよ。私たちはあなたの見方だから」

大谷

「はい。ありがとうございます」

亀山

「さあ 仕事に戻るわよ」

松本

「もう、いいんですか？」

亀山

「ええ、もういいわ」

▽亀山、林、松本 給湯室から出て行く

▽大谷 給湯室を出る

(数日経過) #契約書の行方#

○(ある日昼食が終わった午後) 事務所内

野崎

「大谷、プラネット製菓との契約書は、もらえたか？」

▽大谷 隣の山下の顔を見る

▽山下 大谷向かって 首を縦に振る

大谷

「はい、バッチリです」

野崎

「契約書チェックしてやる。貸してみろ」

大谷

「はい」

▽大谷 山積みの書類から契約書を探す

しかし 見つからない様子

山下

「どうした」

大谷

「ない。ない。契約書がない。契約書が無いんです」

野崎

「契約書を無くしただと！ バカやろー探し出せ！」

▽大谷 必死で探している

▽山下 野崎の方を向く

山下

「私も確認しましたので、会社には持って帰ってるはずですよ」

山下

「カバンの中ををもう一回みてみる」

大谷

「はい、見ました。昼休み行く前に、机の上にあるの見たんです」

山下

「誰かが間違えて持って行くような書類じゃないしな。」

大谷

「本当に、プラネット製薬の契約書だったんだな」

山下

「はい、間違いありません」

野崎

「まさか、清掃員のおばちゃんに捨てられたとは思えないが、課長、もう一度、契約書 もらい直しましょうか」

野崎

「ダメだダメだ！」

無くしたので、もう一度契約書にハンコ押して下さいなんて、
恥さらしな事言えるか。なんとしても探せ！
俺が、夕方に戻ってくるまでに探しておけよ」

▽野崎 席を立ちその場を出る

「大谷、ビルのゴミ捨て場に行ってみよう」

「はい」

○男子トイレの中

▽野崎 トイレに入り、そして、かばんからから、
封筒のような物を取り出し、トイレのゴミ箱に捨てる

○事務所

▽大谷 山下 書類を探している

「本当に、ここにあったんだよな」

「はい、昼飯前に、机の上に置いてあったのは確かなんです。」

山下

大谷

山下

大谷

山下

「俺も、今朝、会社で見せてもらったもんな。他の書類に紛れたか」

大谷

「書類保管室には行ってないですけど、誰かが間違えるということもあるので見てきます。」

▽大谷 事務所から急ぎ足で出て行く

○エレベーターの前

▽大谷 エレベーターの前で待っている

「おい、大谷」

古屋

▽大谷 声のする方を向く

古屋の姿

「これ、お前の大切な書類じゃないのか」

古屋

▽古屋 封筒を渡す

「あった。それです。探していたの

大谷

古屋
「どうして、古屋さんが」

古屋
「トイレの洗面台に置いてあったぞ」

大谷
「そうなんですか？トイレに持っていた覚えはないんですけど」

古屋
「なんの書類」

大谷
「契約書です」

古屋
「そんな大切な書類、トイレに持って行ったらダメじゃないか」

大谷
「でも、持っていった覚えはないんですけど」

古屋
「じゃ、どこかで落としたりのを拾った奴が、置いていてくれたのかな
そんなことはどうでもいいけど、早く持って行った方がいいんじゃないか」

大谷
「そうでした。ありがとうございます。」

大谷
▽大谷 事務所に戻り山下のところに行く
「山下さん、ありました。トイレの中に」

山下

「よかった。」

▽野崎 事務所に戻ってくる

▽大谷 野崎に契約書を渡す

「はい、課長、ありました。これです」

「ああ」

▽野崎 渋々 契約書を受け取る

(数日経過) #野崎の難癖が続いている#

○(数日経過 ある日) 事務所

▽野崎 難癖をつけては大谷を叱責している

▽大谷 そろそろ精神的にも限界で、顔の表情が暗い

「大谷、この案件の見積り、三光システムから、もらってきてくれ」

野崎

野崎

大谷

大谷

「はい、わかりました」

▽大谷 メールで着た見積もりを印刷し野崎に渡す

野崎

「はあ？ おまえ、あほか？ 誰が、三光システムから見積もりをもらえって言ったんだよ？」

大谷

「え、でも、さつき課長が、」

野崎

「俺が言うわけないだろ？ この不景気に、三光システムみたいなところから、見積もり取るなよ」

大谷

「わかりました」

▽大谷 しょぼくれた顔で トイレに向かう

○トイレの前

▽大谷 トイレから出ようとする

ちょうど、トイレに入ろうとしていた古屋にぶつかる

古屋

「おっと、『めん』『めん』」

大谷

「・・・すみません」

古屋

「どうした？ 顔色悪いな」

大谷

「いえ、別になんともないです」

古屋

「そうか？ならいいけど。」

大谷

「仕事に戻りますね」

古屋

「今日は、仕事定時で終わるのか？」

大谷

「はい、たぶん」

古屋

「じゃ、飯でも行こうぜ」

大谷

「本当に気にしないでください」

古屋

「このまま、ほって置く方が 気になってしかたないじゃないかい
いいから、いいから、じゃ、六時に」

Copyright@2026 D³S

古屋

大谷

古屋

古屋

古屋

古屋

○（夕方）会社ビルの玄関 大谷が待っている

「悪い悪い 誘った俺が遅れるとは」

「大丈夫です」

「じゃ、行こうか」

○（数分後）会社近くの繁華街

▽大谷、古屋 歩いている

大谷は うつむき加減

「何がいい」

▽大谷 無言

「おれは、そうだな」

「そうだな。やっぱ、居酒屋だな」

▽大谷 無言

Copyright@2026 D'S

古屋

「どうした？大谷、居酒屋は嫌か」

大谷

「僕、もっと静かなところがいいです」

古屋

「静かな所って言われてもな」

▽大谷 無言

古屋

「じゃ、俺の家で、家飲みにするか」

▽大谷 うなづく

古屋

「よし 決まり」

○古屋の家の近くのコンビニ

▽大谷 入口で古屋が出てくるのを待っている

▽古屋 買い物袋を持ってコンビニから出てくる

古屋

「おまたせ。いろいろ買ったぞ。さあ 行こう」

▽大谷、古屋 道を歩きだす

○（夜） 古屋の家

▽古屋 家の鍵を開け、ドアを開ける

明かりが付いていないので暗い

▽大谷、古屋 暗い廊下を進んで、部屋に入る

「今、電気を付けるから」

▽古屋 壁のスイッチで灯りをつけようとする

▽大谷 古屋の背後から抱きつく

「どうした？」

（泣き出しそうな声）「会社 辞めたいです」

「そうか、わかった。じゃ、しばらく、「」していたらいい」

古屋

大谷

古屋

古屋

▽古屋 前に回った大谷の手を握り締める

○(深夜) 古屋の部屋のベット

▽大谷 一人で寝ている

Copyright@2026 D³S

第二幕 野崎の転落

○（夜）某ゲイバーの中

カウンターの中には、ボーイ（小村）が立っている

▽野崎 カウンターに座り、酒を飲んでいる

「ち、あいつめ、ちょっとかわいい顔してるからって、オレに逆らいやがって
こうなりや、あいつが辞めるまで、とこんとんやってやる」

▽小村 野崎に声をかける

「何かあったんですか」

「俺か？」

「さつきから 独り言 言ってますよ」

「悪い悪い うるさかったかな」

「いえいえ、ここは、そういうことを吐き出すところなので大丈夫です」

野崎

小村

野崎

小村

野崎

小村

よかったら、俺が、ききましようか」

野崎 「ありがとう。君は優しいな。世の中の男の子が 君のような子ばかりだといいんだけど」

小村 「そうですが。俺はぜんぜん優しくくないですよ」

▽野崎 小村の顔をじっとみる

なかなかのイケメンで、野崎の好みである

野崎 「じゃ、小遣いがほしくて優しくしてくれてるのかな」

▽小村 笑いながら

小村 「バレてましたか。太客を捕まえないと、バイトクビになりますからね」

野崎 「ほんとうに それだけか」

小村 「うゝん。小遣いはほしいかな」

▽野崎 小村に顔を近づける

小村 野崎に顔を近づける

野崎

(小声)「じゃ、店が終わったら、どうだい」

小村

(小声)「高くつきますよ」

野崎

(小声)「心配ない。俺は、アラブの石油王だ」

▽野崎 小村 顔を話す

小村

「じゃ、アラブの石油王に乾杯」

▽野崎、小村 グラスを交わし 酒を飲む

(数時間後)

○(深夜) ラブホテルの建物から数メートル離れた電柱の影

▽古屋 電柱に隠れて立っている

▽小村 ホテルの入り口から出てくる

▽小村 古屋の姿を見つけて、古屋の方にかけてくる

小村

「どっ？ちゃんと撮れた」

古屋

「ああ、上出来。そっちは 大丈夫だったか」

小村

「薬が効いて直ぐに寝てくれたから大丈夫。」

古屋

「それはよかった。何もなくてよかったよ」

小村

「心配してくれるんだ。ありがとう」

古屋

「そりゃそうさ。お前は、俺にとって大事な人だからな。

それから、あいつは、ひっこいから 見つかるなよ」

小村

「わかってる。バイトも今日で辞めたし」

古屋

「そっか、バイト辞めたのか。悪いことしたな」

小村

「平気、あなたのお願いだもの」

▽古屋 スーツの内ポケットから、二つ折りのお金を取り出し、

小村に差し出す。

▽小村 お金を受けとらない

「いいの。古屋さんの役にたてれるなら、いらない」

「お金は いくらあっても困らないだろ」

「大丈夫。取りあえず 来月からは仕事につくんだ。」

「そっか、おめでとう。じゃ、祝いだよ」

「ありがとう。でも、御祝いなら、お金より食事がよかったな」

「わかった、考えておく」

「じゃ。また連絡してね」

▽小村 その場所から去って行く

○ラブホテルの入口

▽野崎 ホテルの入り口から慌てて出てくる

小村 古屋 小村 古屋 小村 古屋 小村

野崎

「あのやろう。今度見つけたら、ただじゃおかねえ」

○（翌日の朝）P & H 商事株式会社の事務所

▽野崎 自席で仕事の準備をしている

▽女子社員が近づいてくる

女子社員

「野崎課長、渡辺部長が至急 来るようにと」

野崎

「ああ、わかった」

▽野崎 立ち上がる

（数分後）

○部長室

▽渡辺 机に座っている

▽野崎 部長室に入る

Copyright@2026 DS

野崎

「部長 お呼びですか？」

渡辺

「ああ、そうだ。」

野崎君。君は今日から総務課に異動してもらったことになった。すぐに、今の机を片付けて、総務に行くように。いいな。今、すぐにだぞ」

▽野崎 笑う

野崎

「え？部長 なにかの冗談ですよね」

▽渡辺 真剣な顔

▽野崎 真顔になる

野崎

「本当ですか」

渡辺

「俺は、冗談は嫌いだ」

▽野崎 部長の正面に立つ

野崎

「なぜですか？ 私は、あなたの忠実な部下ですよ」

Copyright@2026 D's

渡辺

「決まったことだ。二度と理由は聞くな」

野崎

「いや、しかし、私が営業一課を離れるということは 会社にとって不利益になります」

渡辺

「ひっこいやつだな、このメールを見てみる」

▽渡辺 パソコンのモニター画面を野崎の方へ向ける

昨晚の野崎と小村がホテルに入ろうとしている画像が写ってる

野崎

「どうして？ こんな写真が・・・」

渡辺

「そんな事はどうでもいい。これが、偽物かもしれないが、世間に出回ると我が社のイメージは大幅にダウンだ。直属のワシまで巻き添えを食う可能性もあるしかし、この写真を送ってきた人物が、君を営業から異動させれば、消去すると言っている。ウソかもしれないが、それで様子をみさせてくれ」

▽野崎 考えている

渡辺

「おそろく、君 一人に恨みをもっている人物だと推測している。少しの間だ。我慢してくれるか」

野崎

渡辺

「わかりました。部長が　そこまでおっしゃるなら　長い間お世話になりました」

「よろしく　たのむよ。きっと、また　営業の最前線に復帰させてやるからな」

▽野崎　部長室から出ていく

▽渡辺　パソコンを操作し、メールの画面を下方向にスクロール
さらに、写真が出てくる

渡辺と若い青年がベットで寝ている姿が映る

(メールの文章)

”この写真をバラ撒かれなくなければ、営業課の課長を辞めさせろ”

▽渡辺　椅子を回転させ、窓の方に向く

「くっそ　一体、誰だ？」

渡辺

○営業一課

松本

林

松本

林

松本

▽亀山 林 座って仕事をしている

▽松本が走ってやってくる

「大変大変、課長が変わっちゃうのよ」

「いつから?」

「たった、今から」

「なんで?」

「知らない」

Copyright@2026 D³S

「X 接点」

(第三話)

みちたけ

Copyright©2026 D³S

サブタイトル「大谷の誕生日」

あらすじ

野崎が転属になり、平和がもどった営業第一課

五月は丁度大谷の誕生日。古屋と一緒にテーマパークへと出かけます
そんな幸せ絶頂期の大谷に、突然別の問題が発生します

登場人物（本話のみ）

Copyright@2020 D's

□ 第一幕 ある土曜日

○ (土曜の朝) 古屋のマンション

▽古屋 ボクサーパンツだけの姿で腹にバスタオルを掛けてベット寝ている

○ スマートフォンの電話着信音が鳴り響く

▽古屋 目が覚め、上半身を起こし、電話出る

「はい」

「もしもし、古屋さんですか？ 大谷です」

「大谷？ どうした？ こんなに朝早く。何かあった？」

「何もないんですけど、野崎課長が配属転換されたは

古屋さんのおかげなんですよね？」

「え？ なに言ってんだ、俺に そんな人事権なんて無いっつうの」

「そうですよね。でも、きっと古屋さんのおかげだと僕は思ってます」

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

古屋

「用事は、それだけ？」

大谷

「えっと、今日の休みは何か用事がありますか？」

古屋

「まだ昼間寝てるよ」

大谷

「朝ご飯は？」

古屋

「いや、だから まだ寝てるって」

大谷

「じゃ、まだなんですか？」

古屋

「ああ」

大谷

「じゃ、今から朝ご飯作りに行きます」

古屋

「今からって。おい」

▽電話が切れる

古屋

「ん？ 夢か？」

Copyright@2026 D's

(チャイム)

古屋

▽古屋 布団をかぶり、もう一度、寝ようとする

▽マンションの入口のチャイムがなる

”ピンポン”

「誰だ？」

▽古屋 居留守にしようと思い、ベットから出ない

(チャイム)

”ピンポン”

▽再びチャイムが鳴る

▽古屋 ハツとして、上半身を起こす

「まさか？」

古屋

▽古屋 ベッドから出て、インターフォンの画面を見る
インターフォン越しに、大谷の顔が写る

大谷

「来ちゃいました」

古屋

「待ってる、空けてやるから」

▽古屋 ドアを開ける

大谷が立っている

大谷

「おはようございます」

▽古屋 あっけに取られる、

「まあいい、早く はいれ」

大谷

「はい。おじゃまします」

▽大谷 古屋の部屋に入り、リビングに座る

▽古屋 ベットに腰掛ける

「朝っぱらから、どうしたんだ？」

「だから、朝ご飯を作ってあげようと思って来たんですって」

Copyright@2026 D's

古屋

「俺が留守だったら、どうするつもりだよ」

大谷

「帰ってくるまで、待ってるつもりです」

古屋

「おいおい。冗談じゃないぞ。マンションの前で、変な男が待ち伏せしてるなんて恥ずかしいじゃないか」

大谷

「古屋さんこそ、早く服を着てきてください。パンツ一枚ではこちらが恥ずかしいですよ」

▽古屋 自分がボクサーパンツしか穿いてないことに気づく

古屋

「わかった。とりあえず、シャワー浴びてくるから」

大谷

「はい。じゃ、朝ご飯の準備しておきますから、ゆっくりシャワー浴びてきてください」

古屋

「いや、俺は 朝は食べないから いいよ」

大谷

「ダメですよ。食べなきゃ。ほら、寝癖がひどいですよ。早く、シャワー行ってください」

▽古屋 バスルームへ行く

▽大谷 台所に行く。棚を開け 調理器具を確認
フライパンを取り出し調理をはじめ

▽古屋 バスルームのドアから顔を出す

「おい、バスタオルと替えのパンツを忘れた。取ってきてくれ」

「どこですか」

「一番下の引き出し入ってる。バスタオルは、上から二番目だ」

「あ、はい」

▽大谷 タンスからパンツとバスタオルを取り出し、バスルームに持っていく

▽大谷 バスルームのドアをノックし入る

曇りガラス越しに、古屋がシャワーを浴びているのがわかる。

「持って来ました」

古屋

大谷

古屋

大谷

大谷

古屋

▽古屋 シャワーを止め、ドアを開ける

全裸の古屋の姿が大谷の目に入る

「サンキューー カゴに入れておいてくれ」

大谷

「え、え、はい」

▽古屋 ドアを閉め、シャワーの湯を出し浴び始める

▽大谷 カゴに パンツとバスタオルを入れ出て行く

(数分後)

▽古屋 バスタオルで髪を乾かしながら出てくる

「お、うまそうだな」

▽大谷 フライパンでウィンナーを炒めている

「もうすぐできますから、テレビでも見ていてください」

大谷

古屋

▽古屋 ソファーに座りテレビの電源を入れテレビを見る

○部屋 テーブルには、食べ終わった皿が載っていた。

▽古屋、大谷は、テレビを見ている

古屋の格好は、まだシャワーを浴びて出てパンツを穿いたままの状態だ

▽大谷 作った料理を運んでくる

「古屋さんて、いつ服着るんですか」

「え？ 夏だし、自分の家だからいいんじゃないか？」

「僕が居ますよ」

「男が男に見られて気にするかよ。なんなら、パンツも脱いでもいいぜ」

「それは、止めてください」

「ははは、汚いもの見たくないよな」

「別に 汚いだなんて、思ってませんよ。さあ食べましょう」

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

「お、うまそうだ」

▽古屋 大谷の作った料理を食べる

古屋

「うまい。大谷、料理上手だな」

大谷

「古屋さんに 喜んでもらえて よかったです」

(数時間経過)

○(昼すぎ) 古屋の家のリビング

▽古屋 大谷 ソファでテレビを見ている

(一時間経過)

▽大谷 古屋にもたれて寝ていた

▽大谷 はっと目を覚ます

「どうした」

古屋

Copyright@2026 D's

大谷

「すみません。テレビ見ながら寝てしまっていました」

古屋

「いいよ。どうせ、早起きして 家に来たんだろ」

大谷

「はい」

古屋

「俺は、まだテレビ見てるから、もう少し寝ている」

▽古屋

大谷をゆっくりと倒し古屋の膝の上に大谷の頭を乗せた

大谷の後頭部に 古屋の陰茎の感触が、頬には太股の暖かさが伝わる

大谷

「恥ずかしいです」

古屋

「この方が、よく寝れる」

▽古屋 大谷の頭を撫でる

(数時間経過)

○ (夜) 古屋の部屋のベッド

▽古屋 上半身裸で寝ている
▽大谷 上半身裸で寝ている

「すみません。また泊めてもらっていい」

「どうせ、明日は日曜日 何もすることなかったし。
明日の朝も、大谷が朝食作ってくれそうだしな」

「はい、もちろん作りますよ」

「そっか。それは 楽しみだ」

▽古屋 体を横にし、大谷の顔を見る

「古屋さんは、なんとも思わないんですか？」

「何が？」

「僕と、こうやって、裸でいっしょに寝たりして」

「そうだなあ。世間から見れば、変なことかもしれないな。
でも、俺は、別に気にならない」

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

「大谷は、俺の事 どう思ってる。好きか、嫌いか」

大谷

「好きか、嫌いかで言われると、好きとしか言えないです」

古屋

「なら、俺も 大谷のことは好きだ。好意を持ってくれる人に好意で返す。それが俺の考えなんだ。でも、おまえの課長、あ、元課長だったけ？ あいつには、いくら好かれても遠慮しちゃうけどな」

大谷

「古屋さんっておもしろい人ですね。会社では、すごくまじめで、かつこよくて、近づきがたいって評判なんですよ」

古屋

「そののどこが、評判なんだ」

大谷

「ははは、僕ら、新人の間での、評判なんですって」

大谷

「古屋さんは、女性との経験あるんですよね？」

古屋

「俺か？そりゃ無いと言えばウソだよな」

大谷

「ここだけの話にしておいてください。僕まだ なんですよ。この歳で変でしょ」

古屋

「そうかな？ 最近は多いみたいだし、別におかしくないと思うけどな男だって、誰とでも寝る女は嫌なんだからさ、女だって、誰とでも寝る男嫌なんじゃないかな？」

大谷

「古屋さんが言っても、説得力無いです」

古屋

「そりゃ、もつともな意見だ」

大谷

「でも、やっぱり、この歳でまだだなんて、彼女に恥ずかしくて言えないですよ。結局、それがバレルのが怖くて、何もできなくて、いつまでたつてもできない。童貞の悪循環ってやつです」

古屋

「童貞の悪循環か
誰だって、初めてがあるんだから、たまたまそれが、その日だったってことで、いいんじゃないかな。早いから、偉いってわけじゃないし」

大谷

「そうですよね」

古屋

「そろそろ寝ようぜ」

大谷

「はい」

古屋

「おやすみ」

大谷

「あの」

古屋

「どうした」

大谷

「腕枕してくれませんか。どうしても、この前の古屋さんと寝たことが忘れられないんです」

▽古屋 大谷の頭の下に腕を通す

▽大谷 古屋の胸に 顔をうずめ目をつぶる

▽古屋 片方の空いた手で、大谷の頭をなでる

「ここまでだ。これができれば、あとは自然にできるようになる」

古屋

Copyright@2026 D³S

□第二幕 (仮称) ユニバーサル・ランド

○(土曜日の昼過ぎ) テーマパーク(仮称) ユニバーサル・ランド

大谷の誕生日に、テーマパークを訪れた二人

▽大谷、古屋 ゲートを潜る

「おいおい、誕生日に何か欲しいか？って聞いたたら、遊園地に連れて行けだって」

「だって、古屋さん、何でもいいって言ってくれたじゃないですか」

「そりゃ、何でもいいぞって言ったけどさ」

「文句を言わないって。さあて、何から乗らしましょう」

「そうだな。ぜっかく来たから、乗りまくってやるか」

○コースターの列

▽大谷 古屋 コースターの列に並ぶ

「人多いですね」

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

「こりや、ずい分待つな」

▽大谷らの少し後ろには、女子大生 二人組が並んでいる

▽女子大生 ひそひそと話をはじめ

「ねえ、ねえ、前の二人、怪しくない？」

「うんうん」

「でも、めっちゃいけてるよね」

「うんうん。もう一人も超カワイイし」

「他に連れがいるのかしら？」

「二人だけだったらどうする？」

▽大谷 古屋 会話を聞いている

▽古屋 大谷 互いに目を合わせて合図をおくる

女子大生 A

女子大生 B

女子大生 A

大谷

▽大谷 古屋の腕に手を回し、胸に頭を付ける

「え、まじ」

「やば」

「もったいないよ」

▽古屋、大谷 薄笑い

(アトラクション楽しむ 二人)

○テーマパーク内のアケード

▽古屋 大谷 アーケードを歩いている

▽大谷 アイスクリームの看板を見つける

「あ、ソフトクリームがある 食べたい」

Copyright@2026 DS

古屋

「はいはい、王子様 買ってくるから、そのベンチに座ってお待ちください」

▽古屋 ソフトクリームを買いに行く

▽古屋 しばらくして、アイスクリームを1つだけ買って、

大谷の座っている場所に戻る

○ベンチ座っている大谷

古屋

「買ってきたぞ」

▽古屋 ソフトクリームを大谷に渡す

大谷

「ありがとうございます」

▽大谷 ソフトクリームを受け取るが、古屋の分が無いことに気づく

大谷

「古屋さんは、食べないの」

古屋

「あ？ 俺か？ いいよ」

大谷

「だめですよ。じゃ、これを一緒に食べましょう」

古屋

「いいよ、いいよ」

大谷

「今日は僕の誕生日、何でも言うこと聞いてくれるんでしょう？
それとも、僕の食べかけはイヤですか？」

古屋

「そうじゃないけど、わかったよ」

▽大谷 古屋の口にソフトクリームを持っていく

▽古屋 大口でかなりの量を食べる

大谷

「ひどーい。僕の分が減ったじゃ無いですか」

古屋

「だから言ったじゃないか」

大谷

「そんなんだから、女の人にモテないんですよ」

古屋

「それ、一体どういう関係？」

▽二人が食べている前を、泣きながら歩いている男の子が前を通り過ぎる

大谷

「あれ？あの子」

古屋

「どうした？」

大谷

「小さな子供が泣いてますよ」

古屋

「ほんとうだ。近くに親らしき人も見当たらないな」

大谷

「迷子かな」

古屋

「そうだな」

大谷

「ちょっと 持ってきてください」

▽大谷 ソフトクリームを古屋に渡す

▽大谷 泣いている男の子に近づく

大谷

「僕、どうしたの？ 迷子？」

▽男の子 泣いたまま、うなずく

Copyright@2026 D's

大谷

「そっか、離れ離れになったんだね。
じゃ、お兄ちゃんも一緒に探してあげるよ」

▽男の子 うなづく

大谷

「よし。じゃ、誰と来たの？」

大谷

「泣いていたら、探せないよ。名前は？」

男の子

「しょうへい」

大谷

「しょうへい君か。よし。誰と来たの？」

男の子

「ママとパパ」

大谷

「よし、じゃ、今から、ママとパパを探しす冒険に出発だ」

▽大谷 男の子の手を握る

▽大谷 古屋の方に行く

大谷

「古屋さん、この子、迷子になってパパとママとはぐれちゃったみたいです。」

ちよつと僕、一緒に探しに行くから、ここで待っててもらえますか」

「おいおい、俺をそんな薄情な奴と思うなよ。俺も一緒に探すよ」

「ありがとうございます」

▽大谷 男の子の前にかがむ

「この、おじちゃんも一緒に探してくれるから、もう安心だよ」

▽男の子 うなづく

「この子は安心かもしれないけど、俺をおじさん呼ばわりした君は、危険だということを忘れるなよ」

「はいはい、あとでちゃんと聞いてあげまぢゅよ、おじいちゃん」

「さらに年齢が上がるとるやないか」

「うるさい、おじいちゃんは放っておいて、パパ、ママ探しの冒険に出発だ」

「むやみに歩いてもしようがないから、まずは迷子センターに行きながら

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

大谷

古屋

探そうぜ」

「さすが、年の功ってやつですね。きつと、両親も探しに来てます。行きましよう」

「おっと、そうだ」

▽古屋 男の子を担ぎ上げ肩車にした。

「よし、しょうへい、そこからならよく見えるだろう、パパとママを見つけたら教えるんだぞ」

○遊園地の迷子センター

▽男の子の父と母 男の子を見て、泣きながら近づき男の子を抱きしめる

▽大谷 古屋 迷子センターから出る

「パパ、ママが見つかったよかった」

「そうだな。母親、あんなに喜んで。必死で探してたんだろうな」

大谷

古屋

古屋

大谷

古屋

古屋

大谷

古屋

▽大谷 少し悲しい顔をする

※父親に捨てられた時を思い出す

「おまえって、世話好きなんだな」

「そうですか？ 当たり前のことじゃないですか？
そういう古屋さんだって、肩車してあげてたじゃないですか？」

「子供の足だと時間がかかるからだよ」

Copyright@2020 DS

□第○幕 大谷の部屋

○遊園地の帰り 古屋の運転する車の中
助手席には大谷

大谷 「今日はありがとうございました」

古屋 「俺も、色々楽しかったよ」

大谷 「なんか、遊園地なんて何年振りなんだろう」

古屋 「そんなに好きなら、また連れて行ってやるぞ」

大谷 「本当ですか」

古屋 「ああ、本当。でも次は、おじいちゃんじゃなくて、お兄さんくらいにしといてくれよ」

大谷 「はい、わかりました」

○大谷のアパートの前

2階建ての、築年数がかなりたった古いアパート

古屋

「ここかい？」

大谷

「はい」

古屋

「なかなかクラシックな外観だな」

大谷

「正直に、ボロいって言っていていいですよ」

古屋

「そんなこと言っていないぞ」

大谷

「見た目は、こんなものだけど、中はちゃんと掃除してますから。部屋見ますか？」

古屋

「いいよ」

大谷

「せっかくなんで、コーヒーでも飲んで帰ってください」

古屋

「じゃ、せっかくなので」

▽大谷 家の鍵を開け、ドアを開く

大谷

「どうぞ」

○大谷の部屋

部屋は、洋室とその奥に広めの和室、そして小さなキッチンがあり俗に言う1Kである。

▽大谷 キッチンでコーヒーを入れる準備をしている

▽古屋 立ったまま部屋を見回す

▽古屋 小さな収納ボックスの上に、若い女性の写真と、男の人の写真が飾ってあるのを見つける

古屋

「この写真の綺麗な女の人は？」

大谷

「あ、それは僕の母です」

古屋

「お母さん、ずいぶん若くて綺麗だな」

▽大谷 カップに乗せたお盆を運んできた。

大谷

「ずいぶん 昔の写真ですから」

僕を産んですぐに死んでしまったので、僕は覚えてませんが、母は生まれつき体が弱かったらしくて、

医者から子供を産んではいけないって言われていたんです。でも、どうしても子供が欲しくて、

結局、無理して僕を産んであげた直後に亡くなりました。

お医者さんが、産まれたての僕を、すぐに母に抱っこさせてあげたそうです。

母は、たった数分間、

僕を抱っこしたまま天国に行きました。

僕を産んでいなければ、母は生きていられたのに」

▽大谷 顔に涙が溢れる

「死ぬと判っていても、

数分間、自分の子供を抱くことが出来て、姿を見ることができたんだ。

それが、お母さんの選んだ幸せなんだ。

確かに、おまえを産まなければ、

長生きできたかもしれない。

でも、おまえと出会えない人生よりも、

例え数分間にせよ、出会えたことが幸せだったに違いない。

それに、たった数分じゃない。

おまえの命がお腹に宿ったときから、お母さんは、幸せいっぱい生きてはずだ。

きつと一自分の幸せを感じていたはずだ。

人が本当にこの世から居なくなるのは、その人を思ってくれる人がいなくなるときだ。

こうして、おまえが時々お母さんの事を思い出してあげれば、お母さんは、ずっとお前の心の中で生きていくことができるんだ」

大谷

「そうですよね。僕には母の血が流れているし、

僕の子供に話して、いつまでも母のことを忘れないようにしてあげないとね」

古屋

「そっだぞ」

大谷

「あ、コーヒー冷めちゃってますね」

Copyright © 2013 D's

第三幕 会社で一番怖いのは〇

〇（日曜日 夕方） 繁華街。

▽大谷 古屋 街を歩いている

「ね、ね、今日は何にする？」

「そうだな、最近、昼は肉ばっかだよなあ」

「じゃあさ、イタメシにしない？」

「イタメシ？」

「そそ、僕、美味しい店見つけてきたんだ」

「美味しいって行ったのか？」

「う、うん。店の見た目だけ」

「なあんだ」

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

○古屋、大谷の反対側の歩道

▽松本 買い物帰り 古屋と大谷が歩いている反対側の歩道あるいている

▽松本 古屋と大谷の姿を見つける

松本 「あれ？ あそこ歩いてるの古屋さんと大谷君じゃないかしら？」

▽大谷 古屋の左腕を掴み、前後に大きく振って歩いている

松本 「おいおい、ちょっと、いくら二人は仲良しだからって、あんなことするか？」

▽女子A 松本の後ろを歩いているの二人組の女子の声が聞こえた。

女子A 「ねえあそこの二人見てみ」

女子B 「お、イケてる二人

女子A 「めっちゃ怪しいよ」

女子B 「ほんと〜。でもさ、二人ともイケテルから 有りかも」

女子A

「うんうん。萌えだわ」

松本

「ちょっとマジ？」

▽松本 気になり、歩く向きを変え、反対側の歩道から、二人を尾行する

▽松本 尾行しながら、亀山に電話

松本

「もし、アネゴ。松本です。今街に買い物に着てたんですが、古屋さんを見つけました」

(亀山)

(そこに古屋さんがいるの?)

松本

「たまたま見つけたんですよ」

(亀山)

(誰かと一緒なの)

松本

「ええ、誰だと思います」

(亀山)

(誰なの。私が知ってるひと)

松本

「ええ、よく知ってる人ですよ」

Copyright@2026 D's

(亀山)

(誰なの。早く教えてよ)

松本

「それが、大谷君なんです」

(亀山)

(へ、大谷君？ なら、安心ね。)

松本

「そう安心では無いですよ」

(亀山)

(なんで。古屋さんと大谷君なら、二人でいてもおかしくないわ)

松本

「腕を組んでもですか」

(亀山)

(腕？)

松本

「ええ、それは、恋人みたいな感じでして」

(亀山)

(嘘でしょ。見間違いないじゃない)

松本

「これでもですか」

▽松本 スマートフォンの画面を 古屋、大谷が歩いている方に向ける

亀山

亀山のスマートフォンに、二人が歩いている姿が映る
大谷が、古屋の腕を掴み笑顔で、古屋の顔を見ながら話している

(ちよつと見間違えじゃないの?)

松本

「いえ、確かです」

亀山

(古屋さんは、どんな感じ?)

松本

「気にはなっていないようです」

亀山

(そう。)

松本

「もう少し、様子を見てみます」

○イタリアンレストラン

▽大谷、古屋 店に入っていく

▽松本店に入り、二人から少し離れた場所に座る

○イタリアンレストランの古屋 大谷の席

○料理が運ばれてくる

「お！ きたきた」

「さあ食べるぞ」

▽古屋 フォークを取り、スパゲティをくるくる巻きだす

「あ、駄目ですよ。そんな巻き方は」
こうやって、スプーンを下に敷いて、巻いてください」

▽大谷 自分の皿のスパゲティをフォークに巻いてみせた

「ほら、こんなにコンパクトになるでしょ。はい、あーんして」

▽大谷 自分で巻いたスパゲティのフォークを古屋の口元に持っていく

▽古屋 そのまま口の中に入れ食べる

「どうですか。おいしいでしょう」

大谷

大谷

大谷

古屋

古屋

古屋

「そうか？ 巻き方で味が変わるとは思えんな」

▽ウェイター 食後のコーヒーをテーブルに置いた

▽大谷 古屋のコーヒーカップを自分の方にひきよせる
ミルクと砂糖を入れ、味見をする

大谷

「はい、古屋さん好みの味になりましたよ」

▽大谷 古屋にコーヒーカップを差し出す

古屋

「サンキュー」

○繁華街

▽大谷 古屋の腕を掴み 歩いて去って行く

○松本の部屋

▽松本 スマートフォンで会話している

松本

「と、以上が、今日の報告です」

亀山

「ありがとう。明日、もう一度 詳しく聞いわ」

○（次の日の朝） P & H 商事株式会社の給湯室

▽亀山、林 が、お茶の準備をしている

▽松本 慌ててやってくる

松本

「ごめん、ごめん、遅くなっちゃた」

林

「遅い松本。待ちくたびれたよ」

亀山

「で、どういうことなの？」

松本

「大谷は古屋さんにべったりでさあ、まるで恋人同士って感じで・・・」

林

「いやだあ、男同士よ」

松本

「それがさあ、二人ともイイ男じゃない。テレビドラマを見ているみたいで、こっちまで、次はどんなことするのか？ 興味出てきちゃって」

松本

「大谷が古屋さんに、ご飯を食べさせてる所なんかあ、興奮しちゃって・・・」

亀山

「何バカな事言ってるの！ そんな事あるわけないわ。誰かと見間違えたのよ」

松本

「そうかなあ、古屋さんも、嫌がっているようには見えなかったけど」

亀山

「いいわ、確認してみましょう」

○（昼）事務所 大谷の席

▽大谷 昼食から戻ってくる

▽大谷 机の上に置いていた、スマートフォンが無くなっていることに気づく

大谷

「無いなあ、どこに置いたんだろう？」

▽大谷 スマートフォンを探している

大谷

「どうしよう」

大谷

「そうだ、電話を掛けてみればいいんだ」

▽大谷 会社の電話から自分のスマートフォンへかけてみる

” トウルルルル・トウルルルル ”

受話器から呼出し音が聞こえる。

” ぶるんぶるんぶるん・ぶるんぶるんぶるん ”

バイブレーションの音が聞こえてきた。

その音は、なぜか大谷に近付いているように思えた。

松本

「君が探しているのは、コレかな？」

▽松本 大谷のスマートフォンを見せる

「あ、それです。どこにありましたか？」

亀山

「悪いとは思ったけど、スマートフォンの中を見せてもらったわ。

そのことで ちょっと聞きたいことがあるの？今晚、いいかしら？」

林

「断る理由はないわよね」

▽大谷 うなずく

○（夕方）会社近くの喫茶店

▽亀山 林 松本 が座っている

対面に大谷が一人座っている

▽亀山 大谷のスマートフォンを操作する

”今日も楽しかったです。古屋さんって、意外とシャイだったんですね。カワイイかったですよ。”

”今日の朝ご飯はおいしかったですか？古屋さんの好きなものはなんですか。”

”古谷さんの腕枕で寝るの最高です。今朝も、胸で寝てると安心します”

「何これ？」

「あなた、古屋さん何してるの？」

亀山

亀山

大谷

「いえ、別に」

亀山

「そんなわけないでしょ。こんなLINEを送るなんて」

松本

「ねえねえ、二人は付き合ってるの？」

大谷

「そんな関係じゃありません」

松本

「じゃ、一体どんな関係なの？」

大谷

「最初は、仕事教えてもらいに行ったりしてて、遅くなったりしたら、泊めてもらったり」

亀山

「そう、仕事を教えてもらってだけのね」

大谷

「そうです」

亀山

「幸い 古屋さんは、まったく相手にしてないうだけど」

林

「あなた、古屋さんの事、どう思ってるの？」

松本

「変態なの？」

亀山

「どうなの？」

大谷

「僕は、古屋さんのこと 好きです。とても、とても、好きです」

大谷

「最初は、課長から守ってくれたりして、すごくいい人だな、と思ってたんです。何回か、食事をして、話をして、家に泊まらせてくれたりと、僕は、古屋さんと ずっとずっと、一緒に居たいんです」

亀山

「一緒にいたいだけなの。体の関係は ないのね」

大谷

「はい。でも、古屋さんが許してくれるなら、僕は、そうなくてもいいですむしろ、そうなりたいです」

松本

「こいつ、とんでもない変態だ」

林

「大谷君、あなた自分のしていること判ってる？
あなたが好きって言うてるのは、
男の子が、サッカー選手を好きって言うてるのは、違うのよ。
普通じゃありえないことなのよ。」

古屋さんは、いい人だから、課長に、いじめられてたの見て、可哀相になって、親切にしてくれたんだと思うわ。きつと、古屋さん、すごく迷惑と思っているわ。それに、あなたが、本当に好きなら、迷惑かけては駄目じゃないの？」

大谷

「わかっていきます。古屋さんは、僕が、可哀相な奴で、しつこく付きまとうから、しょうがなく、僕に合わせてくれてるんだと思います。でも、僕は、それでもいい。ずっとずっと一緒にいたい」

亀山

「もういいわ。何を話しても無駄ね」

松本

「え、アネゴ」

亀山

「引き上げましょう」

▽亀山 席を立つ

亀山

「いい、古屋さんに変な事したら、許さないからね」

▽亀山 席を離れる

松本

「あ、姉御 待って」

▽松本 立ち上がりテーブルに置いてあった伝票を。ピラつかせる

「「ちそうさま」

松本

▽林 席を立つ

林

「悪いことは言わないわ。そんな思いは 早く捨てなさい」

○繁華街の道

▽亀山 松本 林が急足

▽松本 亀山に追いつき、顔を見る

「アネゴお、いいですか？ 放っておいて」

松本

亀山

「あそこで騒いでも解決する問題でもないわ。
あの子には、会社を辞めてもらいましょ」

「おいしいなあ。大谷君、結構カワイイから、弟にしたかったのに」

林

松本

林

亀山

「林さん、あいつに興味あったんですか？」

「そつよ、悪かった？」

「もう、林ったら」

▽亀山 少し笑みが出る

Copyright@2026 D³S

「X 接点」

(第四話)

み
ち
た
け

Copyright©2026 D³S

サブタイトル「亀山と古屋」

あらすじ

会社のお局を敵に回してしまった大谷
野上よりも陰湿なイジメが続きます

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕 嫌がらせ

○ (翌日の昼過ぎ) P & H 商事株式会社の事務所 大谷の席

▽ 大谷 外で昼食を済ませ自分の席に戻ってくる

着席し机の引き出しを開ける

引き出しに 雑誌が入ってる

大谷 「あれ？ なんで、こんなものが入ってるんだらう？」

大谷 不思議に思いながら雑誌を取り出す。

大谷 雑誌のページを開く

大谷 中を見て啞然

それは、男性向けの男性のポルノ雑誌だった。

▽ 大谷 慌てて、引き出しに戻そうとする

▽ 松本 大谷の後ろから手を出し、雑誌を取り上げる

松本

「やだあゝ大谷君、こんな読んでるの？」

大谷

「違います。僕のじゃないです」

松本

「今、仕舞おうとしてたじゃない」

大谷

「違います。びっくりして」

松本

「大谷君って、こんな趣味があつたんだあ」

大谷

「違います、違います。僕のじゃありません」

▽松本 大谷の隣の中島に声をかける

松本

「ねえ、中島君、大谷君って、男に興味あるみたいよ」

中島

「え？ 大谷って、こっちの方だったのか？」

大谷

「違いますって、勝手に入ってたんですって」

中島

「いいよいいよ。最近の子にはついていけないからなあ。」

大谷

お前だったら、別に驚かないよ」

「だから、違うんですって」

▽亀山 いつの間にか、大谷の席のそばにいる

「いいのよ。最近の子って私たちの理解を超えてるから。

それに、大谷君の様な中性的な感じの子って、こういった男性に憧れるのよね」

松本

「中島君、気をつけなくちゃあね」

中島

「あゝ、おれはガリガリだから、こいつの眼中にはないよ。

でもしかし、男にモテルのも悪くないかな？

大谷、始めのときは、優しく頼むぞ」

亀山

「もう、中島君たら」

▽川端 大谷の席をちらっとみる

※野崎の交代で来た、新任の課長野崎

川端

「おいおい、昼休みは終わったぞ。おしゃべりは止めて仕事、仕事」

川端

▽亀山 松本 自分の席に戻っていく

「大谷君、人の趣味にまで意見する気はないが、そういう雑誌は、会社に持ち込まないほうがいいな」

大谷

「いや、だから違うんです・勝手に・わかりました」

大谷は、いくら言っても信じてもらえそうもないので、あきらめて座った。

○（翌日）会社 大谷の席

▽影山 大谷の席にくる

※大谷と入社同期 総務課に配属

影山

「大谷君、封筒が届いたの」

大谷

「ありがとう、影山さん」

影山

「これも私の仕事だから」

「でもね、大谷君、同期のよしみで言うけど、どんな事情があるか知らないけど、こんなもの会社宛に発送しないほうがいいわよ」

大谷

「なんで？」

影山

「一応、会社の決まりなんで、中身をチェックしたけど、個人的な物はちょっとね」

大谷

「個人的な物？」

影山

「そうよ。とりあえず、渡したからね」

大谷

「うん。ありがとう」

大谷

▽影山 自分の部署に戻っていく

「誰からだろう？」

▽大谷 封筒の差出人を確認

大谷

「三平堂薬品・・・なんだ？ どこだ？ 個人的な物って言ってたけど」

▽大谷 封を開けてみる

封筒の奥の方に、小さなチューブのようなものが入っている

大谷は封筒を逆さにし、チューブを取り出した。

チューブにはラベルが貼ってあり、

”塗る肛門様”と貼ってある。

▽大谷 同封の用紙を開く

”痔主用塗り薬”

”大谷様、この度は試供品のご請求ありがとうございます。……”

「痔の塗り薬だって・・・なんで??？」

▽松本 大谷の後ろに立っている

「あれ、大谷君、痔なの？」

「いえ、違います。間違いです」

「まった、またあ、変なことしてるから、痔になるのよ」

「違いますよ。こんなの頼んでませんって」

「お尻に、何か変な物入れたんじゃないの？」

大谷

松本

大谷

松本

大谷

松本

大谷

「そんなこと、しませんって」

松本

「じゃ、どんなことなら、してるの？」

大谷

「いや、だから」

▽林 少し離れた次席から声をかける

林

「もう、松本さん、大谷君をいじめちゃダメよ。

人に知られたくないことなんだから、そつとしておいてあげましょうよ」

松本

「そうね。大谷君が、お尻に、何か入れて痔になった。なんて、言っちゃだめですよね」

(さらに 数日経過)

会社中の女子社員に、大谷の噂が広まるには、大して時間がかからなかった。そして、女子社員から男性社員へも伝わっていった。噂が広まると、噂が噂で無くなる。

▽大谷 パソコンに、社内メールが届いたので開く

” 大谷君ひさしぶり、東京の榎木です。元気ですか？ ”

「榎木君か、入社式で会っただけだな」

” 噂は聞いたよ。実は、僕もなんだ。うれしいな。”

” もし、まだ付き合ってる人がいないなら、僕と付き合わない？ ”

「なんだこれ？」誤解を解かなきゃ」

▽大谷 メールの返信をしようと入力している

▽亀山 大谷の後ろからみている

「大谷君、私用のメール禁止よ。

あら、東京の男の子とお盛んなのね。邪魔してごめんなさい」

「僕は、違いますって」

「じゃ、榎木君は、本物ってこと」

亀山

大谷

亀山

大谷

榎木

大谷

大谷

「知らないですよ。今、はじめて知ったのだ」

亀山

「いいのよ 隠さなくても」

(数時間後)

▽大谷 社内の休憩コーナーでコーヒーを飲んでいる

▽片岡 大谷に声をかける

※同期入社で開発部所属

▽片岡 自販機で飲み物を買ひ、蓋を開ける

「よ！ 大谷、久しぶり。元気にやってる？」

「元気に残業してるよ。そっちはどうだい？」

「俺も、元気に残業だ。来月には車を買ひ換えれそうだ」

「ところで社内はお前の噂でもちきりだぞ」

片岡

片岡

大谷

片岡

大谷

「そっか」

片岡

「噂は本当なのか？」

片岡

「新人研修の時から、彼女いない、いないって言ってたけど、まさか、そっち方面だったとはな」

大谷

「いや、そんなわけないよ」

片岡

「そっか」

片岡

「噂の出所は、お前のところのお局だろうけど、うちの部署のお局が、あの人に逆らうと、この会社でやっていけないって言うてるもんな
まあ女つてのは、結婚したら、会社辞めてどこかに行ってしまうんだ。
それまでの我慢さ」

大谷

「そうだね。がんばってみるよ」

片岡

「そしたら、仕事に戻るよ」

大谷

「うん。また」

Copyright © 2026 D's

(大谷)

メール A

メール B

メール C

メール D

○ (ある日の朝) 会社 大谷の席

▽大谷 メールソフトを立ち上げる
次々にメールが受信されていく

(すごいメールの量だ)

▽大谷 メールを一件開いてみる

「僕でよければ、サポートします」

「かわいいね。付き合って」

「マジで、やりたい」

「いくら？」

▽大谷 添付ファイルがあったので開いて見る
中年男性の裸画像が表示される

▽大谷 慌てて、画像を閉じる

Copyright@2026 D's

(大谷)

(なに、どうなってるの)

○事務所 古屋の席

▽古屋 自席で仕事をしている

▽杉本 古屋の席にくる

※システム課 課長 古屋の上司

「古屋 ちょっと」

「どうしました」

「急に会社のネットワークが重くなってるんだよ」

▽古屋 自分のパソコンで操作してみる

「確かに 重くなってますね。調べてみます」

「そうしてくれ」

▽古屋 サーバルームへ移動し

杉本

古屋

杉本

古屋

杉本

○サーバールーム

▽古屋 パソコンを操作している

「不特定多数から、画像付きメールが大量に届いているようだぞ」

▽古屋 パソコンの画面を見ている

「誰宛だ」

古屋
s

「これだな。」

これは……

大谷か……」

「あいつ、なにやったんだ」

古屋

▽古屋 大谷宛のメールを開く

男性同士が性行為を行っている動画が添付されていた。

「なんだ これは」

古屋

古屋

▽古屋 他のメールも開いてみる

「これもか。どうしてだ？」

▽古屋 パソコンを操作する

古屋

「おいおい、マジかよ」

▽古屋 さらにパソコンを操作

パソコン画面に、All Delete. の文字が表示された

古屋

「これでよし。ちよっくら事情聴衆でもしてくるか」

○（数分後）事務所 杉本の席

▽古屋 事務所に戻り、杉本の席に行く

杉本

「お、古屋。さすがだな。いつも間にか解決してるじゃないか。原因は なんだった」

古屋

「どっやら、パソコンのOSのアップデートがあったようです」

杉本

「また、いつものやつか」

古屋

「そうですね。迷惑極まりないです」

杉本

「ありがとうございます」

古屋

「いえ、どうって事ないです」

▽古屋 杉本の場所から離れる

古屋

「さて、俺は事情聴取でもするか」

○（数日経過後の昼休み） 会社近くの道

▽古屋 同僚と昼食を済ませ、事務所に戻るところ

公園の木下にしゃがんでいる大谷を見つける

▽古屋 近づき大谷に声をかける

古屋

「大谷、こんなところで、何してるんだ？」

大谷

「あ、古屋さん。この子を巣に戻してあげたいんですけど、

「どうしたらいいのか」

▽大谷 手のひらの中で鳴いている小鳥を見せる

「鳥の雛じゃないか。どうしたんだ」

▽大谷 顔を木の上に向け巣のあるほうを見る

「巣から落ちたのか？」

「あそこの巣から落ちたんだと思います」

「かわいそうだな。親鳥は気がついてるんだろうか」

「このまま置いておくと猫に捕まっちゃうんじゃないかと」

「そうだな。ここは自転車も通るし、よし、俺が戻ってきてやるよ」

▽古屋 大谷から小鳥を預かり、木に登り雛を巣に戻す

▽古屋 木から下りてくる

古屋
古屋
大谷
大谷
古屋
古屋

大谷

「古屋さん、ありがとう」

古屋

「おまえが、礼を言うことはないよ。昼食ってないんだろ。早く行ってこいよ」

大谷

「はい。 バイバイ、小鳥さん。もう落ちるんじゃないよ」

▽大谷 小鳥に手を振り、急いで食事を取りに向かう

▽古屋 待たせてた同僚のところに戻る

古屋

「わりいわりい。待たせたな」

同僚

「あいつだろ、お前に言い寄ってるって奴」

古屋

「噂になってるやつか」

同僚

「ああ、古屋はいいよなあ。異性だけでなく、同性からモテルんだもんな
うらやましいよ」

古屋

「そうだろ。じゃ、紹介してやろうか」

同僚

「無理だ、俺は、ビックサイズが好みなんだから」

古屋

「からかうなって」

同僚

「古屋は入社当時から、俺は常に、弱い者の見方でいたい。って言ってたからな」

古屋

「俺、そんなこと言ってたかな」

同僚

「ああ、入社面接の時に言ってた言ってた」

同僚

「でさ、本当は、どうなんだい。やったのか。俺には教えてくれよ」

古屋

「するわけないだろ」

同僚

「ちっ 面白くないな」

古屋

「面白くするなよな」

同僚

「冗談、冗談。結局、古屋を狙ってる女の ひがみからのでまかせだろうな」

古屋

「俺も そんなところだろうと思ってるよ」

Copyright@2026 D³S

□第二幕 マグカップの思い出

○（翌日の朝）事務所 大谷の席

席に着くと、女子社員がお茶を配っている姿が目に入った。

亀山？ 松本？ どっちが持ってくるんだろうか？

いや、お茶はいらぬ。挨拶をしたくない。そんな気持ちだった。

「はい、お茶」

▽亀山 大谷の席に、大谷のマグカップを置く

「ありがとうございます」

「いいえ、どういたしまして」

▽大谷 置かれたマグカップを見る、

びっしりと、油性マジックで落書きがしてあったのだ。

”ヘンタイ”

”ホモ”

亀山

” キモイ ”
” ヤメロ ”

「おはよ。変態さん」

▽亀山 その場を離れる

▽大谷 落書きされたマグカップを見つめている
目が熱くなり、涙がこぼれそうになる

▽大谷 席を立ち、個室トイレに向かった
その際、椅子と机がぶつかり、大きな音がした

▽古屋 音がした方を見る
大谷が急いで、事務所から出て行くところ目撃

(古屋)

(大谷 どうしたんだ)

▽古屋 大谷の席のところへ行く
落書きされたマグカップがおいてある

山下

▽古屋 マグカップを手にとり、落書きを見つめる

「彼女らも、酷いことするよな」

▽古屋 マグカップを掴み取り給湯室へ向かう

○男子トイレの個室の中

▽大谷 便器に座っている

▽大谷 上を向くと、目から涙が零れる

○給湯室

▽亀山、松本、林が話をしている

「もう、お茶を置いた時の顔ったら、最高だったわ」

「あいつ、泣きそうな顔して出て行きましたよ」

「これで、辞めちゃうかもしれませんね」

松本

林

亀山

「辞めてもらおうのよ」

▽古屋 給湯室に入る

亀山

「あ、古屋さん、コーヒーですか？ すぐ入れますね」

古屋

「いや、それより話がある。これのことで」

▽古屋 手に持っていた大谷のマグカップを亀山に差し出す

古屋

「どうして、こんなことをした」

亀山

「どうしてって、あいつは・・・」

あいつは、ヘンタイなんです。

男なのに、古屋さんの事を好きっていうから・・・
それで、ちょっと懲らしめてやろうと思って」

「それだけか」

亀山

「えっと、その・・・」

古屋

「男だと、男を好きになっちゃいけないのか？ 誰が決めた？」

松本

「男が、男を好きだなんて、変です。絶対変です」

古屋

「そうか。でも、俺も大谷の事が好きだ。だとしたら、俺もヘンタイだな。明日から、俺のコップにも、書いてくれるかい」

亀山

「そんなことはできません」

古屋

「なぜ」

松本

「古屋さんも変です。」

だって、アネゴ・・・

亀山さんは、古屋さんのこと、ずっと思ってたんです。それなのに、あんなやつとデートなんかして、」

亀山

「もういいわ。松本さん、ありがとう。あとは、私が」

私だって、古屋さんのこと、好きなんです。

大谷君が、会社に来る、もっとも前から古屋さんのこと好きなんです。でも、古屋さんは、会社では仕事ばかりで、全然、私を気にもしてくれない。

だから、今は、恋愛よりも、仕事が大事な人なんだな。

と違ってあきらめてたけど、

でも、大谷君がやって来て、古屋さんは大谷君とは仲良くしてて、相手は男だから、絶対大丈夫！ って思ってた。

そしたら大谷君が、古屋さんのことを、私だって、古屋さんの事、好きなんです好きで、好きでたまらないんです」

「ごめん、俺が大切にしているを、傷つける奴を好きにはなれない
「君は、大谷のことを勘違いしている。

俺と、大谷が、どんな関係なのかも知らないで。
あいつは、俺のことを好きと言ったかもしれないが、それだけじゃない。あいつは、全ての人が好きなんだ。

大谷は、過去に病気で母親を亡くした。
大谷の成長を見ることもなく、この世を去った。

きっと、大谷の成長を見たかったに違いない。生きたかったと思う。
大谷だって、母親に甘えたかっただろう。

そんな辛い経験をしているからこそ、人を嫌いになることができないんだ。
しかし、会社に入って、裏切りや嘘を知り、心が揺らいできた。

亀山さん、君ならわかると思ってたけど。
社会人になり、裏切られ、見切られた時の気持ち」。

亀山

「だからって、男の人が男の人を好きになるなんて 変よ！！！」

古屋

「男同士だから、女同士だから駄目っていうのは、

好きと言う言葉の意味を狭めていないか？

好きって、どういう意味だい。男女の関係になることか？

SEXをすることか？

父親が息子を見守るのは？

弟を助けるのは？

好きって言葉は、たくさん意味がある。

大谷が、俺の事を好きって言うなら、それでいいじゃないか？

少しは大谷の事を、わかってあげてほしいな」

それから、心配しているような体の関係は一切ないから。

俺だって、大切な大谷に傷をつけるような事はしたくないからな」

▽古屋 給湯室から出ていく

▽亀山 林 松本 給湯室にいる

林

「私たち、ちょっとやり過ぎたかもね。

私だって、亀山さんのこと好きだもの。

新人の頃の私の失敗を、新人の失敗は私のせいだからって、

野崎から いつもかばってくれて。

私も、いつかは、亀山さんみたいに、新人をかばえるような〇になるんだ。っていつも思った。

セクハラ紛いのことをされてた時、トイレで泣いていた時に、亀山さんに抱きついて、本当にほっとしたわ」

松本 「私だって、アネゴの事大好きよ」

亀山 「そうよね。私だって、林や、松本のこと大好きだもん。

私がムキなっただときに、冷静に止めてくれる林。

出来の悪い妹だけど、それが可愛い松本。私達も変態なのよね」

松本 「そうそう、変態、変態」

亀山 「大好きな古屋さんのファンが一人増えただけですもの 喜んであげなくちゃな」

林 「まあ、亀山さんより、大谷君の方が女らしいってのは、間違いないけどお」

亀山 「こらあ、はやし」

▽亀山 林 松本 笑い出す

□第三幕 古屋と亀山の出会い

○（十五時のお茶の時間が終わった）給湯室

▽亀山、林、松本が居る

亀山 大谷の落書きされたマグカップを手に、布巾で必死に磨いている
林 松本 それを見ている

松本 「あねご」 そんなの無理ですよ。油性マジックなんて落ちませんよ」

亀山 「このままじゃ、私の気が治まらないの」

▽亀山 ひたすら磨いている

松本 「ところで、アネゴは、どうして古屋さんに、ゾッコンなんですか？
大谷といちやつくなんて、私だったら、無理ですと」

林 「私も知りたいわ」

▽亀山 カップを磨いている手を停めて語り出す

亀山 「私ってさあ、会社に入りたての頃って、まだワープロもろく打てなくて、

ある日、野崎に、挨拶回りのスケジュールを作って言われて、はいって言ったものの、困ってたの。明日の朝までに全員にの机の上に配っておくようになって言われたのよ

(#フラッシュバック#)

←# 回想 #← 数年前 亀山 入社当時)

○ (定時後) 事務所 亀山の席

▽亀山 パソコンで文章を作成している

▽野崎 帰宅準備を済ませた野崎が亀山の席にくる

「おい、今日中に作っておけよ。パソコン得意・な・ん・だ・ろ？」

「はい」

▽野崎 事務所から出て行く

「あぁ〜面接の時に、見栄を張って、パソコン得意なんです。って

亀山

亀山

野崎

言わなければよかった。

でも、そんなこと言ってもしかたないわ。よし！ がんばろう」

▽亀山 パソコンを操作を続ける。

(数時間経過)

○(夜二十一時ぎ) 事務所

▽亀山 時計を見る

二十一時を指している

亀山 「新人の私が勝手にこんなスケジュール組んで、怒られないかしら？」

亀山 「でも、しかたないわね。課長命令だもん」

亀山 「よっし、だいぶん出来たわ。あとは線を引けばオツケーね。

ちよっとコーヒータイムにしましょ」

▽亀山 席を立つ

手が、キーボードに当たる

パソコンの画面に・・・・・・・・

ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR
ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR
ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR
ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR ERROR

▽亀山 慌てる

亀山

「え、え、どうなったの？ なんで？」

▽亀山 慌てているので、パソコンの電源スイッチを押してしまっ
パソコンの電源が切れてしまっ

▽亀山 パソコンの電源を入れるが、保存していないのでデータははい

亀山

「どうしよう・・・」

▽亀山 呆然とする

(一時間経過)

亀山

○（二十二時）会社 亀山以外誰もいない
亀山の席の周辺のみ明かりがついる

▽亀山 資料を作り直している

「ああもうだめ、終電までには出来そうにないわ
今日は、初めての泊まりになるのかしら」

○事務所内の明かりが着く。

▽亀山 事務所全体のあかりが着いたので驚く

▽古屋 事務所に入ってきて、亀山のそばにくる

古屋

「あれ、まだ会社に居たの？」

亀山

「ちょっと 仕事が残ってしまって」

古屋

「そつ。俺も、今 出張から帰ってきたところなんだ」

亀山

「こんなに遅くまで、お疲れ様です」

古屋

「ほんと、新幹線が大雨で遅れてこんな時間になってしまったよ。で、何してるの？」

▽古屋 亀山の作りかけたワープロ文書をのぞき見る

古屋

「ああ、これが。毎年やってるやつだな。ちよっと、貸してごらん」

▽亀山 席を立ち、古屋に席を譲る

▽古屋 すごい勢いでキーボードをうち、みるみるうちに資料ができあがる

▽亀山 少し心配になる

亀山

「あのお、みんなの予定も聞かずに、スケジュールを作っているんでしょうか？」

古屋

「なあに、誰がスケジュール作った？ って聞かれたら、俺だって言えばいいよ」

亀山

「そんなあ」

古屋

「大丈夫、大丈夫。そのうち、亀山さんも、私の作ったスケジュールに

文句あるの？って言えるくらいになるよ」

「私、そんな事いいませんよ」

「こりゃ、失礼しました。でも、君なら、優秀な営業アシスタントになると
思うよ。よし、出来た」

▽古屋 パソコンの印刷ボタンを押すと、プリンタから資料が次々に印刷される

「早く、みんなの席のおいて、帰ろうぜ。終電なくなってしまうよ」

(#フラッシュバック#)

→# 現在に戻る #→

○(現在) 会社の給湯室

「へえ、そんな事が有ったんですね」

「そういう、私も、何度か古屋さんに助けてもらったことあるわ」

「古屋さんって、不思議な魅力がありますよね」

亀山

古屋

古屋

林

松本

林

亀山

「それに、ほらっ」

▽亀山 両手に、古屋と亀山の赤と黒の柄がおそろいのマグカップを持つ

松本

「それって、アネゴのマグカップ。二つありましたっけ」

林

「亀山さんののは、赤じゃありませんでした」

亀山

「こっちが、私ので、こっちは古屋さんのよ」

林

「本当だ、いままで気がつかなかったけど、お揃いなんですね」

松本

「え、どうして、アネゴと古屋さんのマグカップが同じなんですか？」

亀山

「ひ・み・つ」

▽亀山 再びマグカップを磨く

亀山

「なかなか落ちないわね」

林

「あ、歯磨き粉使ってみます」

亀山

「それ良いアイデア」

林

「ちょっとロッカー行ってとってきますね」

▽林 給湯室を出る

○（就業時間後） 古屋の席

▽古屋 自席で仕事をしている

▽亀山 古屋のそばにやってくる

「古屋さん」

「どうしたんだい？」

「あの、これ……」

▽亀山 取っ手の取れたマグカップを見せる

亀山

「ちょっと力が入りすぎてしまっ……」

▽古屋 腕時計を見る

古屋

「亀山さん。今から時間ある」

亀山

「はい、大丈夫ですけど」

古屋

「じゃ、今から買いに行こう」

Copyright@2026 D・S

□ 第四幕 デパートにて

○（夕方）百貨店の食器売り場

▽古屋、亀山 マグカップの場所を探しながら歩いている

「どこに売ってるのかしら」

「俺も、コップなんて買ったことないからわからないな。店員に聞いてみようか」

▽古屋 店員を見つけたので 側に行く

「お客様、何かお困り事ですか」

「はい。マグカップの場所を探しているんですけど」

「それでしたら、「こちらへ」

▽店員 歩き出す

古屋 亀山 店員の後ろを着いていく

「「こちらで」お願いします」

店員

店員

亀山

店員

古屋

亀山

亀山

「ありがとうございます」

▽亀山 マグカップを手に取り見ている

店員

「いかがですか」

亀山

「そうね。大きいのがいいわね」。

店員

「新婚さんでしたら、こちらのペアカップなどお勧めしておりますよ」

▽亀山 古屋の顔を見る

亀山

「いえ、違うんです。友達のです」

(#フラッシュバック#)

←# 回想 #← 亀山 古屋とのもう一つのできごと

○(前回の出来事から さらに数ヶ月後)事務所

▽亀山 自席でパソコンで仕事をしている。

先輩女性社員

▽先輩女性社員 亀山の横に立つ

「ちょっと、暇だったら、みんなのコップ、漂白剤に付けておいてくれる」

亀山

「はい。わかりました」

▽亀山 立ち上がり給湯室へ行く

○給湯室

▽亀山 棚の扉を開けて、漂白剤を探す

亀山

「漂白剤、漂白剤と・・・」

▽亀山 二つの容器を両手に持つ

「あら？ これも漂白剤って書いてるわ」

亀山

「どしたらいいのかしら？」

亀山

「まあ、いいわ、二つとも混ぜちゃいましょ」

亀山

▽亀山 流しの洗面器に両表の液体を入れる

▽亀山 洗面器にカップを浸けていく

「なんか、目がしみるわね。あら、なんか、頭がぼおつと……」

▽亀山 コップを床に落としてし、取っ手が取れてしまう

▽亀山 その場に倒れる意識を失う

(数時間後)

○ビルの医務室

亀山がベッドで寝ている

古屋 亀山の横に座っている

「あれ？ ニジはどニジ？」

古屋

「気がついた。医務室だよ」

Copyright@2026 D'S

亀山

▽亀山 上半身を起こす

「あら、私、どうして・・・」

▽亀山 状況が飲み込めない

古家

「だめだよ、酸とアルカリを混ぜたら。塩素ガスが発生して、中毒になるんだから。俺が、もう少し行くの遅れてたら、危なかったんだぜ」

亀山

「え？ 私、みんなのコップを漂白剤に付けようとして」

古屋

「そうだよ、漂白剤の種類混ぜると危険なんだぜ。知らなかったかい？」

亀山

「ええ」

古屋

「まあ、しょうがないか。なにより、無事で良かった。もう少し休んでから、今日は家に帰りなよ。課長には俺が言っというてやるからさ」

▽古屋 医務室から出ていく

○（翌日）会社 古屋の席

▽古屋 自席で仕事している

▽亀山 古屋のところに行く

「昨日は、ありがとうございました」

「ああ、元気でよかった」

「何かお礼でも」

「お礼なんていいよ」

「でも・・・」

▽女子社員 古屋のお茶を持ってくる

「はい、古屋さん」

「ありがとう」

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

女子社員

古屋

Copyright@2026 D³S

女子社員

「このコップ、取っ手がとれてしまったんですね」

古屋

「ああ、また別の持ってくるよ」

▽女子社員 次の社員のお茶を配りに去っていく

亀山

「あのお、もしかして、そのコップの取っ手」

古屋

「ああ、気にするなって」

亀山

「そんな、私のせいですから、弁償します。今日の帰り、付き合ってください」

○（就業時間後） どこかの百貨店

▽亀山 古屋 百貨店の中を歩いている

「いいよ、新しいのなんて買わなくても」

亀山

「いいえ、悪いのは私なんですから。それに助けていただいたお礼もしたいし」

▽店員 古屋と亀山のそばにくる

店員

「いらっしやいませ。コーヒーカップですか？」

亀山

「はい。そうです」

店員

「新婚様でしたら、こちらのパアカップなんですが、お勧めですよ」

▽店員 ペアのカップに手をかざす

▽亀山 顔を赤らめる

古屋

「お、それいいんじゃない。シンプルで好みのデザインだな」

亀山

「じゃ、黒い方を一つで・・・」

店員

「一つで よろしいんですか」

亀山

「はい。黒い方を」

古屋

「じゃ、俺が、赤い方を買います」

店員

「こちらの方が、黒で、こちらの方が、赤ですね」

古屋

「はい。そうです」

亀山

「古屋さん」

古屋

「いって」

○（夜）道

▽古屋 亀山 が歩いている

それぞれの手には、デパートの紙袋が

「すみません。古屋さんのを買う つもりが」

「いいんだよ」

「私、これから毎日、このカップに古屋さんのお茶入れて持っていきますね」

（#フラッシュバック#）

→# 現在に戻る #→

店員

○（現在）デパート
「どういたしましたか？」

亀山

「あ、ごめんなさい。これ下さい」

○（夜）道

▽古屋 亀山 二人は食事を済ませ歩いている

古屋

「遅くなったね。家の人は心配してないかい」

亀山

「ええ。LINEを送ったから大丈夫」

古屋

「なら、いいんだ」

亀山

「今日は、ごめんなさい」

古屋

「それは、俺に言う言葉じゃないだろう」

亀山

「はい。」

よくよく考えると、私って、バカバカしいことしてたのね。

なにをムキになってたのかしら
意気地無しで、見ているだけしかできない私に比べて、積極的で、
思ったことを言える大谷君が、羨ましかったのね。
それで、あんな酷いことをしてしまっただけで、反省してるわ」

○公園の前

大きな階段がある（幅、段数もある）

▽亀山 立ち止まる

「私、こっちなんで」

「じゃ。気をつけて」

「さようなら」

「さようなら」

▽亀山 階段を駆け上がっていく

▽古屋 亀山を見ている

亀山
古屋
亀山
古屋

Copyright@2026 LIS

亀山

古屋

▽亀山 最上段まで登り、振り返る

「私、男になんか、負けませんから」

あいつより、優しくなってみせろ」

▽亀山 手を振りながら 階段の向こうへ消えていく

Copyright@2026 D³S

「X
接点」
(第五話)

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「大谷 ピンチ 再び」

あらすじ

亀山との誤解も解け、平和な生活と思いきや、新たな刺客がまっていた

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D'S

□ 第一幕 仲直り

○ (翌日の朝) 会社 大谷の席

▽ 大谷 仕事の準備をしている

▽ 亀山 大谷にお茶を運んでくる

「大谷君。おはよう」

▽ 大谷 ドツキとする

ゆっくりと振り向き 亀山の顔を見る

「おはようございます」

「大谷君、今までのこと、ごめんなさい」

▽ 亀山 昨日デパートで買ってきた真新しいコップを置く

「あのお、コップの落書き消そうとしてたら、力入れすぎて割れてしまったの
代わりのコップを買ってきたんだけど、どうかな？」

亀山

亀山

大谷

亀山

気に入らなければ、代えてくるわ」

▽古屋 大谷と亀山のところに来る

「どうだ大谷、気に入らないか？ 俺と亀山さんで選んだだけどな？
昨日、時間かけて、厳選に厳選して選んだんだぞ」

「私がしたこと、こんなもので許してもらえらと思ってないけど」

▽大谷 古屋の顔を見る

▽古屋 うなづく

▽大谷 笑顔になる

「はい。ありがとうございます」

「今までのこと、本当に謝るわ。ごめんなさい」

「もういいんです。僕も、ちょっと調子に乗ってたんです」

「おいおい、調子に乗ってたのか？ 俺は、本気だったんだぜ。」

古屋

亀山

大谷

亀山

大谷

古屋

亀山

「そうだ、今度の土曜日、三人で遊園地にも行くか？」

「え？ 古屋さんって遊園地に行くの。似合わないわよ」

古屋

「そうかな？ 似合わないか？ 最近 はまってるんだけどな。」

亀山

「うそそうそ、そんな以外性がいいの」

古屋

「大谷、場所と時間、セッティングしておいてくれよな」

大谷

「はい。わかりました」

古屋

「じゃ、そういうことで、無断欠席は許さないから、よろしく」

Copyright © 2026 D's

□第○幕 仲直りの遊園地

○(週末の土曜日) ユニバーサル・ランド

▽亀山 ユニバーサル・ランドに来て、はしゃいでいる

「古屋さん、大谷君 早く〜」

▽亀山 古屋 大谷 テーマパークの中を歩いている

「今日は、何から責めていくかい」

「えっと、まずは、海賊クルーズに乗って・・・」

「ははは、大谷君って、ユニバーサル・ランドの主みたいね」

▽亀山 古屋 大谷 ジェットコースターに乗る

○コースターから出たところ

「怖かった〜。大谷君って全然平気なのね」

亀山

古屋

大谷

亀山

亀山

大谷

「はい。全然、平気です」

古屋

「ようし、大谷 今日こそは、入ってもらうぞ」

大谷

「まさか、嫌ですよ」

亀山

「え？ 大谷君って、お化け苦手なおく。おもしろい」

古屋

「そうそう、お化け苦手なんだよな。俺の家のトイレ使うときも、ドア開けっ放しで入るんだもんな」

大谷

「そんなことしませんよ」

亀山

「大丈夫、私だって、怖いんだから」

大谷

「怖いから大丈夫って日本語、おかしいです」

亀山

「ホント、そうね」

古屋

「もう、いいから入ろうぜ」

▽古屋 亀山 大谷 お化け屋敷に入る

▽大谷 古屋の腕を掴み、怖い場所で古屋の胸に顔をうずめる

▽亀山 同様に悲鳴を上げて古屋にしがみついていた

○（夜）帰りの電車の中

▽亀山 古屋 大谷 の順番で横に座っている

大谷は、古屋にもたれ寝ている

「大谷君、よく寝てますね」

「昼間はあるなりに元気だったけどな、よつほど疲れたんだな」

「ほんと、大谷君って、子供みたいで、かわいいわ」

「ああ、年の離れた弟みたいだな」

「今日は、すごく楽しかったわ」

テーマパークが、こんな楽しかった所なんて、思ってもいなかったわ」

「そうだよな。俺たちの小さかったころは、遊園地ってすごく楽しい所だ

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

亀山

「ただ、大人になると、そんな気持ちが薄れていくんだよね」

「大谷君って、まだ少年の心を持つてるのよね。」

私たちって、大人に成りすぎてしまって、

楽しむより前に、何か他のことを考えてしまって、

結局、心から楽しむことが出来なくなっているのね」

古屋

「そうだな。俺たちって、好き嫌いの決めるのに、損か得を考えてしまうよね。こいつと付き合えば得だから好きとかって、おかしな判断基準を持ってしまったと思うよ」

亀山

「私、次の駅で乗り換えなんですけど、お二人はどうしますか？」

古屋

「明日も休みだし、このまま俺のマンションに連れて帰るよ。どうせ、起こして帰しても明日も来るつもりだろうから」

亀山

「そうね。兄なんですもの、弟の面倒、ちゃんと見てくださいね」

▽亀山 次の駅で電車を降りた

(ナレーション)

□第二幕 女王様の宴 もう一人のお局 (大谷 ピンチ！)

○(数日後) 会社

この会社には、お局様と呼ばれる人物がいる。
営業の亀山と、もう一人は経理の鈴木である

○会社の廊下

▽大谷と鈴木が廊下で話をしている

「大谷君」

「はい、要件はなんでしょうか？」

「大谷君、この前の交通費の精算間違ってたわよ」

▽鈴木 大谷に交通費の精算の内容を印刷したものを見せる

「これがなにか」

「うちの会社の決まり知ってる」

鈴木

大谷

鈴木

大谷

鈴木

大谷

「はい」

鈴木

「こんな交通費 出せないわよ」

鈴木

「あのね、飛行機使ってるでしょ。うちの会社は、基本、飛行機はダメなの、東京に行くには新幹線なの。伝票、書き換えてくれる？」

大谷

「新幹線だと、朝、一番での約束に間に合わなかったんです。ちゃんと課長の許可も取ってます」

鈴木

「そんなの関係ないわ。私は、会社の決まりに従ってるだけ」

大谷

「そんなあ、僕、困ります」

鈴木

「それに、朝一番なら、なぜ、前の日から行って、泊まらなかったの？それが正解よ」

大谷

「ちょっと用事があったんです」

鈴木

「どうせ、男の家にでも泊まってたんでしょ？」

大谷

「そんなことはしていません」

鈴木

「どうですか？
とりあえず、会社のルールでやってもらわないと、私が困るの」

大谷

「飛行機と新幹線だと一万円以上も違うんです。僕にとっては大金なんです」

鈴木

「大体、あなたが、男とイチャイチャしてるからでしょ。
ちゃんと前の日に出発をしてたら問題ならないのよ」

大谷

「そんなあ」

▽大谷 下を向く

鈴木

「いいわ、今回は大目に見てあげる」
その代わりに、私のお願ひ聞いてくれない」

大谷

「え？」

鈴木

「別に、取って食おうってわけじゃないのよ。
次の土曜日、私の家でパーティするの。その時に、お手伝いしてくれない」

大谷

「手伝いって」

鈴木

「料理を運んだり、飲み物をついだりしてほしいの」

▽大谷 黙っている

鈴木

「やあね。女子が主役のパーティーで、主役が飲み物を注いでたら主役じゃなくなるでしょ。それだけよ」

大谷

「わかりました。次の土曜日ですね」

鈴木

「そう。ちゃんとできたら、交通費回しておいてあげる
それに、私の友だちって、みんな羽振りがいいから、お小遣いもらえるかもね」

▽鈴木 去って行く

○（その週末の土曜日の昼） 鈴木のマンションのドア

▽大谷 呼び鈴を鳴らす

（チャイムの音）”ぴいんぽおん”

鈴木

大谷

女A

鈴木

女A

鈴木

○ドアが開く

「いらっしやい。みんな待ってたわよ。さあ入って」

「おじやまします」

○鈴木のマンスションの部屋

ソファーには、鈴木以外に二人の女性と、ガラステーブルを挟んで反対側のソファーに若い男性が床に座っている

▽大谷 リビングに入る部屋に通した。

「わあ、かわいい。いい子見つけたじゃん」

「でしょ。今年入った新人なの。ムチャしないでね」

「わかってるわよ」

「えっと、紹介するわね。会社の後輩の大谷君、あっちが、友達の、ハルカに、トモエね。」

それから、ハルカが連れてきてくれた、大学生の昭博君。結構イケメンでしょ」

大谷

「大谷です。よろしくお願いします」

鈴木

「大谷君は、昭博くんの横に座って」

▽大谷 昭博の横に座る

鈴木

「じゃ、みんなでカンパーイ」

(一同)

「乾杯」

▽宴会が始まる

女B

「男の達、食べ物とか飲み物なくなってきたら、キッチンから持ってきてね」

昭博

「わかりました」

鈴木

「大谷君、ビールついで」

大谷

「すみません」

Copyright@2026 D'sS

女A

昭博

女B

大谷

女B

大谷

▽大谷 鈴木のグラスにビールをつぐ

▽宴会を続けている

「君たちも飲みなよ」

「はい、いただきます」

▽女A 昭博のグラスにビールをつぐ

▽女B 酔った感じで、大谷の横に座る

「君ものんでる」

「僕は、お酒に弱いので」

「いいから、いいから飲んで」

「はい」

▽女B 大谷のグラスのビールをつぐこうとするが、酔ってさだまらず
ビールを大谷のズボンの上にかけてしまう

大谷

「あ、」

女B

「ごめん、ごめん」

鈴木

「もう、トモエ 何やってんの」

▽女B ビール瓶を机に置き、付近で大谷の濡れた股間の辺りを拭く

大谷

「もう、大丈夫ですから」

女A

「だめよ。ビールは早く洗濯しないと匂いが取れないわ」

女B

「そりゃ大変だ。早くズボンを洗濯しなきゃ」

鈴木

「大谷君、直ぐに洗濯してあげるから、ズボン脱いで」

大谷

「いや、本当に大丈夫ですから」

女A

「ダメよ、それとも、こんなおばさん達の前では、脱げないの」

大谷

「いえ、そんなことでは」

女B

「もう、しょうがないな」

▽女B グラスに入ったビールを大谷の服にぶちまける

大谷

「何をするんですか」

「悪い悪い。手が滑った。これなら、洗濯するしかないでしょ」

女B

▽女A ビールを昭博の服の上からかける

「え」

昭博

「これで仲間ができたから、いいでしょ。二人とも服を脱いで」

女A

「脱げ、脱げ」

女B

「そうよ、今から洗濯すれば、2、3時間で乾くわ」

鈴木

「ほら、君から脱いであげなよ」

女A

「はい。それじゃ、洗濯お願いします」

昭博

▽昭博 立ち上がり、シャツを脱ぐ

「良い体してるのね」

「でしょ、でしょ」

「大谷君も早く」

▽大谷 立ち上がり、シャツを脱ぐ

「大谷君で、脱ぐとすごいよね。知らなかった」

「こんなカワイイ顔して、腹筋すごい」

「ギャップ萌え」

▽大谷、昭博は、パンツ一枚の姿で、再び、ソファーに座る

「すごい腹筋ね。触ってもいい」

「はい。長距離をしましたので」

女B

女A

鈴木

鈴木

女B

女A

女B

大谷

女A

「昭博君だって、かっこいいわよね」

▽女A 昭博の胸を撫でる

昭博

「あ、ありがとうございます」

▽女B 大谷の太股とさすりながら大谷の顔を見る

女B

「ちょっと、やらしいこと考えてない」

大谷

「いえ、考えてないです」

女B

「本当？さっきより大きくなってわよ」

▽女B 大谷の股間をパンツの上から触る

▽大谷 手をどける

大谷

「止めてください」

女B

「ほら、絶対 固くなってるって」

Copyright@2026 D'S

大谷

▽女B もう一度、大谷の股間を触る

「違いますって」

▽大谷 再度、女Bの手をどける

鈴木

「そうよ。大谷君は、ゲイですもの。トモエなんかに興味ないんわよ。そうよね。大谷君」

「え、そうなの。もったいない」

「違います。違います」

「怪しいな」

「じゃっさ。昭博君ならどつっ？」

「なだから、違いますって」

「ねね、昭博君 さわってあげて ..」

「え、僕ですか」

昭博

女A

大谷

女A

女B

大谷

女B

女 A

「そうよ」

昭博

「それはちょっと」

女 A

「ごんねん。お姉さんの言うこと聞いてくれたら、お小遣いあげるのにな」

▽女 A 財布から一万円と取り出し、ひらひらさせる「

鈴木

「よし、私も その話のった。私も出すわ」

女 B

「じゃ、私も一万円」

女 A

「どうする。昭博くん」

鈴木

「でも、触るだけで三万円って、簡単すぎない」

女 B

「それもそうね。じゃ、大谷君をいかせるまでするってのはどう」

女 A

「いい。それいい」

鈴木

「それじゃ。決まりね」

Copyright © 2020 D's

大谷

「みなさん、何を言ってるんですか。僕は、嫌ですよ」

女A

「えええ、あんな事言ってるけど、どうする。昭博くん」

昭博

「本当に、大谷さんをいかせると、三万円くれるんですね」

鈴木

「ええ、ウソは言わないわ」

▽鈴木 机の上に一万円札を置く

▽女A 同じく、一万円を置く

女B

「じゃ、わたしも」

▽女B 一万円を重ねて置く

「大谷さん、すいません。俺、どうしても金が必要なんです」

大谷

「いや、でも」

昭博

「ちょっとバイクで事故をしてしまって」

大谷

「え、そうなの」

昭博

「はい。どうしても、どうしても必要なんです」

大谷

「わかったよ。じゃ、いいよ」

鈴木

「決まったようね。男同士の友情ってすてきね」

女A

「ほんと。ほんと。お姉さん感動したから もっと協力してあげる

大谷君が一回出す毎に、一万円追加で寄付するわ」

女B

「ハルカ ふつつっぱら。じゃ、私も協力するわ」

鈴木

「もう、みんなだめよ。大谷君の中がからっぽになるじゃない」

女A

「いいんじゃない。それじゃ、はじめて」

▽女A、女B 大谷、昭博から離れる

昭博

「大谷さん、すいません」

▽昭博 大谷の胸を舐めながら、手で下半身を揉む

(大谷)

▽大谷 目をつぶる

▽昭博 パンツの中に手を入れる

(あつ)

▽昭博 大谷をソファーに寝かせる

▽大谷、ソファーに横になる

▽昭博 大谷の膝の上にまたがる

▽昭博 大谷のパンツに手をかける。

▽昭博 大谷のパンツを脱がし、ソファーの下に置く

「わあ、結構大きいのね」

「毛が無いわ」

「そりゃ、ゲイだもの。身だしなみをちゃんとしてるのよ」

鈴木

女A

女B

女B

女A

鈴木

大谷

大谷

亀山

「私、パイパンってはじめて見たわ」

「私も。こうしてみると、これも有りよね」

「さあ昭博君 はじめてちようだい」

▽昭博 大谷の固くなったペニスを抜く

（あ、あ、あ、あっ）

▽昭博 大谷の目をつぶり、我慢している顔を見ている

▽昭博と大谷を見つめる三人の女

「やばい、いく」

○（月曜日の朝）会社 古屋の席

▽亀山 古屋のところにお茶を置く

「おはようございます」

古屋

「おはよう」

亀山

「なんだか元気がないみたいです。心配事ですか」

古屋

「うーん、めずらしく 今週は、大谷が来なかったんだよな。

LINEも無かったし」

亀山

「え？ 大谷君が？ めずらしいわね」

古屋

「ああ、今までは、こんなこと無かったからな」

亀山

「心配しすぎですよ。大谷君だって大人なんですから、彼女くらい出来たんじゃないかしら？」

古屋

「そうだと いいんだけど」

▽亀山 空席の大谷の席を見る

亀山

「大谷君まだ来てないのかしら。いつもなら、来てる時間なんだけど。ねえ、松本、大谷君みなかった？」

松本

「大谷君なら、さっき 経理課の方へ行きましたよ。」

亀山

鈴木さんに呼ばれたみたいで」

「鈴木に？ 松本、ちょっと、これもお願い」

▽亀山は 湯飲みの乗った盆を、松本に渡す

○会社 総務課の前の廊下

▽大谷 鈴木が会話をしている

「えええ、どういうことですか？ 交通費が出ないって」

「だから、先週、伝票を処理するの忘れちゃったのよ」

「僕の交通費は、どうなるんです」

「諦めてもらうしかないわね」

「そんな」

「しょうがないわよ」

鈴木

大谷

鈴木

大谷

鈴木

大谷

大谷

「なんとか ならないんですか」

鈴木

「まあ 私が、総務課長に頼めば なんとかなるかもね」

大谷

「お願いします」

鈴木

「そう言ってもね。

じゃ、もう一回私の言うこと聞いてくれる？
そしたら、総務課長に頼んであげる」

大谷

「そんなあ。もう嫌です」

鈴木

「いいじゃないの。君だって、いい思いしたんじゃないの」

大谷

「違います。あれは」

▽ 亀山 二人のところにやってくる

亀山

「大谷君、何やってるの？」

(鈴木)

(ゲ！ 亀山。)

Copyright@2026 D's

※鈴木的一年先輩にあたる亀山が苦手である

鈴木

「あら、亀山さん。お久しぶり」

亀山

「お元気。うちの、大谷が何かしたの」

鈴木

「大谷君が、出張の時に会社で禁止している飛行機を使ったから、書き換えてって言ったのよ」

▽亀山 大谷の方を向く

亀山

「そうなの？」

大谷

「はい。そうです。出張でどうしても飛行機を使う必要があったんですけど飛行機は禁止されてるから、新幹線を使ったことになって書き直してと言われてるんです」

亀山

「ねえ大谷君、どうして飛行機を使ったの？」

大谷

「お客様と九時に約束をしていて、飛行機じゃないと間に合わなかったんです」

亀山

「それじゃ、仕方ないわね」

大谷

「それで、鈴木さんに説明したら、飛行機の伝票を通したかったら、言うことを聞けと・・・」

亀山

「言うこと？」

大谷

「鈴木さんの家に来てくれと」

鈴木

「冗談じゃないわ、こんなガキんちよ相手にするわけないでしょ」

亀山

「わかったわ」

▽亀山 鈴木の方を向く

亀山

「そういう事よ。後は、あなたの方でやってちょうだい」

鈴木

「でも・・・」

亀山

「あなたが、友達と家でパーティと称して、若い男の子を家に呼んで、変な遊びをしてるって、噂になってるわよ。今度、この子に変なことしようとしたら、私が許さないから」

亀山

▽亀山 大谷の方を向く

「さあ、戻りましょう」

○エレベーターの中

▽亀山 大谷 エレベーターに乗っている

「ありがとうございます」

「本当に何もなかったの？」

大谷

「はい。何も。僕が鈴木さんのところに行ったの、どうして分かったんですか」

亀山

「うちには松本という情報通がいるのよ。
それに、鈴木が大谷君をマークしてる。なんて言ってたし」

大谷

「じゃ、松本さんに、お礼言っとかなくちゃ」

亀山

「お礼？ あの子にしたら、おしゃべりは趣味だけど」

「X接点」
(第六話)

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル 「プール」

あらすじ

大谷、古屋、亀山は、プールに遊びに行きます

そこで、迷子を見つけ親探しを

古屋、亀山は、どうして迷子に敏感なのかを大谷に尋ね、

大谷の幼少期にあった出来事を知ります

登場人物（本話のみ）

Copyright@2023 D's

□ 第一幕 プールにて

○ (夏の暑い日) 屋外プール

▽ 大谷、古屋、亀山、亀山、プールに遊びにきている

古屋、亀山 プールサイドのサマーベットに寝転んでいる

▽ 大谷 古屋の背中にオイルを塗っている

▽ 亀山 それを見ている

「大谷君って、ぜんぜん周りの目が気にならないのね」

「なんで気になるんですか？」

「いいじゃないか。俺も気にならないし」

「ふふ、そうよね。気にならないわよね」

「それとも、君が塗ってくれるかい？」

「結構です。人の彼氏になんかに塗ってもらいたくありませんから」

亀山

古屋

亀山

古屋

大谷

亀山

古屋

「あちゃゝ会社より、厳しいな」

亀山

「大谷君、その、むさ苦しいオジサンを塗り終わったら、私にも、塗ってくれない」

大谷

「はい、いいですよ」

亀山

「大谷君は、誰かさんと違って優しいわね」

大谷

「そんなことないですよ」

大谷

▽大谷 古屋にオイルを塗りながら、プールサイドの遠くの方をみる

「あ！」

▽古屋 体を起こす

古屋

「どうした？」

大谷

「ちょっと、待っててください」

Copyright@2026 D's

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

亀山

古屋

▽大谷 走って行く
走っていった先に、男の子が泣いている

▽古屋 亀山 それを見ている

「なにかしら」

「迷子じゃないかな」

「迷子」

「大谷、迷子みつけるの上手いからな」

「大丈夫かしら」

▽大谷と泣いている子供に近づく女性

女性は 大谷にお辞儀をしている

「母親かしら」

「そうみたいだな」

Copyright © 2026 D'S

亀山

「良かった。お母さんが見つかった」

▽大谷 古屋の元にもどってくる

大谷

「お母さんが来てくれたよかったです」

亀山

「大谷君って優しいのね」

大谷

「優しいってというか、親とはぐれた、あの子の気持ちを考えると、居ても立ってもいられなかったんです」

古屋

「大谷って、どうして そう迷子に敏感なんだ」

大谷

「急に、親が居なくなるって、どんなに悲しいか。経験してないとわからないです」

▽大谷は、サマーベットに腰掛け、自分の過去の出来事を話した

大谷

「母が死んで後、父がひとりで、僕の面倒見てくれてたんです。父は、昼間はずっと仕事で、僕はいつも一人で遊んでいました。そんな時、父が、プールに行こうって言ったんです。」

学校のプールしか知らなくて、父親から流れるプールや、波のできるプールの話を聞いて、わくわくしてました」

(# フラッシュバック #)

←# 回想 #← 大谷 父とプールでの思い出

○プールサイド

少年時代の 大谷と、大谷の父がプールに来ている

▽大谷と父が、プールサイドの椅子に座っている

目の前にはテーブルがあり、焼きそば、ジュースのカップがおいてある

▽大谷 焼きそばを食べている

大谷 父

「博紀、学校は楽しいか？」

大谷

「うん。楽しいよ」

大谷 父

「そっか。よかった。勉強がんばって、将来はうーんと稼がなきゃな」

大谷

「うん。いっぱい稼いで、父ちゃんを楽にしてあげるね」

大谷

▽大谷 テーブルの上の、レンズ付きフィルム（使い捨てカメラ）を見つける

「あ、カメラだ。買ったの？。何撮るの？」

大谷 父

「そりゃ、父ちゃんの一番の宝物に決まってるだろ」

▽大谷父 大谷に向かってシャッターを切る

大谷

「うちは、貧乏なんだから、無理しなくていいのに」

大谷 父

「子供が、心配するなって。せっかく来たんだし、博紀の泳ぐところを母さんにも見せてやりたいからな」

▽大谷父 さらに数回 シャッターを切る

大谷

「父ちゃんも撮ってあげるよ」

大谷 父

「父ちゃんは いいよ」

大谷

「お母さんだって、父ちゃんの写真を見たいはずだよ」

大谷

▽大谷 手を出す

「ほら、早く」

▽大谷父 大谷にカメラを渡す」

大谷

「父ちゃん、いい？」

大谷父

「いいぞ」

▽大谷 父に向けてシャッターを切る

○流れるプールの中

▽二人はプールの中にいる

「父ちゃんと、潜りの競争しよっか？」

大谷

「うん」

大谷父

「よし、いち、にの、さん」

Copyright@2026 D³S

▽大谷の父 先にプールに潜る

▽大谷 続けて大谷も潜る

▽流れるプールなので視界が悪い

▽大谷 プールから顔を出す

父が顔を出すのを待っている

▽大谷 しばらく待っているが、一向に父が上がってくる様子がない

「父ちゃん、まだ？ もう、いいよ」

▽大谷 プールサイドにあがり、座って父を待つ

○（夕方）プール

▽監視員 プールサイドにずっと座ってこる大谷を見つける

「おおい、僕、もう閉まる時間だよ」

○プールの事務所

▽大谷 バスタオルを巻いて椅子に座っている

▽別の監視員が荷物を持ってやってくる

監視員 A

「この子の言ったロッカーに、荷物が残ってました」

監視員 B

▽監視員 荷物のひとつ かばんを 大谷に見せる
「僕、この看板は、僕のかい」

大谷

「はい。そうです」

○大谷の住んでいるアパート
前に車が到着
中から、監視員と大谷が降りてくる

監視員

「僕の家はここかい」

大谷

「はい。ありがとう」

▽大谷 アパートの階段を急いでかけあがる

大谷

▽部屋のドアをあける

「ただいま！ 父ちゃん！」

しかし、父の返事は無かった。

→# 現在に戻る #→

○大谷の部屋

▽古屋 亀山は、大谷の部屋を訪れていた

「さあ、狭いけど入ってください」

「おじやましまあす」

「お茶入れますから、座ってくださいね」

▽大谷 湯を沸かしに台所へいく

「私、男の人の部屋に入るって、初めてだわ」

亀山

大谷

亀山

大谷

古屋

「え？ そうなのかい？」

亀山

「それって、どういう意味かしら？ 私が不純な女だとも」

古屋

「うゝん、深くはないけどね」

▽大谷 お茶を持ってくる

大谷

「はい、どうぞ」

▽亀山 収納ボックスの上の上に飾られた、大谷の母親の写真を見つける

亀山

「あら、コレがお母さんね。本当に、美人ね。大谷君は、お母さん似だったのね」

大谷

「そうですか？」

▽大谷 母似と言われ嬉しかった。

○母の写真の横には、幼い大谷がプールで取ったと思われる写真が飾ってある
横には同日撮影した父の写真も

亀山

大谷

「あら？ こっちがお父さんね」

「はい、そうです」

(#フラッシュバック#)

←# 回想 #← 大谷 高校二年生

○小村の家 小村の部屋

・大谷 高校二年生

・小村 高校三年生

▽大谷 寝そべって漫画本を読んでいる

▽小村 パソコンを操作している

「おい！ 博紀！ 父さん見つけたぞ！」

「え？」

「ちょっと来てみるよ」

小村

大谷

小村

Copyright@2026 D³S

▽大谷 起き上がりパソコンの画面を見る」

小村

「ほら、これ」

画面には、大谷 直人 ※大谷の父の名前 の現在住んでいる場所について書かれてあった

小村

「父さんの居場所がわかったんだよ。よかったな」

大谷

「父さん居場所が・・・」

小村

「前、孤児院に一度だけ、博紀に無名の荷物が届いたって言ってたろ」

大谷

「高校に入学する時に、送り主不明で制服が送られてきた時ですね」

小村

「俺、孤児院に行って、その伝票を探してもらったのさ。

伝票の番号から、どこから送られてきたのが判ったんで、その地域のネットの掲示板に人捜しのことを書いてたら、見つかったんだよ」

小村

「案外近いな。今から行こう」

▽小村 大谷の手を引く

大谷

「いえ、会いたくありません」

小村

「なんで、親父だぞ」

大谷

「僕は、捨てられたんです。だから、会いに行っても会ってくれるかどうか」

小村

「何言ってるんだよ。子供に会いたくない、親なんて、居るもんか。」

大谷

「博紀を手放したのは、何か訳があるに違いない。その訳を聞いてからでも遅くないだろ」

小村

「いいんです。もう、父の事は忘れたんです」

「いい加減にしろよ。会うのが怖いのか？
何しに来た。って言われるのが怖いのか？
もし、おやじさんが、博紀に、そんな事言ったら、俺が、ぶっ飛ばしてやる。
だから、来い」

▽小村 大谷の手を引っ張る

○小村の家の駐車場

▽小村 バイクに跨る 吉賀にヘルメットを渡す

小村

「早く乗れ」

▽大谷 小村の後ろに座る

小村

「すぐ付くからな、しっかり、握っている」

▽小村 大谷 バイクに乗り 父の住んでいるというアパートへ向かう

○（一時間後）あるアパートの前にバイクを停める

○アパートの玄関の前

▽小村 ドアの表札を確認

小村

「ここだ」

▽小村 呼び鈴を押す

「はい。待ってる 今 開ける」

中年男性

▽中年男性 ドアを開ける

Copyright@2020 D's

中年男性

「どなた」

小村

「あのお、大谷直人さんのことで」

▽中年男性 小村の後ろにいる大谷の顔見てうなづく

中年男性

「ああ、直人さんの。上がって上がって」

○中年男性の部屋

中年男性

「あんた直人さんの息子さんだね」

大谷

「はい」

中年男性

「すぐにわかったよ。本当に似ている」

中年男性

「直人さんとは仕事仲間だね。いい人だったよ。いつも、子供の事ばかり話してた。俺には、かわいい子供がいて、今は離れて住んでるけど、いつかは一緒に住むんだって」

大谷

「あのお、父は・・・」

中年男性

それで父は、どこにいるんですか？」

▽中年男性 立ち上がり、押し入れを空け、おおきな缶の箱を取りだし、大谷の前に置く

「この中に居るよ」

▽大谷 時間が一瞬止まる

「直人さんが、もし、息子が訪ねてきたら、渡してくれって、俺に預けたものさ」

▽大谷 缶の蓋を開ける

位牌が入っている

一つは、父、もう一つは母のもの

「直人さんお位牌は、俺が入れたんだけどな」

▽大谷 位牌を取り出し、さらに中の物を出す

▽大谷 薄汚れた巾着袋には通帳と印鑑が入っている

中年男性

中年男性

中年男性

「直人さんが、絶対 息子を大学に行かせるんだって、命を削って貯めた金だ」

▽大谷 古い使い捨てカメラを取り出す

中年男性

「そのカメラ、よっぽど大事な物みたいでさ、世界で一番大切な物が入っているんだって、いよいよ最後って時に、布団で寝ている直人さんが、そのカメラを取ってくれていうから、渡したら、すごく笑顔になって、そのまま逝っちゃってしまったよ。ほんとに、いい人だったのにな。なんでだろうな」

大谷

「でも、僕は、僕は、父に捨てられたんですよ」

中年男性

「おい、坊主、それは違うぞ」

中年男性

「直人さん、知り合いの借金の保証人になっちまってよ、それでそのサラ金の取り立てが、尋常じゃなくて、このまま一緒にいたら、子供に何されるかわからん。そう思って手放したんだ」

大谷

「そんな、そんな事で、僕は捨てられたんですか」

「違う、親つてのはな、我が子を一番守りたいものなんだ。我が子を危険にさらすくらいなら、自分はどうなってもいいと思ってる。直人さん、借金を返すままではとがんばって、やっと返し終わった時に、そのときは、すでに遅く体をこわしてしまっただよ」

▽大谷 小村 中年男性の家から出る

○カメラ屋の前

▽小村 カメラ屋の前にバイクを止め、大谷を待っている

▽大谷 カメラ屋から現像されプリントされた写真の入った袋を持ってる

▽大谷 袋から写真を取り出し、一枚一枚見る

大谷が父と最後に過ごしたプールで撮影したものだ

▽大谷 父の写真が一枚だけあったのを見る

大谷が撮影した父の写真だ

▽大谷 目に涙が溢れてくる

大谷

○（その夜）大谷の入っている施設 大谷の部屋

▽大谷 母の写真の横に父の写真、大谷の写真飾る

「父さん、母さんに僕の写真見せたいって、
言ってたよね。ほら、家族が揃ったよ」

→# 現在に戻る #→

○大谷の部屋

大谷

「僕は、父のおかげで大学に行くことができました」

亀山

「お父さん、大谷君のこと、心から愛していたのね」

Copyright@2020 DS

第二幕 大谷が発熱

○（プールへ行った翌日の月曜日）事務所

▽古屋 大谷の机に、大谷がいないことに気づき亀山の席にくる

古屋

「今日は、大谷 出張でも行ってるのか」

亀山

「違うわ、体調が悪いから休みますって、連絡があつたわ
熱が度あるんですって。昨日、ちよつと、はしゃぎすぎたのかしら？」

古屋

「ああ。そうかもな。ちよつと帰りに寄ってみるよ」

亀山

「そうしてくれる。私も心配だし」

古屋は、会社の帰りに、大谷のアパートに来ていた。

古屋の片手には、コンビニ弁当が入った、袋が下げられていた。

呼び鈴を鳴らすと、聞き覚えのある女性の声かしてドアが開いた。

中から出てきたのは亀山だった。

亀山

「古屋さん、いらっしやい」

古屋

「君も来てくれてたんだ」

亀山

「何か栄養のあるもの食べさせてあげようと思って」

亀山は、古屋の手に下がっているコンビニの袋に目をやった。

亀山

「やっぱり、古屋さんじゃ、コンビニ弁当が精一杯なのね。さ、入って、って私の家でないんだけど」

古屋は、玄関で靴を脱ぎ、奥の大谷が寝ている部屋に入った。

大谷は、布団の上で上半身を起こし、古屋を出迎えた。

古屋

「熱だった？ 大丈夫か？」

大谷

「はい、もう大丈夫です。熱はすっかり下がりましたかた、明日は出社できそうです。病院で見てもらったら、プール熱って言われました」

古屋

「プール熱？ 子供なんだから」

古屋

▽古屋 大谷の頭を思いっきりなでる
「明日ぐらい、休んでもいいんじゃないのか？」

大谷

「でも、仕事が溜まると嫌だし」

亀山

「大丈夫、大丈夫。こんな時しか休めないって」

亀山が、台所から小さな土鍋を載せたお盆を持ってきた。

亀山

「古屋さん、だめよ。まだ熱があるんだから」
はい、これ食べて元気になってね。
私、雑炊には自信あるんだから」

▽亀山 大谷に雑炊の入った茶碗を渡す

大谷

「ありがとうございます」

亀山

「沢山作ったから、いっぱい食べてね」

亀山

「古屋さんは、晩ご飯は、食べた？」

古屋

「まだだけど、こいつの無事確認したら、腹減ってきな」

亀山

「じゃ、一緒に雑炊食べる？」

古屋

「そうだな。コンビニ弁当は、明日の俺の朝飯にして、自慢の雑炊を頂くよ」

亀山

「じゃ、私も戴くわ」

亀山は台所に戻り、茶碗をつ取ってきた。

古屋

「大谷が病気で休むなんて初めてだから、ビックリしたよ」

亀山

「ほんと、週末はあんなに元気だったのに。私もビックリしたわ」

大谷

「すみません。ちょっとはしゃぎ過ぎたのかもしれない」

古屋

「謝ること無いって」

亀山

「とりあえず今は、熱を下げるのが先よ」

大谷

「はい」

大谷

食事も終わり、お茶を飲みながら、大谷が言った。

「会社の人、みんな親切です。

施設にいた頃って、こんなことしてもらったことがなくて。

あの野崎課長だって、根は良い人なんですよぶきっと」

あれほど、いじめを受けていた大谷から意外な言葉が出た。

大谷

「入社試験の面接の時です」

▽大谷 入社試験を受けた時のことを話します

(#フラッシュバック#)

←# 回想 #← 大谷の入社試験

○会社の会議室

▽大谷 椅子に座っている

▽反対側に 役員A、役員B、役員C、渡辺、野崎 が座っている

役員A

「この会社を受けた理由は？」

大谷

「はい、この会社の将来性と、僕が生涯かけて勤める価値のある商品開発を行っていると感じたからです」

役員B

「えっと、君には両親がいないようだが？」

大谷

「母は、僕が産まれてすぐに亡くなりました、父は・・・」

役員B

「お父さんの方は、どうしました？」

大谷

「父は、僕が高校の時に亡くなりました」

大谷は言った。

役員C

「施設で育ったようですが、親類などは、居なかったのですか？」

大谷

「はい。父も、母も親類とは絶縁状態でしたので、僕を引き取ってくれる人はいませんでした」

別の面接官が言った。

役員C

「うちの会社は、君も知ってる通り、世間に名の知れた会社だ。」

身元保証人が、はっきりしないとはねえ」

▽大谷 下を向き黙っている

▽野崎 他の面接官の方に向く

野崎

「親のことなんか関係ないじゃないですか？
の会社は、親の善し悪しで採用を決めるんですか？
偉ければ採用ですか？

の努力は認めないなんて、バカげた採用基準だと思えますけどね。
を、大企業と言われる、我が社がすることですか？」

▽野崎 大谷を見る

野崎

「君は、入社試験も上位におり、学生時代への成績も申し分ない、
どうだろう、我が社に貢献してくれないか」

大谷

「はい。もちろんです」

→ # 現在に戻る # →

○大谷の部屋

大谷

「その面接官が、野崎課長だったんです」

亀山

「そうなの」

大谷

「はい、僕、野崎課長のおかげで、こうして、この会社に入れて、
古屋さんや亀山さんに出会えたことに、感謝しています」

古屋

「突っ込み所としては、”会社の為”じゃなく、”俺の為”だったことだな。
その頃から、狙ってたんだな」

亀山

「古屋さん！ せっかく、大谷君が、いい話してるのに、
変な方向にもっていかないでよ」

古屋

「ごめん、ごめん。俺は、あいつが大谷にした行動は、未だに許せないな」

大谷

「もう、いいんですよ。こうして人が、ここに入れるのは、
あの人のおかげなんですって」

古屋

「相変わらず、いい方向に解釈するのね」

古屋

「まあ、それで男に手を出すってことは、うちの会社には、お前より魅力的な女の子が居ないってことかな？」

亀山

「もう、古屋さんたら。女の子全員敵に回す気？」

さっき飲んだ薬が効いてきたのか？ 大谷は眠くなってきた。

大谷

「少し、眠くなってきました」

亀山

「ごめんなさい。うるさくして」

古屋

「もう少し、居てやるから、少し寝ていろよ」

▽大谷 布団をかぶって眠りにつく

○（数十分経過） 大谷の部屋

▽大谷 ぐっすり寝ている

▽古屋、亀山 迎え合わせに大谷を見ている

亀山

「大谷君の寝顔、かわいいわね」

古屋

「ああそうだな。それに、ほら」

▽古屋 布団の中に入れてあった手を出す
大谷が古屋の手を握っていた。

亀山

「あら」

▽亀山 クスツと笑う

亀山

「私、はじめ大谷君が古屋さんの事、好きって言った時、
単なる変態だと思ってたけど違うのね。」

きつと、幼い頃にお父さんと離れて、大谷君の中では、
父親に対する愛情が止まったままになってたのよね。
そして、お父さんの様な存在の古屋さんに出会って、
その時間を取り戻そうとしているだけなんだわ」

古屋

「そうかも知れないな。こうして手を繋いでいても、ちつとも嫌な気にはならない。
むしろ、俺も昔、こうして親父の手を繋いでいたんだなと思うと、ほっとするよ」

亀山

「私、今は、大谷君のお母さんの分を取り戻して、あげたい気持ちでいっぱいだよ」
私、そろそろ帰るわね」

古屋

「おっと、もう、こんな時間だ」

亀山

「こう見えても、年頃の女なんですから、遅く帰ると怒られちゃうわ」

古屋

「俺は、もう少しここに居てやるよ。起きていなかったら寂しがるだろうし」

亀山

「ええ、お願いするわね」

古屋

「駅まで送っていくよ」

亀山

「大丈夫よ」

古屋

「年頃の女なんだろう？」

▽古屋 大谷の手を解き立ち上がる

○大谷のアパートのドア

▽古屋 ドアをそっと閉める

Copyright@2020 D's

○夜道

▽古屋、亀山が歩きながら話す

「今日は、ありがとう。雑炊おいしかったよ」

「よかった。どうせ家に帰ってもすることなかったし」

「来てくれて助かったよ」

「大谷君が、熱出して休んだって聞いたとき、すぐに、寄って帰ろうって気持ちになったの。不思議ね。」

こうして、古屋さんと親しくなれたのは、大谷君のおかげね。

大谷君がいなければ、こうして二人で、歩いてなかったと思うわ」

「案外 大谷がいなくても、君とはこうなってたかもしれないよ」

「また、またあ。」

大谷君が居なかったら、私たんなる意地悪ババアでいたかもね」

「そうかもな」

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

「ちょっと、そこは、否定しなくちやいけないところですよ」

古屋

「悪い悪い」

亀山

「こんなに古屋さんと、冗談が言える仲になれたんですもの。半年前では考えられなかったことだわ。やっぱり大谷君に感謝しなきゃね」

○駅の改札、

古屋

「今度、食事でもどうかい？」
もちろん、二人だけで、だけど」

亀山

「いいわ。楽しみにしてる」

▽亀山 改札を通りホームへ行く

○亀山家の玄関

▽亀山 玄関のドアを開けて家に入ってくる

亀山

「ただいま」

Copyright@2026 D's

亀山
母

「お帰り。遅かったわね。晩御飯は大丈夫なの」

▽亀山 玄関で靴を脱ぐ

亀山

「ええ、食べてきちゃったわ」

亀山
母

「会社の人たちと？」

亀山

「そんなものね」

○亀山家 リビング

亀山

「ごめんなさい。急だったから」

▽亀山 ソファに腰掛ける

亀山
母

「最近 帰りが遅いけど、もしかして、いい人でもいるの？」

亀山

「そんなのじゃないわ。今年入った新人の面倒をみているのよ」

亀山
母

「ちょっと、新人で男じゃないでしょうね」

亀山

「男の子よ。今年 大学出たばかりよ」

亀山
母

「ちょっと、そんな若い子とは止めてよね」

亀山

「大丈夫よ。本当に仕事教えてるだけだから」

亀山
母

「お母さん、あなたを信じるけわ」

亀山
妹

「なにになに、お姉ちゃん、彼氏できたの？」

亀山

「だから、ちがうって」

○（翌日の朝）会社の給湯室

▽亀山、林、松本が 井戸端会議中

松本

「亀山さん、なんかうれしそうですよ」

亀山

「え？ そっ」

松本

「ほんと、ほんと、なんか、良いことありました？」

亀山 林さんも、そう見えるでしょう」

「そんなの、無い無い」

「そうそう、大谷君、今日も休んでますね」

「そうね、早く元気になってくれるといいんだけど。
そうそう、今日、一緒にお見舞い行かない？」

▽林、松本 不思議そうに顔を見合わず

「大谷君のところですか？」

「そうよ」

「いやあ。その男の人のアパートに行くつてのは、抵抗が」

「私も、ちょっと、止めておきます」

「しょうがないわね。私一人で行くとするか」

「亀山さん、一人で行くんですか？」

松本 亀山 林 松本 亀山 松本 亀山

「そつよ。昨日も行ってきたんだから」

その日の帰りも、亀山は夕食を作り、大谷のアパートに向かった。亀山の目的は、大谷の夕食だけではない。

古屋に会えることも理由の一つだった。その日後、大谷は元通り元気なり、入社するようになった。

Copyright@2020 D'S

「X
接点」
(第七話)

みちたけ

Copyright©2026 D³S

サブタイトル 〽大谷の恋人候補〽

あらすじ

大谷に彼女をつくろうと、古屋 亀山は相談します。

そして、彼女候補に挙げたのは、なんと 大学生の亀山の妹でした

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□第一幕 大谷に恋人をつくらう

○（夕方）会社のビルの前

大谷の熱はすっかり下がり、会社に出勤していた。

▽大谷 出張先から帰り

「就業時間とつくに過ぎちゃった
古屋さん もう帰っちゃったかな」

○会社の1階ロビー

▽古屋 会社のロビーの柱に立っている

▽大谷 古屋を遠くで見つける

「古屋さんだ！」

▽大谷 古屋に近づこうとする

▽亀山 古屋の前に現れる

大谷

大谷

Copyright@2026 D's

亀山

「待たせてごめんなさい」

古屋

「俺も今来たところだから。いこうか」

亀山

「はい」

▽古屋、亀山 歩き出す

▽古屋 亀山 大谷に気づく

亀山

「あら、大谷君、今出張からの帰り。おつかれさま」

古屋

「よ、おつかれ」

大谷

「お疲れ様です」

古屋

「じゃ、また明日な」

▽古屋、亀山 会社から出て行く

▽大谷 出て行くところをみてる。

Copyright © 2026 D's

レストランの中

▽古屋、亀山 食事をしている

「古屋さんから、食事に誘ってくれるなんて嬉しいわ」

「この前の約束だからね」

「別にいいのよ。大谷君は、私たちの子供みたいなものなものだもの」

「おいおい、いつから、俺にあんな大きな子供ができたんだい？」

「古屋さんって、今、気になる人ってるの？」

「実は、正直に言うと、いるよ」

「そうよね」

「おいおい、君もよく知ってる子だよ」

「私の知っている子？」

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

「そう。毎週、毎週押しかけてくる子さ」

亀山

「なあんだ。大谷君じゃない」

古屋

「最近は、小姑気取りだからな」

亀山

「それは大変だわ。私にとっても強敵ね」

古屋

「しかし、このままじゃ、いけないと思うんだよな」

亀山

「そうよね。いつまでも、古屋さんベツタリじゃ困るわよね。なんとかしてあげないと」

古屋

「さすがに、このまま年を取ってしまうい、爺同士でキモイお付き合いですのは、想像　できないもんな」

亀山

「あら？　いいじゃない。きっと、いいカップルになるわよ」

古屋

「おいおい」

亀山

「ふふふ。大谷君って、女性に恋したことないのかしら？」

古屋

「本人は、無いって言うてるけど、本当っぽいな」

亀山

「今のご時世、大谷君のような子って、需要高そうなんだけどな」

古屋

「草食系って意味かい？」

亀山

「そう」

古屋

「草食系って・・・それって、本当に恋してるのかな？

って時々思うよ。単に、女の子にとって、都合のいい男ってことじゃないのかな？」

亀山

「そうね。私たちの息子を、そんな女の子と付き合わせるなんて、やっぱ駄目ね」

古屋

「誰かいい人知らないかい？」

亀山

「う〜ん？　うちの課には、松本と林がいるけど」

古屋

「そうだな、できたら、会社の人じゃないほうがいいな」

亀山

「ちょっと、当たってみるわ」

亀山

古屋

「頼むよ。俺のためにも」

「いいわよ。でも高くつくわよ。こんなところの食事ですまさないから」

Copyright@2026 D³S

□ 第二幕 妹 登場

○ (その日の夜) 亀山家のビング

▽ 亀山 風呂上がりにソファで髪を乾かしていた。

目の前では、妹の千里(ちさと)が座って、テレビを見ている

「ちょっと、あんたの友達で、彼氏募集してる子いない？」

「アネキ、何よ？ 突然」

「うちの会社に、良い子いるんだけどなあ。紹介しようかと思って？」
「以前から、」会社には、ろくな男がない」が口癖の姉だったので、

「姉貴の会社の人って、ロクなの居ないっじゃなかったけ？」。

「それが、それでも、ないのよね。今年の新人は」

「え？ どんな子？ 写真ある？」

「ちょっと待ってね」

亀山

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

亀山

▽亀山 スマートフォンを取り出し、画像を妹に見せる

「ほら、この子よ」

▽千里 亀山のスマートフォンを取り画像を見つめる

「え！ カワイイ。いくつ？ いくつ？」

「確か、今年入社だから二十二ってとこね。あんたの一つ上よ」

「へえ ちょっと頼りないかも？ でも、この顔だと、許せるかな？」

「何、言ってるの？ あんた意見なんて聞いてないわよ」

「なんで？ 私じゃだめ？」

「え？ あんたが？ そんなことより、卒業できるの。就職先だって、まだなんですよ」

「卒業は余裕よ。姉貴はいいよな。大企業のOLになれて求人みてるけど、ぜんぜんいいとこないのよね」

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

「選り好みし過ぎよ」

千里

「今は、売り手市場なの。妥協はできないわよ
それに、この子、姉貴の会社ってことは、将来安定だし
そのまま、御世話になるってのもありね」

亀山

「なに言ってる。一回は、社会に出て世間をしておくべきよ」

千里

「はいはい。じゃ、私で決まね」

亀山

「いや、あんたが、よくても、こっちがね」

▽千里 亀山のスマートフォンを操作している、

千里

「ねえ、この人誰？」

▽千里 スマートフォンにあった、古屋の画像を亀山にみせる

亀山

「え？ それは・・・」

千里

「この人の画像、結構あるよ。さては・・・」

亀山

「いいから、返しなさい」

▽千里 亀山にスマートフォンを取られないとうにかわす

千里

「ね、ね、お母さんには秘密にするから、この子、紹介して」

亀山

「わかったわ、だから返して」

千里

「よっし」

▽千里 スマートフォンを亀山に返す

亀山

「まあ。いいわ。失敗しても、あんたには責任感じなくて済むし」

千里

「なによ。責任って。私だって大丈夫よ」

○（翌週の日曜日の朝）駅前 待ち合わせ場所

▽古屋、大谷 待っている

大谷

「今日は、どこに行くんですか？」

古屋

「いつもの遊園地でいいんじゃないか？」

大谷

「遊園地じゃないですって、テーマパークですよ」

古屋

「どっちでも いいじゃないか」

大谷

「いえ、遊園地は、子供がいくところですよ」

古屋

「子供だろ」

大谷

「亀山さん、遅いですね」

古屋

「ああ、女つてのは、出かけに時間かかるからな」

亀山

「ごめん、ごめん、遅くなって。」

「この子が、なかなか服決めないから」

亀山の後ろに見たことのない女の子

千里

「お姉ちゃんが、厚化粧してるからじゃん」

亀山

「私のせいっていうの、もう、何いってんのよ」

古屋

「あのおくもしもし」

▽古屋 割って入る

亀山

「ごめんなさい。紹介するわ、妹の千里（ちさと）です」

千里

「こんにちは。千里です。今日は、よろしく願います」

亀山

「こちらは、会社の先輩の古屋さんで、こっちは、大谷君ね」

古屋

「古屋です。よろしく」

大谷

「大谷です」

古屋

「亀山さんの妹なのに、ぜんぜんカワイイじゃん」

亀山

「ちょっと古屋さん、今のはどういう意味？

あとで、じっくり説明を聞くわね」

古屋

「冗談冗談。そしたら、行こうか」

○電車の中

ロングシートで 古屋と大谷、向かい側に 亀山と千里が座る

大谷

古屋

大谷

亀山

古屋

千里

大谷 古屋の耳元に顔を近づける

「亀山さん、どうして妹を連れてきたんですかね」

「単なる、人数合わせだろ？ いつも、男人に女人だとな」。

「そうなんですか」

「なに？ 人で話してるの？」

「こいつが、千里さんカワイイですね。って」

「ありがとう。大谷君も、カッコイイよ」

大谷 照れてうつむく

○ユニバーサル・ランド

それでも、遊園地に入ってしまうと千里の事も気にならず、
むしろ、年齢が近い分、アトラクションなどの意見も合い、
意気投合し
つつあった

○テーマパーク内の休憩所

▽三人はパラソル付きテーブルの下で休憩していた。

千里

「大谷君って、遊園地大好きなんだ」

大谷

「うん。そうだね。ここだけ日常の生活と違うからね。会社のことを唯一忘れることができる場所かな」

千里

「ははは、すごく大切な場所なんだ」

大谷

「うん」

千里

「ねえねえ。大谷君、次は何乗ろうか？」

亀山

「えーっ、私は疲れたから、あんたたちだけで乗ってきてちょうだい」

大谷

「古屋さんはどうしますか？」

古屋

「そうだな、このご老体の介護でなくちゃいけないから、俺も遠慮しとくよ」

千里

「もう、年寄りほっておいて、私たちだけで行きましょう」

千里 立ち上げり、大谷に手を出す

女の子と手をつなぐなんて、小学校の運動会でフォークダンス以来の

大谷。少し、戸惑いながらも手を出し繋ぐ

千里

「私、もう一回 あれに乗りたい」

大谷

「じゃ、もう一回、あれ乗りに行きますか？」

亀山

亀山と古屋 2人の後ろ姿を見る

「二人、うまくいくと良いわね」

Copyright@2026 D's

□第三幕 昭博との再開

○（ある日の土曜日）街のどこかの待ち合わせ場所

▽大谷と千里が 誰かを待っている

大谷

「今日は、千里さんの友達と会ったよ」

千里

「そうよ、私の親友なの。最近、かっこいい彼氏ができたから、お互い見せっこしようってことになったの」

大谷

「え？ 僕、彼氏になったの」

千里

「まあ、そういうことかな」

（大谷）

（千里さんの友達って、どんなんだろう・・・）

香

「ごめん、ごめん、待ったあゝ」

▽駆け寄ってくるカップル

千里

「香、待ったわよお」

香

千里

香

「ごめん、彼と寝坊しちゃっ……」

「彼と？　　っでもしかして、もう？」

「あたりまえじゃん、付き合ってるんだから」

Copyright@2020 D's

(#フラッシュバック#)

←# 回想 #← 鈴木の部屋での出来事

○ 鈴木のマンスションの部屋

▽大谷 丸尾に陰茎を扱かれている

「どうして、こんなことをするんだい？」

「すみません。バイクで事故って、女の人ケガさせて、手術にお金がいるんです」

「でも、どうして？」

「すぐに大金が欲しかったんです。

すきまバイトを探していたら、

オークションで、アレを、〇〇 万円で買いますって」

「でも、よりによって、そんなバイトを・・・」

「入院に、お金が必要なんです。しかたないんです。」

大谷

昭博

大谷

昭博

大谷

昭博

「すみません。許してください」。

「わかった。協力するよ」

「はい」

(#フラッシュバック#)

→# 現在に戻る #→

「二人ともどうしたの？」

「もしかして、イケメンネットの知り合いだったとか？」

「香、そんなのあるの？」

「言ってみただけ」

「え？ 初めて。ちょっと似た人と知ってるから」

「僕も、偶然ですよね」

大谷

丸尾

千里

香

千里

香

昭博

大谷

Copyright@2026 D's

▽大谷 丸尾 顔を見合わせる

香 「あれれ？ 二人ともいつの間にか、仲良しじゃん」

千里 「ねえ、そんなことより、彼を紹介してよね」

香 「丸尾昭博（まるお 昭博）君。まだ、大学生の歳よ」

香 「大学生なの？ しかも年下だし」

香 「若いっていいわよお。いろんな意味でね」

千里 「私？ 大谷博紀（おおたに ひろき）君、姉と同じ会社に勤めてるの」

香 「お姉さんって、たしか？ ○○でしょ。すっごい、一流企業じゃん」

千里 「ま、ね」

▽四人 食事をする

▽香 席を立つ

香

「私、化粧なおしてくるね」

千里

「じゃ、私も」

▽千里、香 女性 パウダールームへ向かう

▽大谷 丸尾 顔を見合わせる

大谷

「驚いた、こんなところで会うなんて」

丸尾

「そうですね。僕もびっくりしましたよ。でも彼女らに気づかれずにすんでよかったですよ」

大谷

「そうだね。ところで、事故の方はどうなったの？」

昭博

「おかげさまで、示談済んで事故の件は無事に解決しました」

大谷

「よかった。もう会うこともないと思っていただけ、気になってたんだよ」

昭博

「本当にあの時はありがとうございました。男として、最低のことをして、すいませんでした」

大谷

「いや、いいんだ。それで、誰かが助かるならこのまま、彼女たちには初対面ってことにしておこうか？」

昭博

「そうですね。僕もそれがいいと思います」

▽千郷 香 席にもどってくる

香

「そうそう、昭博たら、少し前、バイクで事故して大変だったんだから」

千里

「バイクで？ ケガは無かったの？」

香

「昭博は大丈夫だったんだけど、相手にケガをさせて、お金が要るようになったのよ。」

私もそんなに貯金があるわけでないし、どうしようかと思ってるなら、昭博、なんとかバイトして稼いできてなんとかなったのよ」

千里

「今時、そんな割のいいバイトってあったの？」

香

「そうなの。いくら聞いても教えてくれないのよね。昭博」

昭博

「え？ だって、バイトの話なんてつまらないよ」

香

「ほらあ、言えない」

千里

「香ったら、昭博君、男前だから、ホストでもしたんでしょ？」

昭博

「千里さんまで、そんなバイトじゃありませんよ」

大谷

「少くらしい秘密があってもいいじゃん。それに昭博君は、
そんな人に見えないよ」

香

「ああ、男同士だと、かばうんだから。まあ、終わったことだしいいわ」

○レストランからの帰り道

▽大谷 千里 駅に向かって歩いている

「今日は、楽しかったわ」

「そうだね。香さん、よくしゃべってくれるし、話がおもしろかったよ」

「香ったら、昔から、ああなのよ。昭博君もいい子でよかったわ」

「そうだね。ずっと続くといいね」

大谷

千里

大谷

千里

千里

「でもね、私、昭博君のこと、少し気になった」

大谷

「どうして？」

千里

「ずっと、大谷君のこと見てたもん」

大谷

「僕を？」

千里

「そうよ。会ったときから、ずっと、見てたわ」

大谷

「なんでだろう？」

千里

「ふたりとも男前だから、危険だわ」

大谷

「危険って・・・」

千里

「冗談よ、冗談。だって、二人ともカワイイんだもん。焼いちゃうわよ」

大谷

「ははは、そうだね、昭博くんは、誘われたら、断れないかも」

千里

「もう、冗談でも止めてよ。絶対、誘われてもだめよ」

大谷

「はい。誓います」

Copyright@2026 D³S

□ 第四幕 昭博に誘われて

○ (翌日の日曜日) 古屋の家

▽ 大谷 ソファーに座りテレビを見ている

▽ 古屋 シャワー浴びてタオルで頭を乾かしている

「おい、今日は千里ちゃんとデートはしないのか？」

「昨日、ちゃんとデートしましたよ」

「昨日したから、いいってもんじゃないぞ」

「今日は、亀山さんと買い物だそうですよ」

「そっか。じゃ、いいか」

「そういう古屋さんこそ、亀山さんとうなんですか」

「何言ってるんだ、俺と彼女は、まだそんな関係じゃないぜ」

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

▽大谷 スマートフォンが鳴ったので画面を見る
昭博からの着信

大谷 「ちょっと、電話なんで出ます」

昭博 「大谷さんですか？」

大谷 「うん、そうだよ」

昭博 「丸尾です。昭博です」

大谷 「うん、電話帳登録してたから、わかってるよ。
どうしたんだい？」

昭博 「今、電話だいじょうぶですか？」

大谷 「うん。いいよ」

古屋 「だから？」

大谷 「千里さんの友達の彼氏。
今度の土曜日、みんなで晩飯どうですか？ っ
って」

古屋

「いいんじゃないか。若者もの同士で。行ってこいよ」

○（土曜日の夜）繁華街の居酒屋

▽大谷、千里、香、昭博 居酒屋で座敷に座っている

香

「ね、ね、昭博 今日は何んの集まりなの」

昭博

「せっかく知り合えただから、もつと親睦を深めようと思ったんだよ」

香

「みんな、ごめんね。忙しいのに呼び出しちゃって」

千里

「いいわよ。私たちも大勢の方が楽しいんだから」

（一同）

「乾杯！」

（歓談）

香

「ねね、千里と大谷君は、どこまで行ったの？」

千里

「どこまでってってねえ。大谷君」

大谷

香

昭博

香

千里

大谷

▽千里 大谷の顔を見る

「香さん。僕たちは、真面目なんです」

「いやだ、大谷君 まじめって」

「こら、香、そんな事 聞く方がおかしいぞ」

「ごめん」

▽香 千里にウィンクをする

「ははは、いいの いいの 私たちは、真面目だから まだなのよ
ね、大谷君」

「はい そうです」

(数時間後)

○ (深夜) カラオケ店の前

Copyright@2026 D's

香

「結局 終電行っちゃったね。どうする」

千里

「どうしようっか」

昭博

「もう一回、入って 朝まで、ここで歌っちゃおう」

香

「だめよ。昨日も言ったでしょ。明日、お母さんが家にくるの。掃除しとかなくちや。」

それに、あんたの出した、汚いものが、ゴミ箱に入ってるの。そんなの見られたら大変なもの」

昭博

「その汚い物を出してくれたのは、香じゃないか」

千里

「内輪もめはやめて。ちょっと姉貴に連絡してみるから」

▽千里 亀山に電話をかける

「もしもし……」

▽千里 電話を終わる

千里

「香、私の家までタクシーで行きましょう。そこから姉貴が、

香のマンションまで車で送ってくれるって」

香 「ラッキー。でも 昭博達は どうする？」

昭博 「そっか、じゃ、僕もタクシーで帰るよ。大谷さんは、僕の家泊まっていけば明日、電車で帰る方がお金がかからなくていいよ」

大谷 「え？ 僕かい？ 僕も家までタクシーで帰るよ」

香 「大谷君 昭博のところ泊めてもらいなよ」

昭博 「そうですよ。ここから大谷さんの家って、遠いでしょ。絶対、僕の家まで行く方が安くつきますよ」

大谷 「どうしようかな」

昭博 「明日は、なにか用事でもあったんですか」

大谷 「別に 何もないんだけど」

昭博 「じゃ、決まり」

大谷

「そんなに言うなら、そうしようかな」

▽4人 タクシーを拾う

▽千里 香 前方のタクシーに乗り込む

香

「じゃ、またね」

昭博

やんと家に着いたら、メール遅れよ」

香

「うん」

千里

「大谷君またね」

大谷

「うん。気をつけて。亀山さんにもよろしく」

▽千里 香の載せたタクシーが出発

▽昭博 大谷 後方のタクシーに乗る

○タクシー 出発する

昭博

○（三十分後）昭博の住んでいるマンション部屋
▽昭博 扉を開ける

「さあ、入ってください」

大谷

「おじやまします」

▽大谷 部屋に入る

▽昭博 扉を閉め、大谷につづく

▽大谷 少し奥にすすみ部屋に入る

昭博の部屋

ワンルームマンションで、部屋は広くないが、新築のため綺麗な部屋の真ん中に、小さな一人用のローテーブル
奥に 広めのベッドが置いてある

大谷

「綺麗な部屋だね」

昭博

「狭くて」「めんなさい」

Copyright@2026 D's

大谷

「そんなことないよ。僕の部屋だって狭いよ」

昭博

「楽にしてくださいね。今、飲み物入れますから」

▽大谷 ガラステーブルの前に座る

大谷

「結構 飲んじやったから 構わないですよ」

昭博

「じゃ、水にしますね」

大谷

「うんうん。それでいいよ」

(二人 しばらく会話)

(数時間後)

「そろそろ寝ますか？」

「そうだね」

昭博

「寝る前にシャワー浴びてください」

大谷

「僕は 後でいいから、昭博くん、先にどうぞ」

昭博

「いえ、お客様が先ですって」

大谷

「そうかい。じゃ、先にシャワーを借りるよ」

▽大谷 立ち上がる

▽昭博 立ち上がりタンスからバスタオルとタオルを大谷に渡す

昭博

「シャワーは、玄関の横です」

大谷

「ありがとうございます」

昭博

「うち、ユニットバスなんで、ここで服を脱いでいった方がいいですよ」

大谷

「そうなの」

昭博

「中では服脱げないですから」

▽大谷 上着を脱ぎ、ズボンを脱ぎ、パンツ姿になる

昭博

「ほんと、大谷さんの体って綺麗ですよね」

大谷

「ありがとう」

昭博

「こんな綺麗な体の人に抱かれるなんて、千里さんが羨ましい」

大谷

「そんなことないって」

▽大谷 廊下を通り玄関横のユニットバスの扉を開ける

○昭博のマンションの浴槽は、ユニットバスになっており トイレと浴槽が

一体となっているタイプ

「じゃ」

大谷

「どうぞ。」「っゆくり」

昭博

▽大谷 ユニットバスの扉を閉める

▽大谷 パンツを脱ぎ、トイレの蓋の上におく

▽大谷 浴槽に入り、シャワーカーテンを引く

Copyright©2026 D's

昭博

▽大谷 シャワーの湯を出し、体に浴びせる
▽大谷 石鹸で体を洗い出す
○ユニットバスの扉が開く

「すみません。お湯がもつたないので、「一緒にさせてください」

大谷

▽大谷 シャワーの湯を一旦止める

「そうだね。どうぞ」

▽大谷 シャワーカーテンを開ける
全裸の昭博がたっている

昭博

「すみません」

▽大谷 少し動いて、昭博の場所をつくる

▽昭博 浴槽に入る

Copyright@2026 D's

昭博

「さすがに、二人は狭いですね」

大谷

「大丈夫、大丈夫」

▽昭博 大谷の下から上にかけて見る

大谷

「どうしたの？」

昭博

「大谷さんて、顔もいいけど、体も綺麗ですよね」

大谷

「さっきも言ってたけど。昭博君だって、イケメンだし身長があつてうらやましいよ」

昭博

「大谷さんに そういつてもらえるとうれしいな」

▽昭博 シャワーヘッドを取り、湯を出す。

手で、温度を確認し、シャワーの湯を大谷の股間にあてる

昭博

「前の時も気になったんですが、大谷さんって、どうして 下の毛を剃ってるんですか」

大谷

「ああ、中学から陸上部だったから、その時からずっとかな」

昭博

「そうなんですね。僕は、剃ったことがないので」

大谷

「そうだね。すごく立派じゃないかな」

昭博

「僕も、剃ってみようかな」

大谷

「剃る必要はないと思うけどな」

昭博

「結構、友だちでも剃ってるって人多いんですよ」

大谷

「そうなんだ」

昭博

「ちょっと触っていいですか」

大谷

「いいけど」

▽昭博 片手で大谷の陰茎を持ち上げ、もう片方の手で、睾丸をさわる

昭博

「すげえ」

大谷

「そんな 大げさなことないよ。」

Copyright@2026 DS

▽昭博 手を離す

「シャワー貸してくれる」

「あ、僕があらってあげます」

「悪いよ」

「遠慮しないでください。後ろ向いて」

▽大谷 昭博を背に後ろに向く

▽昭博 ボディソープを手に出し、大谷の背中をこする

「はい、次は、前を向いてください」

▽大谷 前を向く

▽昭博 ボディソープを手に出す

▽昭博 大谷の胸、腹を洗い出す

昭博

昭博

大谷

昭博

大谷

昭博

「大谷さんの腹筋で、めっちゃかっこいいですよ。俺なんか腹筋ないし」

大谷

「陸上部って、体脂肪が無いんだよね」

昭博

「そうなんです」

▽昭博 ボディソープを手に出す

昭博

「ここも綺麗にしますね」

▽昭博 大谷の陰茎を両手でつつみ、洗う

大谷

「そこは いいよ」

昭博

「だめですよ。ここはちゃんと洗わないと」

▽昭博 時々指先を大谷の肛門まで届かせる

大谷

「いや、そこは」

昭博

「大丈夫ですって。それとも、ここもですか」

▽昭博 片手で大谷の乳首を刺激する

大谷 「本当に 止めてくれない」

昭博 「あれ、大谷さん、大きくなってる」

大谷 「そりゃ、昭博君がそんなことするから」

昭博 「ねね。このまま扱いたら、また出ますかね」

大谷 「そりゃ」

昭博 「じゃ、出してください」

大谷 「いや、無理でしょ」

昭博 「そうですが」

▽昭博 立ち上がり 大谷の体を反対に向ける

▽昭博 大谷の後ろから抱きつき、大谷の頬にキスをする

大谷

「だ・だ・だめだよ。こんなことをしちや」

昭博

「だめって言っても、ほら、こんなになっけてる」

▽昭博 片手で大谷の陰茎を扱っている

大谷

「なんで、こんなことするの」

昭博

「俺 実は、あの時の大谷さんのことが忘れられない。
あの時の切ない顔、もう一度見せてくださいよ」

大谷

「だめだったら、あっ」

▽大谷 足がガックとなる

昭博

「いつまで、我慢できますか」

大谷

「あっ、あ、あ、い」

昭博

「感じてきてますやん」

Copyright © 2020 D'S

大谷

「あ、だめ、もう、い、いく」

▽大谷 足が がくつく
浴槽に大谷の精液が落ちる

▽昭博 大谷の陰茎を絞る

昭博

「ほら、出た」

▽大谷 腹が大きくうごいている

昭博

「かっこよかったですよ」

▽昭博 大谷を強く抱きしめる

大谷

「これで、満足したかい」

▽大谷 シャワーを浴び、バスルームから出ていく

▽大谷 服に着替える

昭博

「大谷さん どうしたんですか」

Copyright@2026 D³S

大谷

「僕、やっぱり帰るよ」

▽大谷 昭博のマンションの扉を開けて出て行く

○（深夜）タクシーの中

▽大谷 タクシーに乗っている

（大谷）

（昭博はどうしてあんなことをするんだろう。僕も、古屋さんに、同じことしてる。古屋さん どう思ってるんだろう）

Copyright@2026 D's

□ 第五幕　　微妙な距離の人々

○（ある日の夜） レストラン

▽ 古屋　 亀山　 食事をしている

「千里ちゃんと大谷は上手くやってるのかな？」

「さあ？　あんまり話は聞かない事になっているけど、休みの日は会って食事したりはしてるみたいよ」

「そっか。ならいいんだ」

「どうかしたの？」

「最近、大谷がオレのこと避けてるようなんだよな」

「うそお？　大谷君が？　古屋さんを？」

「俺が話しかけても、そっけないんだよな。休みの日も来なくなっただし」

「へえ、いいことじゃない」

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

古屋

「そっだよな」

亀山

「なんか大谷君よりも、古屋さんの方が心配だわ」

古屋

「え？ 俺かい？」

亀山

「そっよ。まるで大谷君が離れていくことを、淋しがってるわよ」

古屋

「そんなんじゃないけど、やっぱり様子が変わるんだよな」

亀山

「ねえ、古屋さんも、大谷くんのことばかり考えてなくて、

少しは私のことも考えてよね」

古屋

「え？」

亀山

○（その日の夜）亀山家 千里の部屋

▽亀山 千里の部屋のドアを叩く

「千里、私 入るわよ」

○千里の部屋

千里 ベットに寝そべり雑誌を読んでいる

「おねえちゃん 何？」

「最近、大谷君とはどうなの？」

「順調にやっってるわよ」

「そう順調ならいいんだけど」

「でも、まだなのよね」

「まだって？」

「あれよ、あれ。鈍いなあ。」

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

千里

彼って、奥手なのよね。
もう、何ヶ月も経つんだし、そろそろなんだけどな」

「あ、ああ。あれね」

「ところで、彼がどうかしたの？」

「別に、最近ちよっと会社で元気なさそうだから・・・」

「ああ、それね。なんか、最近オンラインゲームに沼って寝てないんだって。だから、昼間はずっと眠いらしいよ。まだまだ、ガキだよね」

「ゲーム？」

「そう」

「ゲームか」

「せめてデートの前の日くらいは、ゲームを止めてほしいわよね」

「そうね。会社でも眠そうなんだし、今度言っておくわ。じゃ、おやすみ」

亀山

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

千里

亀山

▽亀山 千里の部屋から出て行く

○(夜) 大谷の部屋

▽大谷 部屋で座り込んでいる

部屋の明かりは点けてない、
頭にはヘッドホンをし、大きな音がそこから、漏れている

(大谷)

(古屋さん・・・)

僕は、なんてことをしてたんだろう・・・
きつと、気持ち悪かったんだろうな・・・
僕が、可哀想だから、我慢してたんだろうな・・・
いや、違う、古屋さんの優しさは本当だから・・・
でも、やっぱり、僕が古屋さんにしたことは、変だよな・・・
僕は、昭博君と同罪なんだ・・・)

○大谷のスマートフォンが光る

▽大谷 スマートフォンを取り上げ 画面を見る

千里からの連絡

”明日、会える？”

▽大谷 ”いいよ。”と返信をする

Copyright@2026 D'S

□第六幕 千里とのデート

○（翌日の昼）街中

▽大谷 千里 歩いている

「今日は何しようか？」

「そうねえ、プールが行きたいわ」

「プールって？ もう秋だよ」

「大丈夫、ホテルの温水プールならやってるよ」

「でも水着も持ってないし」

「貸してくれるわよ。」

それとも、姉貴らとはプール行って私とじゃ嫌なの？」

「そんなことないけど」

「じゃ、行こうよ」

千里

大谷

千里

大谷

千里

大谷

千里

大谷

○ホテルのプールのフロント

結局、大谷は千里に言い切られ、ホテルの温水プールに行くことにした。フロントで受付を済ませ、プールのある階にやってきた。

フロント係

「お二人様ですね」

千里

「はいそうです。水着もレンタルね」

フロント係

「かしこまりました」

○プールのフロント レンタル水着を飾ってある場所

▽大谷 千里 水着を探している

千里

「さすが一流ホテル。水着もブランド物を揃えてるわ」

大谷

「僕は、これにするよ」

▽大谷 裾の長めのオーソドックスなサーフパンツを選んだ

千里

「そんなの ダメよ！ 私が選んであげるから」

千里

▽千里 男性物の水着のかかったハンガーをめぐりだす

「これがいいわ」

▽千里 競泳用の水着を選ぶ

大谷

「それは、ちよつとまずくない？」

千里

「なんで？ これがいいって。これにして」

▽千里 大谷に選んだ水着を渡すまでもや、千里に言い切られてしまった。

千里

「私は、これ」

▽大谷 千里 更衣室に行く

(数分後)

○ホテルのプールサイド

さすがに秋の昼間 誰もいない

▽大谷 バスタオルを羽織り、女子更衣室の出口で待っている

(数分後)

▽千里 出てくる

「おまたせ。どっ？」

紺色のタイトな

▽千里 大谷を見て、ドッキとする

バスタオルを羽織っているが、隙間から 胸の厚さ、腹筋が割れ具合が分かる

「すごく似合ってるよ」

「ありがとう。大谷君もよく見せて」

▽千里 大谷のバスタオルを取る

大谷の均整の取れた、肉体が疲労される

「大谷君、めっちゃカッコイイ。姉からカッコイイよとは聞いていたけど、想像以上だわ。その水着も とっても似合ってる」

千里

大谷

千里

千里

「

大谷

「ありがとう。ちょっと恥ずかしいな」

千里

「ぜんぜん大丈夫。すごく似合ってよ。速入ろうよ」

大谷

「ダメダメ、準備運動してからだよ」

千里

「はいはい。そんな所はキッチリしてるんだから」

▽大谷 千里 プールに入る

千里

「ね。競争しよっか」

大谷

「いいよ」

千里

「ここから端までよ。負けたら、勝った方の言うことを聞くのよ」

大谷

「じゃ、本気だしちやうね」

千里

「いいわよ。じゃ、スタート」

大谷

▽千里 先に 泳ぎ出す

「ずるいよ」

▽大谷 泳ぎはじめる

(数秒後)

▽大谷 顔を上げた時 千里がいないことに気づく

▽大谷 泳ぐのを止めて 立ち上がる

「え？ 千里さん、どこ？」

▽大谷 周りを見る

▽千里 潜ったまま大谷の背後に近づき、大谷の腰を持ち 水面から出てくる

「大谷君、捕まえた」

「千里さん」

大谷

千里

千里

「びっくりした」

大谷

「心配したよ」

千里

「さあ ゴールまで行って行って」

▽大谷 千里に腰をもたれたまま プールの端に向かって歩き出す

▽千里 足を浮かせ、バタ足をする

千里

「がんばれ」

▽大谷 歩いている

(半分くらいを過ぎたとき)

▽千里 大谷の腰を掴んでいた手を 徐々に大谷の股間の方に動かしていく
いつの間にか、大谷の股間の上に両手を置いている

大谷

「千里さん・・・」

千里

「え、何」

大谷

「そこは、だめだよ」

千里

「何が」

▽千里 大谷の股間をモミモミする

大谷

「千里さん、ダメだって」

千里

「照れない 照れない ゴールまで早く早く」

▽大谷 取りあえず、プールの端に向かって歩く

▽千里 大谷の股間を揉み続けている

千里

「大谷君 なんか大きくなってるよ」

大谷

「千里さんが 触るからでしょ」

千里

「このままずっとしていたら、どうなるかな」

大谷

「だめですって」

Copyright © 2026 D's

千里

「何が起こるか知りたいの。それとも、ここじゃない どこかで 教えてくれる」

大谷

「だから・・・」

(ゴール手前)

▽千里 大谷の穿いている競泳パンツをずらす

大谷の陰茎が飛び出てくる

大谷

「あっ」

▽大谷 飛び出た陰茎を競泳パンツの中にしまう

▽千里 大谷が止まったあいだにプールの端に到着

千里

「やった。私の勝ちね」

大谷

「千里さん ずるいよ」

千里

「勝ちば勝ちよ」

Copyright © 2026 DS

千里

大谷

千里

大谷

千里

大谷

千里

大谷

千里

○（夜）ホテルを出た道

▽千里 大谷に腕を通し歩いている

「プール楽しかったね」

「そうだね」

「お腹すいたね。ごはん、どうしようっか」

「そうだね。近くで何か、食べようか」

「ね。大谷君家で食べない」

「え」

「コンビニで何か買って、大谷君ちに行くの」

「ダ、ダメだよ。僕の家なんか」

「家を見てみたいの。ダメ」

Copyright © 2026 D's

大谷

「いや、でも、ダメだって」

千里

「なんで、そんなにダメなの？」

大谷

「僕たち、まだ恋人でもないし、」

千里

「もし、私を一人で帰して、強姦にでも襲われたらどうする？」

年頃の妹を一人で帰すなんて、それこそ、姉貴に言い訳できないわよ」

大谷

「わかったよ。でも、絶対、なんにも無いからね」

千里

「わかってるって、それに、それって、普通、女が男に言うセリフよ」

千里

「じゃ、行こう行こう」

▽大谷 千里 歩き出した

○コンビニの中

▽千里 買い物もカゴを持ち、食べるものを入れている

千里

大谷

千里

○コンビニの生理用品コーナー

「ね。大谷君で、XLサイズでいいよね

▽千里 コンドームの箱を買い物カゴに入れる

「何買ったの」

「だって、必要じゃん。さあ、会計して、大谷君ちに行こう」

Copyright@2026 D³S

「X 接点」

(第八話)

みちたけ

Copyright©2026 D³S

サブタイトル「いつかの河原にて」

あらずじ

千里の関係を維持できなかった大谷

大谷は 古屋に自分の気持ちを正直伝えます

そして、古屋の答えは

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕 許しあった夜

○ (夜) 飛行場近くの土手

※この土手は、伊丹空港近辺にある、土手を想定しています

▽ 古屋 大谷は、堤防で座っている

頭上を飛行機が轟音とともに通り過ぎる

「すげえなあ、飛行機がこんなに近くに見えるなんて」

「今、飛んで行った飛行機、わかりますか？」

「え？ 飛行機は飛行機だろ」

「違いますよ。飛行機でも、いろんな種類があるんです」

「そんなの、わかるわけないよ」

「ボーイング787」

「お、そういうことか。それなら、ジャンボジェットは知ってるぞ」

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

大谷

「それは、ボーイング747っていうんです」

古屋

「お、聞いたことあるよ」

大谷

ジャンボジェットにも、長距離用のと、国内線用とがあつて、種類も沢山あるんです。残念ですけど、この空港では見れなくなりましたけど」
○再び、飛行機が頭上を横切った。

古屋

「迫力あるなあ。あ、おれ、今の知ってるぞ。ボーイング787だ」

大谷

「ブ・ブー エアバスA310です」

古屋

「なんだよ、さっきのと同じじゃないのか？」

大谷

「コックピットがスマートだったでしょ」

古屋

「そんな所見てないよ。だいたい、おまえ、飛行機に詳しいすぎるぞ」

大谷

「小さい頃、よく父に連れられてここに来てたんです。ずっとずっと、休みの日は一日中。父がおにぎりを作ってくれて、一日中ここで飛行機を見て、

父にいろいろ教えてもらいました」

「へえ、いい親父さんだな」

古屋

大谷

「今、思えば単にお金が無かったただけなんですよね。遊園地とかデパートに買い物なんか行かずに、ここ来れば、お金なんか使わずに済みましたから」

古屋

「そうだな、お金が無くたって、子供にいろいろ教えてあげれて、一日中楽しめさせてくれんなんで、すごい親父さんだよな」

大谷

「そうですね。僕も、そう思います」

○飛行機が頭上を飛び、辺りが轟音となる

▽大谷 大声で叫ぶ

大谷

「千里さんとは、ダメでした。

やっぱり、僕、女性とそういうことになるかと怖くて」

古屋

「そうか」

大谷

「古屋さん、僕のこと、なんとも思わないんですか？」

古屋

「どうして？」

大谷

「だって、こんな歳にもなって、まだ女性と経験なくて、それどころか、避けようとしているんですよ」

古屋

「別に。地球上には億って人がいるんだぜ。みんなが、同じ考えでだとうなるんだ。きっと つまらない世界だよな 一人一人違っているから楽しいんじゃないか。別に女性を好きにならないからって変か」

大谷

「じゃ、もし僕が古屋さんにキスしたら？」

古屋

「おまえが、したいっていうなら、すればいいんじゃないか？ それも お前の自由だ。でも、キスをした瞬間、俺が、殴るのも自由だ」

▽大谷 ゆっくりと古屋の顔に近づける

▽古屋 目を閉じる

古屋
大谷
古屋
大谷
古屋
大谷
古屋

▽大谷 目を閉じ古屋にキスをする

▽二人 しばらく静止している

▽大谷 目を開け古屋から顔を離す

▽古屋 目を開ける

「2回目だな」

「え」

「最初、出会った時、俺の部屋でしただろ」

「知ってたんですか」

「ああ」

「どうして、寝たふりしてたんですか」

「俺も、おまえとこうなることを望んでいたからかも」

Copyright © 2026 D's

古屋

亀山

古屋

大谷

古屋

○（その夜） 古屋の部屋

▽古屋 大谷 パンツ一枚で並んでベッドで寝転んでいる

大谷は古屋の腕枕にされ、腕は古屋の胸の上に置かれている

「どうした」

「しあわせだなんて」

「そっか」

▽古屋 腕枕している腕を曲げ 大谷の頭を自分の胸につける

○（翌朝） 会社の事務所 入口

▽古屋 大谷 一緒に入ってくる

「おはよお、お二人さん」

「おはよう」

Copyright © 2026 D's

大谷

「おはようございます。亀山さん」

亀山

「二人一緒ということは、まだ 古屋さんちに泊まってたんでしょ」

古屋

「ばれたか。夜の空港を見てたら、遅くなって そのまま」

亀山

「空港なんか行ったの」

古屋

「夜の空港って、すごくライトが綺麗で幻想的なんだぜ」

亀山

「そうなの。私も行ってみたいわ」

古屋

「じゃ、次回は是非」

亀山

「期待しないで待ってるわ」

○（一週間経過した夜）飛行場の見える土手

▽亀山 飛行場の滑走路のライトを見ている

亀山

「ほんと、すごく綺麗」

亀山

○飛行機が轟音を共に着陸してくる

「すごい 迫力」

▽古屋 亀山の方に手を添える

○(翌日の朝) 古屋のマンション

▽古屋 パンツ一枚で、ベッドに座っている

▽亀山 ベッドに寝ている

「なに? ニヤニヤして」

「いや、なんでもない」

「うそお。今、笑ってたよ」

「あ、あ、実は、昼の大谷のことを思い出してさ」

「もう、二人だけの時には、大谷、大谷って言うの止めてくれない?
あんまり言うと、ダンスの中にも隠れているんじゃないかって、

思っちゃわよ」

古屋

「ごめん、ごめん。気をつけるよ。
しかし、ダンスの中かあ。あいつなら隠れてても
おかしくないな」

亀山

「ほら、また、出た」

まだ、古屋から”付き合う”という言葉を、聞いたことがなかった亀山は、
ときたま不安になる。

(亀山)

(古屋さんは、私のこと、どう思ってるのかしら？
ただの遊び？ ストレス解消？
そんなはずないわ。古屋さんですもの
遊びで、抱いたりはしないはず。
でも、でも、時々、どこを見ているかわからない時がある)

▽亀山 リモコンを使ってテレビを点ける

クリスマスケーキの予約をCMが映る

亀山

「もうすぐクリスマスなんだわ」

古屋

「そっか、クリスマスか？イブの日は、ちょっと豪華に食事でも行かないかい？」

亀山

「え？」

古屋

「ごめんごめん。亀山さんなら、すでに先約があるよね」

亀山

「そんなの有るわけ無いじゃない。喜んで行くわ」

古屋

「超豪華ってわけには、いかないけどね」

亀山

「ええ、人間が食べれるものなら大丈夫」

Copyright@2020 D'S

□第二幕　　く寒い季節がやってきたく

○（夜）新幹線の中　古屋　大谷が座っている席

夜遅く、車両は　古屋、大谷の他は　離れたところにまばらである
大谷と古屋は、新しいプロジェクトの打ち合わせで出張し、
その帰りの新幹線の中の出来事

▽大谷　窓際の席に座り　流れる街の明かりを見ている

▽古屋　スマートフォンをいじっている

大谷　「古屋さんと出張なんて、はじめてですね」

古屋　「そうだな」

大谷　「今度は、泊まりで行きたいな」

古屋　「仕事とプライベートを混同しちゃだめだぞ」

大谷　「はい」

大谷

▽大谷 立ち上がり車両の中を見る
大谷 古屋 以外 誰も乗っていない
「僕たち以外、誰も座ってませんよ」

古屋

「ああ、時間も時間だからな。ちよつと眠いわ。着く前に起こしてくれ」

大谷

「はあい。おやすみなさい」

▽古屋 リクライニングを倒し腕を組み目をつぶる

▽大谷 しばらく、窓側に座っている古屋の顔を見ていた

(数分経過)

大谷

「退屈だな」

▽大谷 古屋を見る

古屋 リクライニングを倒し、足を開いた状態なので、
股間部分がよくわかる

▽大谷 座席の肘掛けを上げる

大谷

▽大谷 体を倒し、古屋の膝に頭を乗せる

▽大谷 頬を古屋の股間あたりにつける

「なんか、幸せ」

▽大谷 体を起こす

「ちょっとだけ」

▽大谷 立ち上がり、誰もいないことを確認

▽大谷 古屋のズボンの上から、股間を揉む

「ふふふ。まだ、柔らかい。でも、いつまでもつかない」

▽大谷 古屋の股間を揉み続ける

「うっ」

▽古屋 腰が浮く

古屋

大谷

大谷

大谷

Copyright © 2026 DS

大谷

「古屋さん、かわいい」

古屋

「いら」

大谷

「起きちゃった 残念」

古屋

「そんなに気持ちいいことしたかったのか？」

○（その日の夜） 古屋の部屋

▽古屋 上半身裸でベットに寝転びテレビを見ている

▽大谷 シャワールームから腰にタオルを巻いて出てくる

「あゝさっぱりした」

▽大谷 古屋のいるベッドに入る

「ねね、今日は何してたの？」

大谷

大谷

古屋

「何って、いつもの洗濯とか掃除とか」

大谷

「ふ〜ん」

大谷

「ねえ、クリスマスは何するの？」

古屋

「何するって？ 普通に仕事だけど」

大谷

「クリスマスイブだね。でもクリスマスは土曜日だよ」

古屋

「そっか、クリスマスは土曜日か」

大谷

「ね、僕ケーキ食べたいな」

古屋

「よし、じゃ、クリスマスは、特別大きなクリスマスケーキを二人で食べよう」

大谷

「やった」

○（翌日）会社の事務所

古屋

「おはよう」

大谷

「おはようございます。亀山さん」

亀山

「あら？ お二人さん、相変わらず同伴出勤ね」

古屋

「昨日の出張、帰りが遅くなったから、俺の家にそのまま泊めてやったのさ」

亀山

「九州ね。遅くまで、ごくろうさまでした」

古屋

「これ、おみやげ」

亀山

「ありがとう。今度、私も何か買ってくるわね」

古屋

「いいよ、気を使わなくても」

▽大谷 古屋と亀山の会話を聞いている

(大谷)

(二人、仲がいいな。)

古屋さんは、僕のことが一番だって言ってくれてるし

(大谷)

○ (退社時刻を過ぎた) 会社

▽大谷 帰り支度をしている

(今日は、古屋さんと一緒に帰れるか)

○古屋の席

▽古屋 スマートフォンをいじっている

▽亀山 古屋の席にくる

「お待たせ」

「遅いよ。今日の晩飯は、おごりだぜ」

「いいわよ。付き合ってくれるんですもの」

▽古屋 亀山 大谷の席にそばを通る

「大谷、おさき」

古屋

亀山

古屋

亀山

亀山

「大谷君、お疲れ様」

大谷

「お疲れさまでした」

○（その日の夜）大谷の部屋

▽大谷 古屋にLINEをする

“今日、亀山さんと、どこ行ったの”

「亀山さんと買い物」

大谷

「何の買い物」

古屋

「お父さんの、クリスマスプレゼントをかうから、選ぶのを手伝ってって」

大谷

「ほんとうに？」

古屋

「本当」

大谷

「わかった」

Copyright@2026 D's

大谷
古屋

「あさっては、クリスマスだよ。約束覚えてる？」
「覚えてるよ。」

Copyright@2026 D'S

「X接点」
(第九話)

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル「クリスマスの夜」

あらすじ

クリスマスイブの日、大谷は古屋が、亀山とも付き合っていることを知って飛び出してしまいます。

行く充てもなく歩く大谷に声をかけたのは、かつての上司 野上
そして、野上の店で働いている小村

その小村から古屋に関して衝撃の事実をきかされます。

登場人物（本話のみ）

Copyright@2014 D's

□ 第一幕 クリスマスの夜

今日はクリスマスイブ

それでも、今日の大谷はウキウキ気分仕事に励んでいた。

明日のクリスマスは、古屋と一日中、過ごす約束をしているからだ。

思えば、大谷がクリスマスをこんなに楽しみにしているなんて、

父が生きていた頃までだろう。

(#フラッシュバック#)

← # 回想 # ← 少年時代の大谷 クリスマスイブ

○ 昔の大谷の住んでいるアパートの一室

▽ 大谷少年 父が帰ってくるのをこたつの中で待っている

○ ドアの開く音

▽ 大谷の父 部屋に入ってくる

「ただいま」

大谷 父

大谷少年

「おかえり。寒かった？」

大谷父

「ああ、外は寒いよ」

大谷少年

「晩御飯できてるよ」

大谷父

「博紀 ほら」

▽大谷父 ケーキの箱を大谷少年に見せる

大谷少年

「やった、ケーキだ」

大谷父

「まずは、博紀の作ったご飯を食べてからな」

▽二人 食事をする

○食事が終わり、コタツの上に、ケーキが載っている

大谷少年

「メリークリスマス」

大谷父

「メリークリスマス」

Copyright © 2026 D³S

大谷 父

「はい、プレゼント」

▽大谷 父 靴から、包み紙を取り出し大谷に渡す

大谷

「ありがとう、開けていい？」

大谷 父

「もちろん いいよ」

▽大谷 包み紙を開ける

箱の中から、スニーカーが出てくる

大谷 父

「ごめんな博紀、こんなもので。

本当は、ゲーム機が欲しかったんだろうけど・・・」

大谷

「わ！ うれしいな。カッコイイよ。この靴」

大谷 父

「ごめん、博紀、こんなのプレゼントじゃないよな」

大谷

「え？ すごくうれしいよ。新しい靴、欲しかったもん」

大谷 父

「ありがとう。来年は、もっといい物、買えるように、父さん仕事、がんばるよ」

大谷

「それより、早くケーキ食べようよ」

決して、裕福なクリスマスでは無かったが、いつも、あたたかい心づかいに包まれていた。

そして、父と離れ施設へ

そこでのクリスマスは、クリスマスではなかった。単なる行事の一つにすぎなかった。

→# 現在に戻る #→

○（クリスマスイブの夜）会社

▽大谷 自席で帰る準備をしている

「お疲れ」

「おつかれさま」

「え？ あ、お疲れ様でした」

大谷

亀山

古屋

Copyright@2026 D's

(大谷)

▽古屋 亀山 事務所から出て行く

(古屋さん、クリスマスイブだから、亀山さんと食事でも行くのかな
ま、食事だけだろうから いいや。明日は、僕の番だもんね)

□亀山編

○(クリスマスイブの夜) レストラン

▽古屋 亀山 レストランで食事をしている

「こんな所に入って大丈夫？」

「大丈夫、その分プレゼント代から引いてるから」

「もう、古屋さんったら」

「ウソウソ、ちょっとばかりボーナスも上がったし」

「夜景が綺麗ね」

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

「そうだね。最高のクリスマスイブだね」

亀山

「そういえば、最近、大谷君とはどうなの？千里と別れた時は、かなり落ち込んでたみたいだけど、最近は とっても元気がいいように見えるわ」

古屋

「そうだな。割とタフなやつだよな」

亀山

「千里も悪かったって反省してて、もう一回 やり直そうかなって言ってるの」

古屋

「そうなんだ。大谷にさりげなく聞いてみるよ」

亀山

「ありがとう」

▽ウェイター ワゴンにデザートを乗せて運んでくる

ウェイター

「デザートをお持ちしました」

▽ウェイター テーブルのケーキの載った皿を置く

古屋

「ちょっとまって」

古屋

▽古屋 膝にかけていたナフキンを皿にかける

「ワン・ツー・スリー・メリークリスマス！」

▽古屋 ナフキンを除ける

皿に、もう一つ小さな箱が乗っている

「これは？」

古屋

「クリスマスプレゼント」

亀山

「うれしい、ありがとう、開けてもいい？」

古屋

「どうぞ」

▽亀山 リボンを取り小さな箱を開ける

中からネックレスが出てきた。

古屋

「ピアスは嫌いって言ってたから」

亀山

「親に産んでもらった体に穴を開けるなんて、できないもの」

古屋

▽亀山 腕を後ろに回し、ネックレスを付けようとする

「ちょっと待って」

▽古屋は席を立ち、亀山の席の後ろに達、ネックレスを付ける

亀山

「ありがとう」

▽亀山 ウィンドガラスに映る自分の姿を見る

古屋

「よかった。すごく似合ってる」

▽古屋 亀山の耳元でささやき 自分の席にもどった

○夜のビル街

▽古屋 亀山 歩いている

亀山

「今日は、ありがとう。とつても おいしかった」

古屋

「我ながらいい店をチョイスできてよかったよ」

古屋

「駅まで送るよ」

亀山

▽亀山 何かを決心するように首をふる

「ねえ、古屋さん 今日、クリスマスイブよ、このままレディを帰らせるのは失礼じゃない？」

古屋

「そうだよな。せつかくの日をこのまま終わらせるのは勿体ないよな」

亀山

「ごめんなさい。無理だったらいいの」

古屋

「いや、俺も 亀山さんとは もっと一緒にいたいと思ってたんだ」

亀山

「ほんと。ウソでもうれしいわ」

古屋

「本当さ。かといって、どこに行くかな」

▽亀山 恥ずかしそうにうつむく

亀山

「古屋さんの家なんてどうかしら」

古屋

「オレの家？」

亀山

「あ、いいの。ゴメンさない。カフェか、カラオケで」

古屋

「いや、俺の家に行こう」

○古屋のマンション

▽古屋 ドアを開ける

古屋

「さあ、どうぞ」

亀山

「真っ暗なところに、どうぞはないわよ」

古屋

「ごめん、ごめん」

▽古屋 玄関の明かりを点ける

▽亀山 靴を脱ぎ、廊下をすすみ、奥の部屋に行く

▽古屋 亀山の後ろをついていく

○古屋の家のリビング

リビングは明かりを点けておらず、玄関の明かりが少し漏れて届いている

「部屋の明かりはどこ」

▽亀山 部屋の明かりのスイッチを探そうとする

▽古屋 亀山に後ろから抱きつく

▽古屋 亀山の肩を持ち、振り向かせる

▽古屋 亀山にキスをする

○翌朝 古屋のリビング ベッド

▽古屋 亀山が並んで寝ている

○（翌朝） 古屋の部屋

▽古屋 亀山 ベッドで寝ている

▽亀山 目覚めて体を起こす

Copyright@2020 DS

横に寝ている古屋に抱きつく

▽古屋 抱きしめる

(数時間経過)

▽亀山 突然起き上がる

「いけない。こんな時間」

▽古屋 起き上がる

「もう、こんな時間か」

「そろそろ おいとましくちや」

「シャワー浴びておいでよ。朝飯の支度しておくから」

「ありがとう。そうするわ」

▽亀山 シャワーを浴びに行く

亀山

古屋

亀山

古屋

亀山

古屋

>

▽古屋 立ち上がり窓に向かい、カーテンを開ける

「今日も良い天気だ」

□大谷編

○大谷の部屋

▽大谷 クリスマスイブの朝、古屋と過ごす事を楽しみに準備をしている

「今日は、古屋さんとのクリスマス。がんばって準備しないと」

「何着て行こうかな」

▽大谷 自分の部屋でテレビを見ている

大谷

大谷

大谷

▽大谷 時計を見る

「古屋さん、そろそろ起きたかな。せつかくの休みだから昼まで寝てるのかな
そうだ、古屋さんに昼ごはんを作ってあげなきゃ」

▽大谷 出かける準備を始める

○（午前）歩道

▽大谷 歩いて、スーパーの中に入る

（数分後）

▽大谷 スーパーから買い物袋を下げて出てくる

▽大谷 買い物袋を開けて中を見る

「えっと、サンドイッチ用のパンと、タマゴとハム、それと ロウソク
ロウソクの明かりって、ロマンチックだね
僕、ちょっとエッチなこと考えてる」

▽大谷 笑顔で道を歩いている

大谷

○古屋のマンション

▽大谷 古屋のマンションの家のドア

呼び鈴を押そつとしてくる

大谷

「まだ、寝てるかな」

▽大谷 ドアのノブを回してみる

大谷

「あれ？ 玄関が空いている？ どうしてだろう？」

▽大谷 ドアを開け家に入る

大谷

「おじやまいます」

▽大谷 廊下をすすむ

▽大谷 浴室からシャワーの音が聞こえる

大谷

「シャワー浴びてるのかな。覗いちゃおうかな」

古屋

大谷

古屋

大谷

古屋

亀山

○古屋の家 奥のリビング

古屋が腰にタオルを巻いた状態でソファに座っている

▽大谷 リビングに入ると、ソファに座っている古屋を見て驚く

▽古屋 廊下から入ってくる古屋に目がいく

「大谷」

「古屋さん。シャワーを浴びていたんじゃない」

「どうして、こんなに早く」

「お昼ご飯を作ってあげようと思って」

「そっか」

▽亀山 バスタオルを巻いて、リビングに入ってくる

「ああ、いいシャワーだったわ」

▽亀山 大谷の顔を見ておどろく

亀山

▽大谷 亀山のバスタオル姿を見ておどろく

「大谷君、どうして」

古屋

「早く来すぎたんだって」

▽大谷 古屋のタオルだけの姿をもう一度みる

▽大谷 手に持っていた、スーパーの買い物袋を床に落とす

大谷

「ごめん、僕、だいぶん、早く来すぎちゃったね」

古屋

「大谷、勘違いするな」

亀山

「大谷君」

▽大谷 リビングから玄関に向かう

古屋

「待て、大谷」

(扉の閉まる音)

(大谷)

○街中

▽大谷 無我夢中で歩いている

(古屋さんのバカ
やっぱり、女性の方が好きなんじゃないか)

○古屋の家のリビング

▽古屋 服を着ている

▽亀山 服を着ている

「ごめん 帰ってくれる」

「大丈夫」

「ああ、探してくる」

「わかったわ。何かあったら、連絡ちょうだいね」

亀山

古屋

亀山

古屋

Copyright@2026 D³S

第二幕 野崎再び 小村との再会

○繁華街の夜

▽大谷 歩いている

「おい」

「おい！ ったら」

「待てよ。大谷」

▽大谷 自分を呼ぶ声に気付き振り返る
振り返ると野崎の顔

野崎の服装は、黒のブレザー、下には黒のチヨッキ

▽大谷 何があったかわらない

「ひさしぶりだな」

▽大谷 黙っている

野崎

野崎

野崎

野崎

Copyright © 2026 D³S

野崎

「おい、まだ、俺を恨んでいるのか？」

▽大谷 やっと理解できる

大谷

「いえ、そんな訳では・・・それでは」

▽大谷 その場から離れようとする

▽野崎 大谷の腕を掴む

野崎

「おいおい、せっかく、久々にあったんだ、邪険にすんなよ」

大谷

「別に邪険になんかしてません」

野崎

「少し話をしようぜ」

大谷

「僕には話すことないですから」

野崎

「冷たいな。みんな元気にしてるか？亀山や、林は相変わらずうるさいか」

大谷

「みなさん、僕に親切にしてくれています」

野崎

「そっか。あいつらも女らしくなってきたか。

俺は見えての通り、会社辞めて今ではバーの雇われマスターよ」

大谷

「そうなんですね」

野崎

「おい、今 暇か？」

大谷

「暇って訳ではないですけど」

野崎

「俺の店、すぐそこなんだ。ちよっと寄っていけよ」

大谷

「いいです」

野崎

「なんだよ、ちよっとだけでいいからさ
それに、おもしろい話、聞けると思うぞ」

大谷

「おもしろい話って何ですか？」

野崎

「あいつだよ、
えっと、俺とおまえでサウナ行ったとき居た、あいつ」

大谷

「古屋さんですか？」

野崎

「そう、古屋だ」

そいつの元彼女ってか、男なんだけど、今、俺の店でバイトしてんの俺、驚いたよ。あいつも、こっちの世界の人間だったんだよな」

大谷

「そんなはずは」

野崎

「じゃ、自分の耳で聞いてみな
まあ、取りあえず、寄ってけって」

▽大谷 野崎の後を着いていく

○野崎の店

雑居ビルの一階にある

▽野崎 店のドアを開ける

「すみません、まだ、準備中なんです」

▽小村 マスターの顔を見る

小村

「なんだ、マスターじゃないですか。表から入ってくるから
てつきり客が来たかと思いましたよ」

野崎

「ああ、客を連れてきたぞ」

▽大谷 野崎の後ろから出てくる

大谷

「こんにちは」

小村

「いらっしやい」

▽大谷 小村の顔を見る

▽小村 大谷の顔を見り

▽二人 固まる

大谷

「え？」

小村

「え？」

Copyright@2026 D'S

小村

「博紀（ひろき）じゃないか？」

大谷

「小村さん」

小村

「博紀、久しぶりだな。元気してたか？」

大谷

「はい。小村さんこそ」

小村

「ああ、俺は元気だよ」

野崎

「おいおい 二人は知り合いか？ こりや驚いた」

小村

「大谷は、高校の時の後輩なんですよ」

野崎

「同郷ってやつか」

小村

「そうです」

野崎

「なんだ、なんだ、立ち話は止めて、さあ、座れ座れ」

▽大谷 カウンターの椅子に座る

小村

▽小村 カウンターの中から話しかける
「ひさしぶりだな。俺が高校卒業して以来だよな」

大谷

「はい。」

小村

「今は、社会人か」

大谷

「そうです。今は社会人です」

小村

「そっか。立派になったな。」

俺は、就職したけど、そこでパワハラにあってさ逃げ出してしまって、
ここでバイト中」

野崎

「おいおい、ここだって、立派な仕事じゃないか」

▽野崎 カウンターの中に入る

小村

「そうですよね。マスター。俺だって、いつかは店持ちたいし」

野崎

「そうそう、夢はでっかくな」

野崎

「なんか飲むか」

大谷

「いえ、大丈夫です」

野崎

「遠慮するなって。酒がいいか」

大谷

「じゃ、一杯だけ」

▽野崎 カウンターの後ろ側で、グラスにウイスキーを注ぎ、水割りを作る

野崎

「しかし、おまえらが知り合いとは、世間は狭いな」

▽野崎 大谷に水割りの入ったグラスを出す

小村

「そういえば、マスターと博紀はどこで？」

野崎

「前勤めていた会社の上司と部下の関係さ」

小村

「え？ マスター、マジで、サラリーマンだったんですか？」

野崎

「何言ってるんだ。最初から、こんな仕事してるわけないっての」

小村

「ほら、マスターだって、こんな仕事って」

野崎

「ワリイワリイ、取りあえず、乾杯だ」

▽野崎 小村にウーロン茶の入ったグラスを渡す

野崎

「俺たちは、これから仕事だから、雰囲気だけな」

野崎

「乾杯」

▽三人は、グラスを交わした

大谷

「ところで、野崎課長は、どうしてここで働いているんですか？」

野崎

「ああ、俺か、異動した部署で、ちよつかい出した奴が、会社の偉いさんの隠し子だよ。そいつにチクられて速攻クビよ。」

「それで、ここで雇われマスターとして働いてるってわけよ」

小村

「マスターの男色は、抑えが利かないからなあ」

野崎

「おい！ 男色は余計だつっの。そういう、お前だって、」

□ 第三幕 小村の過去

(#フラッシュバック#)

← # 回想 # ← 小村 就職したての頃

○ 雨の降る 夜のビジネス街

▽ 小村 傘をささずに、濡れたスーツ姿でぼーっと歩いている

○ (数時間前) 小村が働いている会社 事務所

小村の上司

小村

(小村)

「デモ、課長が」

「お前のような役立たずは辞めてしまえ」

(もういやだ、あんな会社)

○ 雨の降る 夜のビジネス街

▽ 小村の反対側から 大学生4人が横に並んで向かってくる

大学生 A

▽小村 避けるが避けきれず、端の大学生と肩がぶつかる
「痛てえなあ!」

大学生 A

▽小村 気がつかずそのまま歩いていく
「おい! 待てよ! 待てったら!」

▽大学生 A が、小村の肩を掴む

小村

「あ、ごめん」

大学生 B

「ごめで済んだら警察はいらないんだよ」

小村

「ほんとうに ごめん」

大学生 C

「こいつ 弱っちな」

大学生 D

▽道行く人 チラ見をするが通りすぎていく
「おいおい、どうした」

小村

▽小村 大学生A、大学生Bから暴行を受ける

「すみません」

▽小村 頭をかかえたまま しゃがんでいる

▽大学生 小村を足でけている

▽大学生A 小村を掴み 立たせる

大学生D

「おい、兄ちゃんよ、許してやるから、金出しなよ」

▽大学生A 小村に拳を振り上げる

▽大学生Aの腕に傘の柄がひっかかる

大学生A

「なんだこりゃ」

▽大学生A 傘の先の方を見る

古屋が傘の先もっている

古屋

「いい加減に その辺にしとけよ」

Copyright©2026 D'S

大学生 B

「うるせえんだよ」

▽大学生 B 古屋に殴りかかる

▽古屋 傘で大学生 B の背中を叩く

大学生 B

「いてえな。もう手加減しねえぞ」

大学生 A

「ああ。後悔するなよ」

▽大学生 A 大学生 B が同時に 古屋に殴りかかる

▽古屋 簡単に傘で 大学生二人をたたきのめす

大学生 A

「覚えてろよ」

古屋

「ああ、覚えておいてやるから、俺のことも覚えとけ
高石（たかいし）の古屋って」

▽大学生 走って逃げていく

Copyright © 2026 D's

古屋

「大丈夫か？」

小村

「はい。ありがとうございます」

▽古屋 小村の顔を見る

古屋

「おや、君は あの時の」

小村

「どうかしました」

古屋

「覚えてないならいいよ。立てるか？」

小村

「はい」

▽小村 立とうとしたが、うまく立つことができない。

古屋

「大丈夫か？」

▽古屋 小村のおでこに手を当てる

古屋

「熱があるじゆないか！

取りあえず、俺の家が近くだから行こつ」

Copyright©2026 D³S

○（その夜）古屋の住んでいるマンションの部屋

▽小村 目が覚める

「気分はどうだい？」

「大分、よくなりました」

▽小村 体を起こそうとするが、全裸状態で布団を掛けているだけということに気づき、もう一度ふとんに潜る

「スーツ びしょ濡れだったから、脱がして乾かせてもらってるよ」

「すみません」

古屋 「まだ、熱があるようだから、薬を飲んで、もう少し寝ておけばいい」

▽古屋 小村に白い粉の入った薬と、水の入ったコップを渡す

▽小村 薬を飲む

小村

「助けてくれて、ありがとうございます」

古屋

「あんなところで、びっくりしたよ。傘も差さずにどうしたってんだい？」

小村

「ちょっと会社で、いろいろありまして」

古屋

「言いたくなければいいぞ」

小村の上司

「俺のせいって言うのか」

小村

「いえ、そうではなく」

小村の上司

「じゃ、どう責任とる」

小村

「責任といわれても」

小村の上司

「そうだよな。新人のお前に責任は取れないよな。なら、俺が取ってるその代わりにだな」

▽小村の上司　小村の肩に片手を乗せ、もう片方の手で小村の股間をまさぐりだす

小村

「何をするんですか」

小村上司

「俺が責任を取るんだぞ。これくらいの見返りはないとな」

▽小村 前屈みになり 小村上司にお尻を犯される

古屋

「そっか それは辛かったな」

小村

「僕が、仕事で失敗したせいです」

古屋

「自分を責めてはいけないよ」

小村

「しかし」

古屋

「俺、その上司の気持ちもわかるな」

小村

「どうして」

古屋

「それは、君を犯したくらい、素敵だからさ」

小村

「どういうことですか」

古屋

「体は大丈夫か」

Copyright@2026 DS

小村

「は」

▽小村 体が動きにくいことに気づく

古屋

「薬が効いてきたようだ」

小村

「何をするんですか」

古屋

「俺にも、その上司のようなことをしてくれるか」

小村

「や、やめてください」

▽古屋 小村の布団を大きくまくりあげる

(数時間後)

▽古屋 小村 ベットで二人で寝ている

「嫌な上司のことは忘れたか」

小村

「はい」

▽小村 恥ずかしそうに古屋に抱きつく

(#フラッシュバック#)

→# 現在に戻る #→

「俺も、まさかね。あいつがって」

「え？ 古屋さんが、そんなのウソだ」

「博紀、お前も古屋さんと？」

「いや、何にもない。何にも」

▽大谷 曖昧に返事

「そうか、ならいいけど、もし古屋さんに、誘われても断るんだぞ」

「どうしてですか」

「あの人の魅力に取り付けられると、逃げられなくなる。」

野崎

大谷

小村

大谷

小村

大谷

小村

野崎

「この世界から抜けられなくなる」

「ケンが、こっちの世界に踏み入れたのも、古屋がきっかけだもんな。最近、古屋に婚約者ができたって噂もあるのに、いまだに古屋に一途だもんな。決して実らない恋いなのによ」

(大谷)

(古屋さん・・・信じられない・・・でも、小村さんがウソをつくとも思えないじゃ、僕は、遊ばれていたの？婚約者って、亀山さん。)

▽大谷 自分の体の異変に気づく

大谷

「あれ、手が」

大谷

「あれ、あれ」

▽大谷 椅子に座ってられない状態になる

野崎

「そろそろ、効いてきたかな？」

Copyright@2026 D's

大谷

▽野崎 ジャケットのポケットから白い薬を取り出し
大谷の目の前にチラつかせる

「か、か、かちよう」

▽大谷 カウンターを掴みながら床に倒れる

野崎

「おい、ケン、中に運べ」

▽野崎 小村 カウンターの中から出てくる

▽野崎 大谷の両腕を掴む

▽大谷 野崎のシャツの隙間から腕に斑点があることを見る

野崎

「見えちまったか。若い男とやりまくった罰があったてよ。
とうとう発症してしまったんだよ。もう手遅れで、後 半年ということだ
最後に、たっぷりお前に仕込んでやるよ」

野崎

「おい健、足を掴んで、テーブルの上に乗せるぞ」

▽小村 大谷の両足を掴む

▽小村 野崎 大谷を 持ち上げ 運び出す

「大谷 大丈夫か」

「僕、死なないですよね」

「心配ない。一時的に神経を麻痺させるだけの薬だから」

「そじゃそうさ、死んだら面白くないだろ」

▽大谷 店のテーブルの上に寝かせられる

「さあて、ショータイムの始まりだ」

「何をするんですか」

「まずは、服を脱ぎましょうか」

▽野崎 大谷のズボンのベルトを外し、ジッパーを下ろす

野崎

大谷

野崎

野崎

小村

大谷

小村

野崎

大谷

野崎

大谷

小村

野崎

野崎

▽野崎 大谷の股間を撫でる

「ムヒョー やっと俺の夢がかなうぜ」

「お願いします。止めてください」

「楽しみはとっておいて、まずは上から脱がせよう」

▽野崎 大谷のシャツのボタンを上から一つ一つ外す

「お願いします。小村さん 助けて」

「マスター止めてあげましょうよ」

「うるさい。口出しをするな」

▽野崎 大谷のシャツを広げる
中のTシャツが見える

▽野崎 Tシャツを捲り上げる

「綺麗なオッパイしてやがる」

Copyright@2026 D's

▽野崎 大谷の乳首を口で吸う

「いや、やめて、やめて」

「ズボンを脱ぎましょうね」

▽野崎 大谷のズボンを下に引っっぱり脱がす

「や、め、て」

「はい、はい、止めないよ」

▽野崎 大谷のボクサーブリーフの上から、舌で舐め回す。

「マスター もう、止めてください」

「うるさい！ そしたら、お前が、代わりになるか？」

▽小村 うつむいてしまっ

▽野崎 大谷のボクサーブリーフを膝までずらす

野崎

小村

野崎

大谷

野崎

大谷

野崎

「うひょゝ これ、これ この時を待ってたんだよ」

▽野崎 大谷の陰茎をなんども舌で舐め回す

野崎

「ち！ ぜんぜん、大きくならん。ここまで無能にするとはあの薬の欠点だ
大丈夫、こんな時の為に、これがあるからな」

▽野崎 カウンターの中に入り、引き出しから小さなケースをもってくる

▽野崎 ケースを開けると、中から注射器とアンプルのような物が入っている

小村

「マスターそれは」

「これか？ これをモノに注射すると、あら不思議、どんな時だって直ぐにでデカクなるのさ」

小村

「そんなもの使ったら・・・」

野崎

「心配すんなって、俺だって、人殺しで捕まる気はないからな。しかも、アソコを大きくするだけじゃないぞ。」

感覚だって何倍も増強してくれる。すばらしい薬だ。こいつ きっと喜ぶにちがいないぜ。しかし、快感を味わったあと体力の消耗はすごいけどな」

大谷 「お願いします。本当に、止めてください。なんでもしますから」

野崎 「嫌だね」

▽野崎 注射針を大谷の陰茎に刺し、薬を注入し、針を刺した箇所を指先でゆっくりと揉む

野崎 「ほおら、薬が効き出すぞ」

野崎 「効いてる効いてる」

▽野崎 大きくなった大谷の陰茎を握り、扱きだす

大谷 「あ、あ、ああ〜」

野崎 「やっぱり、舶来物はよくきくな」

大谷 「あう、あ、も、もう やめて」

野崎

▽野崎 大谷の顔を見る

「いいね その顔。感じてるんだろ。素直になれよ」

野崎

▽大谷 ガラステーブルの上に服を脱がされた状態で大の字に寝かされている

▽野崎 下半身 裸になり 大谷の足の間に座っている

「そろそろ、入れさせてもらおうぞ」

「や、やめてください」

大谷

▽野崎 大谷の校門にゆっくりと自分の陰茎を入れていく

「あ、あつ」

大谷

▽野崎 腰を振り出す

大谷の体も揺れる

「おお、最高だぜ。お前も いっしょにいっつぜ」

野崎

大谷

野崎

▽野崎 大谷の陰茎を握り抜く

「あ、あ、あ、あつ あつ」

「いく、いく、いくう」

▽野崎 大谷 腰が浮く

▽野崎 大谷の肛門から自分の陰茎を取り出す

大谷の肛門から野崎の出した精液が流れ出る

野崎

「すっきりした。発症しても俺を恨むなよ
薬の効き目が弱ってきたようだ

俺は、開店の準備するから こいつが逃げないように見張っておいてくれ。
もし逃がしたら、お前が、今夜のクリスマスパーティーの出し物になって
もらうからな。

それから、薬をもう一回飲ませておけ」

▽野崎 ジャケットから白い薬をテーブルの上においた

▽野崎 店から出て行く

○野崎のバーの中

▽大谷 小村 だけがいる

▽小村 テーブルの上の白い薬を手を持つ

「小村さん 助けて」

▽小村 大谷の顔を見る

▽大谷 目に涙が溢れている

「まずは、体を綺麗に拭いておこうか」

▽小村 カウンターから おしぼりを数本 取ってくる

「お願いします。助けてください」

▽小村 精液で汚れた大谷の体を おしぼりで拭き始める

▽小村 大谷の胸を拭きながら大谷に顔を近づける

大谷

小村

大谷

小村

「まだ、マスターが俺が逃がさないか、見ている。もう少し我慢して」

▽野崎 ドアの隙間から小村の様子をうかがっている

▽小村 大谷の頭を少し持ち上げる

小村

「飲んだ振りをして」

▽小村 大谷の口元に封を開けてない白い薬を飲ませるふり

▽小村 薬をジャケットのポケットにしまう

▽小村 水の入ったコップを大谷の口につける

▽大谷 水を飲む

▽小村 大谷の頭をそっとテーブルにおく

▽野崎 ドアを閉める

▽小村 野崎がドアを閉めたのを確認する

大谷

小村

小村

大谷

小村

小村

大谷

小村

▽小村 大谷をロープをほどき出す

「小村さん」

「シッ」

▽大谷 テーブルから置きあがる

「早く 逃げろ」

「でも、小村さん」

「俺の事は心配するな。早く 服を着ろ」

▽大谷 ジーンズを穿き、シャツのボタンを留める

「早く」

「でもコートが・・・」

「これを着ていけ」

Copyright@2026 D'S

小村

▽小村 自分が着ているジャケットを脱ぎ、大谷に渡す

「早く」

▽大谷 バーから出て行く

▽小村 スマートフォンを取り出し電話をかける

小村

「もしもし・・・」

小村

「はやく 助けにきてあげてください」

Copyright@2026 DS

「X
接点」
(第十話)

みちたけ

Copyright@2026 D³S

サブタイトル 「最終章」

あらすじ

野崎の元から無事 脱出できた大谷は、古屋の元に

大谷は、古屋に真相を聞き 決断します

登場人物（本話のみ）

Copyright@2026 D³S

□ 第一幕

○ 繁華街 夜

▽ 大谷 体力が消耗し ふうふうを歩いている

▽ 大谷 倒れかける

▽ 古屋 倒かけた大谷をつかまえ抱き起こす

「探したぞ」

「大谷、しっかりしろ、大丈夫か？」

▽ 大谷 顔をあげ、古屋の顔をみる

「ふ・る・や・さ・ん」

▽ 大谷 気を失う

○ 古屋の部屋

大谷

古屋

古屋

Copyright@2026 D³S

▽大谷 ベッドで寝ている

▽大谷 目を覚ます

▽古屋 大谷が目覚めたのに気づく

「目覚めたか。病院に連れて行くことも思ったけど、まずは、寝てからと思って」

▽大谷 上半身を起こす

「まだ、寝ているよ」

「いえ、もう、大丈夫です」

「よかった。心配したぞ。けど どうして、あんなところに」

▽大谷 黙っている

「話したくなければ、いいんだ。もう少ししたら、病院は行ってみるか？」

古屋

古屋

大谷

古屋

古屋

大谷

「大丈夫です。少し寝たら良くなりました」

古屋

「そっか。今日は、ここに泊まっていけばいい」

大谷

「はい。ありがとうございます。もう少し横にならせてもらいます」

古屋

「ああ、そうしろ」

○野崎のバー

▽野崎 小村を殴る

▽小村 倒れる

野崎

「バカヤロー、よくも逃がしたな！」

▽野崎 小村の胸ぐらを掴み 小村を起こす

野崎

「呼び出せ」

小村

「もう、許してあげてください」

Copyright@2026 D'S

「バカなことをいうな。あいつのせいで、俺は、こんな店で一生を終わろうとしてんだぞ。そう簡単に許せるか！
この償いは、わかっているよな。お前が、代わりになるんだぞ」

Copyright@2026

□第二幕 思い出の場所

○深夜0時 古屋の部屋 ベッドで大谷が寝ている

▽大谷 目覚めて、上半身を起こす

「よく寝てたな」

「はい、すっかり元気になりました」

「そっか。もっと寝ていていいんだぞ」

「いえ、せっかくのクリスマスイブどこかドライブでも行きませんか」

「そっか、無理するなよ」

「古屋さんとの初めてのクリスマス 大事な夜なんです」

「そっか、わかった 準備しよう」

▽大谷 ベッドから置き、服を着出す

古屋
大谷
古屋
大谷
古屋
大谷
古屋

古屋

▽大谷 今朝 持って来たスーパーの袋を見つける
○飛行場近くの土手

▽古屋 大谷 車の座席に座っている

「さすがに この時間じゃ飛行機も飛ばないか」

▽大谷 無言

古屋

「懐かしいな」

大谷

「そうですか」

古屋

「お前と来たのが ずっと昔のようだ」

大谷

「僕は、ついさっきのように覚えてますよ」

古屋

「そうか」

▽大谷 ここに来る前に、コーヒーチェーンで買ったコーヒーを古屋に渡す

(# フラッシュバック #)

←# 回想 #← 一時間前の出来事

▽大谷 古屋 古屋の車の中

「少し ノドが乾きませんか」

「そうだな。近くに、コーヒースタンドがあるから寄ってみるか」

○コーヒーチェーン店の入口

「僕が買って来ますから、駐車場で待っていてください」

「寒いぞ」

「ちょっと外の空気をすってきます」

○コーヒーチェーンの駐車場

▽古屋 車を止める

大谷
古屋
大谷
古屋
大谷

▽大谷 車を降り、店に入っていく

▽大谷 ジャケットのポケットに手を入れる

ポケットの中に薬が入っていることに気づく

▽大谷 車に戻って運転席の窓をコンコンと叩く

▽古屋 運転席側の窓を開ける

「おまたせ」

▽大谷 買って来たコーヒーを渡す

「サンキュー 寒いから早く乗れ」

「はい」

▽大谷 助手席側に入り、車に乗り込む

→ # 現在に戻る # →

大谷

古屋

大谷

▽大谷 古屋 コーヒーを飲む

大谷 「今日、待ちで偶然 野崎さんに遭いました」

古屋 「野崎か。会社辞めたのは知っていたけど」

大谷 「野崎さん、繁華街でゲイバーのマスターしていました
しかも性病にかかり、あと半年とっていました」

古屋 「そっか、気の毒とは思うけど、自業自得だな」

大谷 「はい。その店で、小村さんに会いました

古屋さんは、小村さんを知ってますか」

古屋 「小村って、たしか、お前のお父さんを一緒に探してくれたやつだったよな」

大谷 「そうです。古屋さんは知らないんですか」

古屋 「ああ、俺には覚えがないな」

大谷 「そうですか。小村さんは、古屋さんのことを知っていました。
古屋さんのこと いろいろ教えてくれました。

古屋

「そっか」

大谷

「古屋さんが、僕に優しくしてくれたのは、僕の体が目当てだったんですか
最初から、そのつもりで、助けてくれたんですか」

「亀山さんとは、どんな関係なんですか？」

古屋

「そっか、隠してもしょうがないな。
確かに、昔、小村と付き合ってたことがある。
そして、沢山の男と付き合ってたことも事実だ」

大谷

「小村さん言っていました。古屋さんに抱かれると、もう逃げられなくなると
僕もそうです。古屋さんと離れたくない。他の男の人と寝てほしくない。
女の人は、もっと嫌だ」

古屋

「悪かった」

大谷

「もう、僕で、終わりにしましょう。古屋さんは もう、誰にも渡さない」

古屋

「何を言ってるだ・だ。あ、あれ」

古屋
大谷

▽古屋 ハンドルから手が離れ、手が下に垂れ下がる」

「力が入らない」

「薬が効いてきたようですね」

▽古屋 ぎこちない動きで、大谷の方を見る

「大谷、何をした」

古屋

▽大谷 ジャケットのポケットから、薬の入っていた袋を取り出した

袋の中は空

大谷

「これ、知ってますよね？ 古屋さんが小村さんに使ったやつ。

さっきのコーヒーに混ぜておいたんです

僕も野崎さんに飲まされ動けなくなり、いろんなことされました

野崎さんに犯されました、僕も発症するかもしれません。

写真も撮られました。もう、ダメかもしれないです」

▽大谷 座席の後ろから スーパーの買い物袋をもってくる

▽大谷 スーパーの買い物袋からローソクを取り出す

ローソクに火を付け、ダッシュボードに蠟を垂らし、

他のロウソクを立てていく

「何してるんだ」

「綺麗でしょ。今晚は、クリスマスですから」

「こんなところで火を使うんじゃない」

「言ったじゃ無いですか、もう、終わりにしましょうって」

○（数時間前）野崎のバー

店の真ん中のテーブルの上に、小村がパンツ一枚だけの姿で、張りつけ状態で寝かされている

▽客 A

▽客 A ニヤニヤしながら小村の股間を触ったり、乳首を舐めたりしている

▽客 A カウンターにいる マスターのところにいく

「マスター 今年のクリスマスは、いいね」

客 A

大谷

古屋

大谷

古屋

野崎

「そつでしよ。ゆつくり楽しんでいつてくださいよ」

▽野崎 火が着いたロウソクの載せた盆もつてカウンターから出てくる

▽野崎 小村の横にすわり、ロウソク立てを並べだす

○古屋の車の中

ロウソクの残りが短くなり、火がダッシュボード近づきかけていた

古屋

「おい！ 大谷」

▽大谷 目を瞑っている。

古屋

「聞こえてるんだろ？」

古屋

「お前は、母さんの分まで長生きするんじゃないやなかったのか

お父さんが一生懸命貯めてくれたお金があつてこそ、

今の大谷が居るんじゃないのか

こんなところで終わつてどうするんだ

自分から命を絶つなんて、俺がお前の親なら許さないぞ

母さんが、どんなに、お前の成長を見たかつた、考えてことあるか

それでも、どちらかを選ばなくてはならなくなり、お前を選んだぞ

古屋

父さんが、どんなに一緒に暮らしたかったか、考えたか」

「大谷 どうなんだ！」

▽大谷 まぶたから涙が零れる

大谷

「僕は、僕は、死にたくない 生きたい
天国にいる父さんや、母さんに、生きているとこ、見せ続けたい」

古屋

「わかった。それが本心だよな もう、二度と、こんなことをするな」

○ダッシュボードに火が燃え移り、目の前が真っ赤になる

○野崎のバー

▽野崎 小村の前に立っている

野崎の周りに、客が群がっている

野崎

「さて、ショータイムといこうぜ」

▽野崎 火の付いたロウソクを持ち立ち上がる

小村

▽野崎 ゆっくりとロウソクを斜めにかたむける
蠟が垂れ、小村の胸の上に落ちる

「あ、熱い」

▽小村 顔を敵めしくし、体をビクビクさせる

▽客達からどよめきが湧き上がる

「いい顔だ。次は、ここだ」

▽野崎 ロウソクを小村のパンツに近づけ傾ける
蠟が垂れる

▽小村 目を瞑る

(バーの照明が真っ暗なる)

▽客 どよめきがおこる

(数秒経過)

○野崎のバー 明かりが点く

Copyright©2026 D&S

刑事 A

刑事 B

刑事 A

▽小村 縛っていたロープが解かれ、テーブルの上にたっている

▽野崎 バーから消えている

○（クリスマスの朝） 空港近くの土手
パトカーのサイレンが響く

▽警官 忙しいそうにしている

「ゲイバーのマスターか」

「不治の病で、余命宣告を受けてたらしいな」

「病苦での自殺で決まりか」

▽警官 担架がブルーシートをかけた担架を運んでいる

ブルーシートから運び出される遺体の腕には、黒ずんだ斑点見えている

○（月曜日の朝） 事務所

▽大谷 出勤して自席に向かう

古屋の席近くを通るとき 違和感を感じる

亀山 「おはよう、大谷君」

大谷 「おはようございます」

亀山 「千里、クリスマスプレゼント、喜んでたわよく」

大谷 「そうなんです。選んだかがありました」

亀山 「ところで、どうしたの」

大谷 「えっと、あそこの席って、」

亀山 「古屋さんのこと？」

大谷 「そ、そう！ 古屋さん」

亀山 「古屋さんが どうかしたの」

大谷 「えっと、古屋さんは元気ですか」

亀山

「何言ってる。古屋さんは元気にきまつてるわよ
ほら、噂をすれば」

▽古屋（別人）ちよっと小太りの、明らかにイケメンとは言い難い
中年男性が歩いてくる

古屋（別人）

「おはよう」

亀山

「おはよう」

大谷

「えっと、古屋さん？」

古屋（別人）

「なんだ、忘れたか。俺以外に誰か居るか」

▽大谷 しばらく間が空く

大谷

「そうだ、古屋さんだ」

亀山

「もう、大谷君たら、しっかりしてよ。

もしかしたら、お兄さんになるかもしれない人なのよ」

大谷

「またあ、からかわないでください」

亀山

亀山

大谷

古屋

小村

「あら？ 千里は本気よ」

「そろそろ初詣は、4人で行きましょね」

「はい」

○夜のビル街

▽小村 ビルの前で、ウィンドの飾りを見ている

「待った」

▽小村 声のする方に振り向く

古屋が立っている

「う、うん」

▽小村 古屋に腕を通し、体を寄せ合い、暗闇に消えていく

「X
接点」
完

Copyright@2026 D³S